
☆☆妖魔封印物語☆☆

灯月公夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

☆★妖魔封印物語★★☆

【Nコード】

N0135D

【作者名】

灯月公夜

【あらすじ】

ある日、かの有名な名門私立校『白羽学院』しらばねがくいんで奇妙な事件が起こり、それを解決すべく、今年入学したばかりの一人のちよつと訳ありな高校生が理事長直々に依頼を受けることになった。――夜の学校を舞台に始まる愉快な学園ファンタジーコメディ！！※注意…この話は一応、コメディーを主体としていますが、ホラーやらファンタジーやらシリアスなどもたくさんあります。それらが苦手な方はお気をつけ下さい。

第1話 私は……私は……（前書き）

この小説を開いてくださり、誠にありがとうございます。灯月公夜と申すものです。

一応、皆様が開いてくださった今作が、僕の処女作となります。なので、少々どころかかなり至らないところがあるかと思えます。特にはじめのほうは、それが目にかけて酷いところがございます。後半に行けば行くほど、その点は改善されていると思うのですが、残念ながら現段階ではまだ最初の方は直しきれいていません。ちよくちよくと直しつつ、のろまな亀ながらも最後まで執筆していきます。

時々重い話もあるかと思いますが、それでも僕の持てる限りで頑張りたいと思います。

どうか、このひと時が楽しいものでありますように……

第1話 私は……私は……

「まいたなあ」

そう静かに私は思わず溜息を零してしまった。

只今の時刻は午前零時を少し回ったところ。

そんなとても遅い時間帯に私は今年入学したばかりの高校の校門の前に立っています。

——袴姿で……

——それも、神社の巫女さんが着る赤い袴で……

もちろん、こんな時間にこんな犯罪の匂いのする変態衣装を着ているのもそれなりのワケが有るわけで。

それというのも、私の家は由緒ある有名な神社で、昔から妖怪や物の怪の類といった霊的悪霊の退治、人や土地に取り付いてしまった霊の供養、浄霊を生業として来ました。

そのため私達一族は人の倍以上に鋭い靈感と霊力を生まれながらにして身に付けています。それが原因なのか、祖先の誰かが禁忌を犯したのか理由は定かでは無いですけど、私達一族には昔からある“呪い”がかけられています。

一族全員例外なく……

もちろん、私自身も小さい頃から霊や妖怪の類は日常的に見えていましたし、何度も浄霊や退治をしたこともあります。

それから当然のごとく私も一族からの“呪い”を受けています。たぶん、ですけど。

それはつまり、私の場合はその“呪い”が一族の中で唯一例外な『不確か』だという事です。そして、だからこそ私は“忌み子”と幼少より呼ばれているわけなんです。

まあ、その原因が私の霊力が強すぎるのせいなのか（母上曰わく、

『靈力』だけならば私は歴代でもトップクラスだとか、呪いが解けたのかは理由はわかりませんが、とにかく私は小さい頃から“忌み子”と言われ、母上を除く一族のほぼ全員から奇異の目で見られて来ました。今はそんなもの慣れてしまいましたけどね。

更に、家に幾つかあるしきたりのせいで散々笑われたり、バカにされたり、恥ずかしい思いをしたりして来ました。

さて、コホン、えゝこれで私が、何故こんな遅い時間に学校の校門前にいるのか判ってもらえたかと思います。

つまり、私の通っている高校に出る、人に害をなす靈の退治、いわゆる悪靈退治を依頼された訳なんですよ！

現在最強と言われる『あの』理事長さまに……



『ピン、ポン、パン、ポーン、はゝい生徒の呼び出しをしまゝす。1年C組の神寺光くゝん。直ぐに理事長室まで来てくださゝい。至急頼みたいことがありますっ！』

その日、私は午前中の授業が終わって、これから昼休みになるときに、突然放送で呼び出された。

そのため、私は何事かと訝しみつつ、内心では相当焦りながら急いで理事長室まで駆けて行った。

私が通っているの高校は、私立^{しりばね}白羽学院といます。この学院は、かの世界的にも有名な超巨大コングロマリット、白羽グループが管理・運営を行っており、その多大なる財力によって10年ほど前に設立されました。白羽学院は、創立して間もないにもかかわらず、その学力・スポーツ・就職率などどれを取っても日本の頂点に君臨

していて、今やその知名度は日本のみならず世界中に名を轟かすまでに至っています。

更に、この白羽学院を管理・運営している白羽グループもまた、世界中にその名を知らない者はいないとまで言われ、その影響力は今や日本と肩を並べられるとまで言われています。現に白羽グループの財力は日本の国家予算と同額かそれ以上と言われ、ITなどの電気製品をはじめとした鉄道などの交通機関、家具や食品といった日々の生活において必要不可欠なもの、デパート、不動産、マルチメディアに海運業、全ての産業、更には政界にも強力無比な影響力を持っています。ハッキリ言って、日本人の約40パーセントの生活は白羽グループによって支えられ、生かされていると言っても全く過言ではありません。

そんな世界に名だ駆る白羽グループが管理・運営をしているここ、私立白羽学院。

当然ながらこの学院の最高権力者である理事長も白羽グループがやっているのですが、なんとその任に就いているのが、現当主の息子の妻である白羽彩花さんしらばねあやかご本人だそうなんです！

今私は理事長室の扉の前にたどり着いたのはいいのだけれど、そこで立ち往生してした。理事長室の堅く、重量感のある、見るからに高そうな扉の前で遂には行ったり来たりとせわしなく動いてみたりする。

理由は簡単！

なんてたって、天下の白羽グループの次期総裁の奥様が、何の前触れもなく突然私のことを名指しで呼んだのだ。

当然ながら頭の中で廻っているのは、ここ最近の私の行動。

だって、天下の白羽グループの奥様が直々に、しかも名指しで呼んだんだよ！

何か私がイケないことでもしたに違いないじゃないですか！

あゝ、どうしようどうしよう、どうしようー！！
で、でも！ 私、何も悪いことしてないし、至って普通の生徒の
ようにしていたはず。

……もしかして、あの事がバレちゃったのかな？ いやいや、ち
ゃんと許可は取ったはず！

だとすると、何か私は凄いことをしたのでしょいか？ 例えば、
入学前の宿題で描いた絵が全国高校コンクールで金賞を受賞したと
か、能力を認められて将来は白羽グループで働かないかとか……

いや、絶対ない！！ そんな事は現実的に考えて絶対対にありえ
ませんっ！！

なら、どうして私は呼ばれたんでしょうか？

あー、どうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう
どうしようどうしようどうしよう………どなたでも構
いませんっ！ 神様仏様天照大神様、どなたか私を助けてください
！！

なんて、ひとり扉の前で悶々と頭を抱えていると、不意に、ガチ
ヤ、という音とともに目の前の扉が開かれた。

思わず私はその場に凍り付いて身動きがとれなくなってしまう。

しかし、扉の中から出てきたのは、ぱっと見、中学一年生にも、
ヘタをすれば小学生にも見える幼そうな少女だった。

と言うより小学生じゃないですか、これは！！

身長は、私がおよそ160前半で、その私よりも二周りほど小さ
いから140前半と言ったところだろう。

顔は見事なまでに整っていて、見るからにして幼女に見える童顔
だった。髪は、背中あたりまで伸びている髪を後ろで一本に束ねて
いる私と違い、ストレートなセミロング。それがなた、妙に大人っ
ぽい印象を与えるのだが、この幼顔にも関わらずまったく言ってい
いほど違和感を感じられなかった。むしろ、それが当たり前とい
った印象を受ける。そして、思わず抱き締めたくなる程に、かわい
らしい。

そうやって扉から出て来た少女を観察しながら、私はまだシヨツクが抜けず固まったままだった。

そんな私を見て、その少女はにっこりと微笑んだ。

うわあ、バックに花が咲いてます！

私とその少女に見とれていると、彼女は微笑んだ表情のまま私に声をかけてきた。

「こんにちは。あなたがヒカリ君ね！」

ああ、声もとってもかわいらしい。このまま聴いていたい……じやなくて！

「あっ、はい！　そうです」

「やっぱりー！　どうぞ。中に入って」

そう言って目の前の少女は扉を更に大きく広げて脇によけた。

「は、はい。あの……失礼します」

私は言われたとおりその少女の隣を通り扉の中に入ってまたもや驚き、思わず立ち止まってしまった。

扉の中はとても広く、高級そうな年代物がズラリと広がっていた。しかし、それでいてどれもとても質素で落ち着いた空間が私の目の前に広がる。

中でも特に目を引いたのが、入って目の前にある大きな理事長の机だった。なんだか見ているだけでその雄々しいオーラに吞まれて仕舞いそうになってしまう。

「……凄い」

「うふふ、ありがとう」

いつの間にか立ち止まっている私の隣にあの少女が立っていた。
ここで私は今まで疑問に思っていたことをその少女に尋ねてみる
ことにする。

「あの、ところで理事長はどちらにいらっしゃるのですか？」

そう、それだ！ 一体私と呼ばれた理事長はどこに行かれたのだ
ろう？

まさかとは思うが、私が余りにも遅かったから怒ってどこに行っ
てしまったのではないだろうか……

だったら非常にマズイ！ 15歳にして人生最大のピンチ！

「あらあら。じゃあ、今、あなたの目の前にいるのは誰かしら？」

はい……？

「じ、じゃ、あなたはもしかして……」

まさか……だってどう見ても小学生女子にしか見え——

「うふふ、正解♪」

——ないですよ、ってマジですか！！

「え、や、いくら何でも違いますよね！ だって、こんなに若くて、
可愛らしくて、どう見たったて小学生女子のあなたが——」

しまった！ 気が動転して、つい本音が……

ドゴオオオオオオオン！！

「——った！」

「もう！ オマセさんね！」

そう言いつつも、その少女きゃっきゃと手を頬に当てて身をくねらせ始めた。

や、今更顔を真っ赤にして頬に手を当てながら言われたって、私の頭を殴る瞬間の目がマジでしたって！！
それにわざわざジャンプしながら思い切り殴りましたよね！！

「あれ？ ヒカリ君大丈夫？ なんか頭から煙が上がってるよ？」

それは今し方、あなたに頭が膝にぶつかるくらいに思い切り殴られたからです！！ ……とは流石に……

「はい、大丈夫ですよ……頭が割れそうなほど痛くて熱いですが、何とも無いですよ」

「良かった♪ 大丈夫そうで」

くっ、よくも私の精一杯の皮肉をいともたやすく……、と思ったのもつかの間。目の前にいる少女の綺麗な笑顔から、一瞬得体の知れない寒気を私は感じ取った。はつきり言って、普通の一般人が出る領域ではないとさえ、思わずにはいられないほどの。しかし、それはそれこそ一瞬の事で、次の瞬間には綺麗さっぱり消えていた。き、気のせいですよね？ そ、そうですね？

不覚にも少し怖気づいてしまった私は、そう心の中で冷や汗をかいた。

「それじゃ、そろそろ立ち話もなんだし、あそこの椅子に座ってく

れる？」

そう言って、彩花^{あやか}さんは理事長の大きな机の前に用意してある椅子を指差した。

「分かりました」

反対側で彩花さんもいかにも高級そうな椅子に静かに腰掛けた。
うわあ。流石は天下の白羽グループの次期総裁の妻が座る椅子だ。
見るかに豪勢で座り心地の良さそうな椅子からは、威厳のようなものを感じずにはいられない。そこに深く腰掛けた彩花さんは、正直言って体格からして似合っていないと言わざるを得ないと思います。
むしろ、ちっちゃな子が、おっきな椅子に足をぶらつかせながら座るさまは、すこぶる和むものがある。

それを思いつつも、いいなあ、と私は心中で呟いた。本音をいうと、一度で良いからあんな椅子に座ってみたいものです。

などと私が考えていると、花を後ろで満開に咲かせながら、笑顔の彩花さんが口を開いた。

「因みに、この椅子をあなた“ごとき”に指一本触れさせはしないわよ」

その言葉に固まる私を他所に、それから彩花さんはまた、にこつ、とほんわかとした天使を思わせる満面の笑みを浮かべた。

って可愛い笑顔見せられても！ と私は思わずにはいられなかった。

というより、彩子さん何気に酷くないです！ 確かに少し違うけど一般市民である私には到底手に入れることの出来ない高級な物なんだらうけど、触るぐらいしたって――

「因みにの因みにこの椅子、九千万だから♪」

——スミマセン！ 私にはとてもじゃないけど、触れることの出来ない代物です——ていうか、何さつきからこの人私の心読んでいるんでうか！！ もしや、この人。いわゆる、エスパーとか呼ばれる人なのでしょうか？

「残念ながら、私はエスパーでも何でもないわよ」

凄。またこの人、人の心読んでるし……って、え？ エスパーじゃないの？ じゃ——

「じゃどうして私の心が読めるんですか？」

「決まっているじゃない。読心術よ読心術。きみの考えなんて、すべてお見通しなのよ」

そう彩花さんは嬉しそうに暴露してくださると、またにっこりと微笑んでくれた。

うわぁ、怖っ！！ 何が怖いってあなたのそのキュートな笑顔の裏が物凄く恐いのですが。わかりました。彩花さんが、いわゆる『腹黒』なんですね。今の一言で、おなかの中が真っ黒な気がしましたもの。典型的な綺麗な花には毒があるという奴ですね。小学生女子みたいな姿なのに、恐ろしいったらありやしません。人は見かけによりませんね。

「ヒ・カ・リく〜ん？ 教えなかったかな？ 私、きみの考えている事が“全部”お見通しだって。もう、筒抜けも筒抜け。ばっちりよ？」

笑顔は決して崩れない。

けれど、後ろに悪魔が眼光をぎらつかせて私を睨んでいます!!
寒い寒い寒い寒い!! なんですか、この殺気を含んだ恐
ろしい威圧感!! と、とにかくこれはもう全力で謝らなければ

「スミマセンスミマセンスミマセンスミマセン!! 私
ごときが大それた事申し上げました!! 本当に本当に申し訳あり
ません!! どうかお許し下さ——」

「やだなあ、そんなに謝らなくても許してあげるよ!」

よ、良かった……

「あ、ありがとうございます——」

「た・だ・し、次はないからね♪」

机の上に置いた両手に顎を乗せた彩花さんが極上の微笑を浮かべ
ている。

「は、はい……了解しました……」

私はこの瞬間、絶対にこの人の敵に成るまいと誓った。

「そんな事より——」

私がこの人の恐さを感じ、二度と逆らうまいと思っていると、突
然彩花さんが私に話しかけてきた。

「ヒカリ君もそんな格好で大変ね」

「ええ。まあ、慣れっこですし……それにもう諦めてますから……」

もちろん彩花さんの言っている『そんな格好』とは、今私が着ている制服の事です。

別にどこの学校でも大して変わらない女子が着るスカートを着用しているのですが、一つ問題があるんです。

そう……私がこれを着るにあたってとても大きな大きな問題が……ひょっとしたらこれまでの会話で気がついた方もおられるのでは無いでしょうか？

その問題とは――

――私が、“男”だと言うことです。

そう！ 私は正真正銘男なんです！！

例え、街を歩けば、道行くすれ違う男共の10人中9人がまず確実に振り向いてこようと！ 今までにナンパされた数が軽く二桁代だとしても！

私は正真正銘の男なんだ――！！！！

ゼエ、ゼエ、一応言っておきますが私に女装癖は無い！！ 断じてありません！！ 女子生徒の制服を着ている時点でアウトとか、まったく聞こえません！！ 聞こえないったら聞こえません！！ ちなみに、あっちの“気”もあります！！ 全身全霊で否定します！！

じゃ、どうしてこんな服を着ているかって？

名誉ある御家のしきたりだからです……

すると、ある疑問が出てきますね？

『一体何故、そんなおかしなしきたりがあるのか』と……

別に、女物を着なければならぬ、っていうしきたりなんて本当は無いんですよ。

ただ、皆さんは覚えて頂けているでしょうか？ 私には遠い先祖から続く“呪い”があることを……

その呪いの名は『女爾生呪』

つまり、私の家には女性“だけ”しか生まれないんです。でも、産まれてきた後継者である私は男の子でした。

そのため、当時は一族総出の物凄い騒ぎになったそうです。なにしろ何百年ぶりの男。

当然のごとく呪いが解けたと喜ぶ者（しかし実際、私はこんな顔立ちや女の子みたいな体つきだから、一応呪いは受け継いでいるのであろうと思われます）もいれば、なんの前触れもなく産まれてきた私を忌み子だとして悪く言う者もいました。

そのため、私に対する陰口やあからさまな嫌がらせを受けたことも多々ありました。加えて、私の大叔母様が私を『男などとは認めん!!』とかなんとか言って、これまで全ての一族の女性が行ってきた事をしきたりとほぼ独断で決めてしまったそうです。

お陰様で私は今こんな有様ですし……

それに——と私は過去を振り返る。

小学生の時。

「うげえ!! 気持ち悪い!!」

「なにお前、女みたいな格好してんだ? ヘーんたーい」

「イヤーい、イヤーい!! おとこ女、おとこ女」

「違うよ! それじゃ、男みたいな女になるじゃん! コイツの場合はおんな男だよ!!」

「「「そっか」」」

「「「イヤーい、イヤーい、ヒカリのおんな男!!」」」

中学生の時。

「うわあ！！ コイツ男のくせにスカート履いてるぜ！！」
「ええ、キモい！！ ちよっと、こっちに近づくなよ！！」
「わあ、可愛いでちゅね、女装好きのボクチャン！！」
「ねえ、ねえ、キミかわいいねえ。名前、何ての？」
「止めとけ、止めとけ。コイツ、男だぜ！！」
「えっ、あっ！！ そうだった。ごめんね、光チャン！！」
「「ギャハハハ！！」」

以上、その他諸々。

これが私の小・中学生の頃の生活の片鱗です。

ハア。もうため息と涙しか出てきませんよ。

でも、よく頑張った私！！ よくぞグレずに今日まで生きて来た

！！ エラいぞ、私！！ 我ながら抱き締めてやりたいぞ、私！！

——と、自分自身を励ましてみるも、なにやら無性に空しくなり、私は先程よりも更に深く思いたため息をついた。

そもそも、どうして私がこんな常識はずれなことが出来るのかと言うと、御家の関係も少しありますが、目の前にいる白羽学院理事長である彩花さんがコレを許可したからです。

この学校は主に理事長である彩花さんの独断と気まぐれで管理されていて、行事ごとなんかその殆どがそれで、ついこの間なんか、新入生を記念して『白羽学院。全校生徒一斉ダンスパーティー』などといったダンスパーティーが夜中の12時頃まで開かれる、と言うことがありました。

なんと言いますか。この学校は『理事長がこの学校の全てのルール』みたいな感じですよ。

時々、『良いのかコレ？』と思うときもありましたが、最近では『これはこれで面白いかも！』と思うようになって来ました。

「それじゃ、そろそろ本題に入りましょうか」

「はっ、はい!!」

私がこれまでの人生を振り返って独り静かに涙していると、さっきまでとは打って変わって真剣な表情になった彩花さんが同じく真剣な声色で話し始めた。

「ヒカリ君。最近ウチの生徒達や先生が“事件”に巻き込まれ“原因不明の病”に掛かって学校を休んでいることは知っているかしら？」

「……はい。あの何人もの人達が謎の糸に巻き付かれ、衰弱仕切って発見された事ですね」

私が確認のため尋ねると、彩花さんはゆっくりと頷いた。

もちろん私はその事は知っている。

数日前、ある警備員が体中に白くてネバネバした糸のような物に巻き付かれた状態で見つかった。彼は学校の夜の警備を行っていたそう。彼に目立った外傷は無く、無傷同然であったが、顔は血の気を失い死人のように青白く、体の至る所を震わせ仕切りに『……真っ赤な目が……真っ赤な目が来る……』と呟いていた。誰の目から見ても彼は衰弱しきり、今にも死にそうだったそう。

原因は不明。

どんな調査も検査もその原因を見つけることは出来なかった。

警備員が見つかった次の日、また新たな犠牲者が見つかった。今度は三年生の女子生徒だった。彼女は夜、忘れ物を取りに学校に戻り、それっきり何時になっても戻らなかったため、心配した彼女の両親が学校に電話しその時発見されたそう。彼女もまた、全身に糸のような物が巻きつき、警備員と同じように衰弱仕切っていた。

そして、それから今日までに毎日のように次々と新たな犠牲者が出ている。

「こっちとしても、以前よりも警備を強化しているけど全く持つて効果がないみたいだし、逆にその警備に当たっている警備員さん達が“原因不明の病”に掛かってしまう始末。加えてその時被害者がどういう目に合い、何をされたのかもその病についても全くもって分からずじまい。……で、ひょっとしたらと思ってあなたに頼もうと思ったの」

「……つまり、私にこの出来事の真相を見つけ、この事件のの根源であろうその正体を突き止めて、場合によっては“退治”しろ、ということですね？」

「そう言うこと。お願い出来るかしら」

ここまで話を聞く前に、それを頼まれると思いましたよ。でも、もう私の心は決まっている。

「分かりました。今夜中にでも調べてみます」

「ごめんなさいね。無理なことを頼んでしまって」

「いえ、気にしないで下さい。私も前々から気になっていたので、彩花さんに頼まれなくても近々勝手にしていたと思います」

「そう。……それなら、お願いするわ。くれぐれも危ないマネはしないだね」

「はい。ありがとうございます。……それでは失礼します」

私は椅子を立ち、彩花さんに軽く礼をした後、ドアのほうへ体を向ける。

「ええ、時間を取らせてしまって、ごめんなさいね」

「いえ、そんな。……では、明日改めて連絡に参ります」

「そうね。そうして貰えると助かるわ」

「はい。では、失礼します」

私は入ってきたドアのところへ歩いていった。

ドアの取っ手を掴み開けようとして私はあることに気がつき、後ろにいる彩花さん尋ねることにした。

「ところで、彩花さんはどうして私がそういうことが出来ると知っていたのですか？」

すると、満面の笑顔をしながら、右手の人差し指を立てて左右に振りながら、

「チッ、チッ、チッ。白羽グループ情報網を舐めて貰っちゃ困るわね」

そして、今度こそ今まで以上の微笑を称えつつ答えてくれ。

そんな彩花さんを見て、私は背筋に何かとてつもなく嫌な寒気を感じつつも、失礼します、と一言言って理事長室を後にした。



それから、今に至る。

なんだか我ながら、長い回想でしたね。

「よし！ 何はともあれ、頼まれたからには頑張らなくっちゃ！！」

私は頬を2、3回叩いた後、決意を新たに校門を開けて夜の闇にすっかり溶けきった校舎へ向かって歩き始めた。

その先に、何が待っているかは知らずに……

第1話 私は……私は……（後書き）

ここまで目を通してくださり、ありがとうございます！！

既に修正する前の話を読まれたことがある皆さまに気に入って貰えるよう頑張ってちよくちよくと治して行こうと思います。

また、初めてこれを読んでくださった皆さま。

本当にありがとうございます。更新はつきり言って亀やカタツムリ並みに遅いです。下手をすれば、軽く一ヶ月ほど放置してしまうようなほど、僕は書くのが遅いです。それでも、僕は僕なりに全力でこれを書ききろうと思っています。もしも気に入ってくださったのなら、完結までお付き合いしていたあげると、大変ありがたいです。どうぞ、よろしくお願いいたします。

感想・評価などは、随時募集しています。ほんの一言でもいいので、皆さまの感想をメッセージのほうなどに送っていただけると、ものすっごく嬉しいです。本音を暴露しますと、楽しみで楽しみでしかたありません（笑）

これから幾つか話を直して行きますが、前書きと後書きは書き換えるつもりはありません。ご了承ください。

それでは、ここまで読んでくださり、誠にありがとうございました！！

第2話 我等が生徒会長参上!!

夜の学校という場所は、一つの異界だと思う。

辺りはしんと静まり返り、それが少し耳が痛い。一日の半分以上を大小さまざまな喧騒を立てている学校は見ると影もなく、そのせいか背中が寒く感じる。音が聞こえるのが当たり前と思える空間に、自分が立てる尾と以外聞こえないというのは、不気味で、寂しい。世界から音が消え去り、この世界にひとり残されたような錯覚を覚えずにはいられない。そして、それと同時にダレカに自分の事を見られている気がしてならない。少し先の目の前の暗闇からはダレカが手招きして舞っているような気がしますし、寒い背中からは一心に視線を感じる気がする。

まっ、現に私を見ている輩もいますしね。

ただ、普段通っていて見慣れている風景が少しだけ違うというのは、それだけギャップが激しく、自分の知らない世界に取り残されたような気がして、まったく『違う』のだと思う。

それはつまり『知っている』のと『知らない』との差のような感じがしてならない。

そんな事を考えている間に夜の学校に入ってから早、十分が経過していた。一つ一つ教室を開けて中を確認していく。でも、未だに何かが襲って来る気配すらなく、全くと言っていいほど異常はなかった。

ガラガラガラガラ、と普段なら気にかけるまでもない教室の扉の音が、妙に膨張して聞こえる。

中を覗き込んで確認する。

よし。ここも異常無し。

ふう、と少しだけ緊張を和らげ胸を撫で下ろす。何も起きないに越したことは無いけど、これほどまでに何もないのはちょっと拍子抜けに思う。

「ウゴクナ」

その時、背後からのドスのきいた声と共に私の肩になにやら生暖かいモノが触れた。

「——ッ！」

突然の背後からの声に息が詰まった。後ろは振り返れない。心臓は喧しいほど鳴り響き、收拾がつかない。

静かに冷や汗が流れる。まったくと言っていいほど気がつかなかった。

こんなに近づかれるまで靈気を感じ取れなかったなんて……！

前を向いたまま、後ろの気配を探る。それでも靈気は、まったくと言って感じ取れない。それが内心の焦りを加速させる。

けど、ここでようやく私は気がついた。

私は、急いで後ろを振り返った。

「ふふふ。こんばんわ、ヒカリ」

そこには、誰が見ても間違いなく見惚れてしまうほどの美人さんがいた。

最も『美人』よりは『美少年』のほうが容姿としてはしっくりと当てはまるような女の子だけだ。

失念してた……！

暴れていた心臓を落ち着かせながら、私は頭を抱えたかった。正直、私は自身に呆れてしまった。

彼女の存在に気がつかなかった理由が今になって分かった。

要は先入観だ。敵は靈的な存在という、予測。この場には人が誰もいないという、思い込み。これが彼女をすぐに知ることが出来な

かった原因だ。

……まったく。情けありません。

これが戦場だったら、私はまず生きていませんね。まだまだ修行が足りないという事ですか。

しかし、それもそこまで、それらの思考を一旦頭の隅へ押しやり、認めた『彼女』を見て声を荒げる。

「か、会長！！ い、いきなり何するんですか！？　と言うより、どうして会長がこんな時間にここに居るんですか！？」

「ああ、それ？　別に大した理由もないけど、ただたんに生徒会の仕事か思いのほか時間がかかった、ってだけの話よ。まー、遅くなったんで、本当は帰ろうかと思ったんだけど、せっかく夜の学校にいるんだから、探検でもしようかなっておもってね。その最中でヒカリを見つけて声をかけたってことよ。―――そんなことより」

そう言うと、会長は私をジロリと見てきた。

「―――何かしら？　その格好は。仮装か何か？　と言うより、犯罪の匂いかがプンプンするわよ。それに『こんな時間に』と言うならお互い様ね。貴方こそどうしてこんな夜中に巫女さんが着るような赤い袴なんか着て、学校なんか居るのよ？」

し、しまった！！

私は顔が、カァー、と熱くなっていくのを感じた。

はっ、恥ずかしーい！！　しかも、よりにもよって（他の人よりはましかけど）この学校の裏のボスと言ってもいい会長に見つかるなんてえええええ！！

しかし、ここで素直に理由を説明するわけにもいかないし……………ここは何とかして誤魔化さなければ……………

「へえ、い、いや、これは、その……」

「どうしたの？ 何だかスッゴい汗よ？ ひょっとして、会長である私に言えないことかしら？」

私が視線をあらぬ方向に向け、大量の冷や汗をかきながら必死で言い訳を考えていると、会長はこれでもかと言わんばかりにスッと目を細め口元に笑みを称えながら、私に顔を近づけて来た。

「やつ、こっ、これは、だからその……」

「『だから』、何？」

さらに、会長の顔が顔に会長の吐息がかかるほど近づいて来た。

顔に彼女の吐息がかかり、さっきとはまた違った意味で顔が真っ赤になってしまう。

「だっ、だから、その………そっ、そんな事より今の夜の学校はとっても危険なんだから……！ いくら会長でもこんな遅くまで学校なんか居ないで、早く帰った方がいいよっ……！」

私が少し強引に話を逸らそうとしたら、会長は顔を離し『ハァ』と深くため息をついた。

「ヒカリ……何度も言っているだろ、私のことは真琴まことと呼べと。なのに貴方は『会長、会長』ばかり……」

「えっ……ですが、真琴さんは会長なのでそう呼びするのが道理かと思ひまして……」

「なら、私が許可します。ヒカリ、これからは私のことは『会長』ではなく『真琴』と呼ぶように……」

「えっ、えーと……で、でも、会長？ 流石にそー」

「『会長』じゃないって言っているでしょ！！ 真琴よ、真琴！！」

「い、いや……でも……」

「ま・こ・と・よ」

そんなまともや鼻先が当たりそうな超至近距離に顔を近づけて来て、有無も言わせないような笑顔で、しかも一字一字区切りながら言わなくなった……

説明が遅れましたが、この人の名前は白羽しらばね 真琴まことさんと言います。

苗字からわかるように彼女は彩花さんの実の娘で、三人姉妹の長女だそうです。

聞いた話によりますと、他のお二人も真琴さんに負けず劣らずの美少女だとか……

ともかく、真琴さんの凄いところは、もちろん天下の白羽グループの血を受け継いでいるのもそうですが、それだけでなく、勉強をやらせれば常にトップ。知識量はハンパなくあって、彼女に尋ねればほぼ100パーセントの確率で答えが返って来ます。更に、スポーツをやらせれば球技は勿論のこと、その他もアスリート顔負けの実力の持ち主。特に格闘技系が得意で、日本の全国大会で優勝経験があるのは空手をはじめ、合気道、柔道、剣道。

外国の武術では、ボクシングにキックボクシング、ムエタイ、テ

コンドー、カポエイラ、更にはフェンシング、e t c. ……

その他にも、杖道、居合道、古武術、手裏剣、ヌンチャク、人身投げ、馬術に致までほぼ完璧に身に付けています。

加えて趣味も多才で、炊事、洗濯、裁縫、料理はもちろん出来て、特に料理何て趣味の域を軽く越える腕前だし、音楽や美術などの芸術関係も一級品。そして、華道や茶道もこなせるそうです。

まあ、他にも挙げたらキリが無いのでこのくらいにしておきます。こんな凄い特技を沢山持つてる真琴さんですが、人としても素晴らしい人で、人に対して常に自分の立場なんて気にせず接することが出来る人なんです。そのため、あらゆる年齢の人々に好かれ、絶対の信頼が置かれています。

だから、今年入学したばかりの真琴さんが、前代未聞の高校一年生で『白羽学院生徒会長』という学院トップの座に着いているのもしつかりと肯けます。

そういえば、私は何故か真琴さんにとっても気に入られています。だから、顔を合わす度に今みたいに『真琴』と呼ぶようにと言われています。

私としては、自分の立場と彼女の立場を考えて『会長』と呼びたいのだけれども……

あれ？ そういえば、いつから私は真琴さんに名前と呼ぶように言われているんだっけ……………

ああ！ そうか！！ そういえば、入学して間もない頃、他校の不良に不本意ながら“女”として絡まれて貞操の危機に陥った時に、偶然通りかかった真琴さんに助けてもらったことが有ったんだっけ！！ その時、思わず術を使っちゃって焦ったのなんのて…………… そう、あの時は焦りの余り不覚にも真琴さんが『白羽』だと気付かなくて図々しくも『真琴』と呼んでしまったんだ！！

そうだ！！ それからだ！！ 彼女が私に名前と呼ぶように頼んだ（強制している）のは……………

「……り……いて……、ねえ、ちよつと聞してる!!」
「へえ? ……あつ、ああ勿論聞いてますよ、会長!」

イケナイ、イケナイ。全く聞いてなかった。

「だから、会長じゃなくて真琴と呼びなさいと言っているでしょ!」

「はっ、はひい!! まままま真琴さん!!」

私が真琴さんの凄まじい剣幕に驚いて、思わず名前を呼んでしま
うと、『よし!!』と嬉しそうに頷き、ようやく顔を元の位置に戻
してくれた。

こっ、怖かった………
………あつ………

その時、私は今までに感じたこと無い気配を感じた。

悪霊や妖怪の類とは明らかに異なり、まるで、冷たい触手のよう
なもので、体の内側からじわりじわり浸食されていく………そうい
った感覚………

何処までも冷たく、深く、そして残酷。

耐えきれず、私はその場に片膝を着いてしまった。

私の手足は自然に震え、額には汗が浮かび、次第に息も荒くなっ
てきた。

あるのは、恐怖、憎しみ、そして絶望だけだ。

「えっ!! ちよつ、ちよつと!! ヒカリ一体どうしたの?!」
「しっかりしなさい!! ヒカリ!? ヒカリ!?」

私がいきなりこんな状態になってしまったからなのか、目の前で

あたふたしながら、真琴さんは心配そうな声を出した。

「…………だ、い…………じょうぶ…………ですよ…………真琴さん…………」

私が何とか絞り出した声は、途切れ途切れで大丈夫とは到底思えないほど、弱々しかった。

「そんなわけ無いじゃないの！！　ちっとも大丈夫そうじゃないわよ！！」

それは案の定、彼女を安心させるどころか、更に不安を煽っただけだった。

《…………タ…………ス…………ケテ…………》

突然、脳内に助けを求める声が響いた。

誰かが襲われている！！

その声を聞いた瞬間、恐怖は殆ど消え去り、逆に私自らに怒りを覚えてきた。

私は一体何をしにここに来たんだ！！　助けないと！！

私は未だ震える、自分の手足をしっかりと叱りつけ、立ち上がった。

そして、すぐさま声のした方へ向かって駆け出した。

「！　ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！　どこに行くの！？　ねえ、ヒカリーー！！」

後ろから真琴さんの慌てたような声が聞こえてきたが、理由を話す暇なく、一刻を争うので、心の中で謝りながら、後ろも振り向かず走っていった。



「ハア、ハア、ハア、――」

確か……この辺りから聞こえてきた気がするんだけど……

真琴さんと居たあそこから、ここまでほぼ全速力で駆けってきた。

ここは、校舎の裏。

辺り一面にうつそうと生い茂る木々で覆い尽くされている。

しかし、辺りを注意深く見回しても助けを求めている声の主は見当たらなかった。

ここへ来る途中、あの冷たい感覚は跡形もなく消え去っていた。

私の脳裏に嫌な予感がよぎる……

私は、その嫌な予感を振り払うため頭を左右に振った。

「?!」

その時、目の端に何かが映った。

すぐさま駆け寄ると、それは白いネバネバとした糸のようなモノだった。

そして、それは私の前方……つまり、校舎の裏のうつそうと生い茂った木々の方へ、奥深くに入って行く形で点々と付いていた。

まるで、狩人が獲物を蛇のごとく追いかけているかのように……私はその方向へ、辺りに注意を払いながら慎重に進んでいく……

そして、見つけた……

そこは、他と比べて明らかに白い糸の量が多く、そして、そのほぼ中心には無惨にもバラバラにされた二宮金次郎の像があった。

この像は本来なら、白羽学院のただっ広いグラウンドの前に在るはずで、こんな所に在るべき物じゃない。

それがここにあるということは、答えは一つしかない。

それは、この像自らここまで歩いてきた、と考えるに他なりません――いや、この状況を観るにここまで逃げて来たのか……

別に私はふざけている訳ではありません。

皆さんは、人形や人の形をした物に魂が宿ることがあると知っていますか？

人形や人の形をした物は時に、人と同じような魂を持つことがあります。それも、長い年月の間、人間と共にしてきた物は特にその傾向が強く観られます。

よく、学校の怪談なんかで出てくる、生きている人体模型、笑う理科室のガイコツの模型、校庭を走る二宮金次郎像もそういった関係のものです。

そして、私の目の前で無惨にもバラバラになっているこの二宮金次郎の象もそんな魂を持ってしまったモノの一体でした。

私はその場にしゃがんでバラバラになってしまった二宮金次郎の像の頭部を両手で持ち上げ抱え込む。

「ごめんなさい……………」

私はその二宮金次郎の像に心から謝った。

例え人間でなくても、その魂や心は人間と大差ありません。むしろ、彼らは人間よりもより人間らしい純粋な心を持っています。

「…………ごめんなさい……………」

私はもう一度、目の前の像に心から謝った。

自然に私の頬に涙が伝ってくる。

彼を助けられなかった事と、あの時、怖じ気付いて全く動くことの出来なかった私自身が悔しくて悔しくて、憎らしくって私は思わず涙を流してしまった。

しばらくして、私は彼の頭部を抱えたまま、彼を捕まえていた白いネバネバとした糸を調べ始めました。

「……これは何だろう？ ……パツと見は蜘蛛の糸のようだけど………こんなに強い妖力で作られているのは初めて見た………一体、どんな奴なんだろう………この糸といい、さっきの感覚といい、今まで私が退治してきた妖怪とは訳が違う………」

「キヤアアアアアアアアアア！！！」

その時、突如、真琴さんと思われる悲鳴が校舎の方向から聞こえ、夜の白羽学院を切り裂いた。

私としたことが、迂闊だった！！

彼を襲った“ナニカ”が、まだこの辺りに居てもおかしくない。すると、この悲鳴は真琴さんが彼を襲った奴に襲われている合図かも知れない！！

「……クソッ！！ ………」

私はすぐさま、真琴さんの悲鳴が聞こえた校舎の方へ全速力で駆け出した。

真琴さん、無事でいてくれ！！

第2話 我等が生徒会長参上!! (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます!!

前回は余りにも説明分ばかりだったので、今回は出来るだけ減らして少しは小説らしくしたつもりです。

評価や感想、メッセージ、誤字脱字等がありましたらお願いします。どんな些細な事でも構いません。よろしくお願いします!!

それでは改めまして、ここまで読んでいただきありがとうございます!!

第3話 二人の出逢い（前書き）

今回は初のバトルシーンを書いてみました！！

うまくキャラクターが動いてくれているかどうか分かりませんが、私的にはとても良く出来たと思っています。

注）少々下品な表現があります。苦手な方はお気をつけ下さい。

第3話 二人の出逢い

「!!!? ちょ、ちょっと待ちなさいよ!! どこに行くの!?!? ねえ、ヒカリーー!!」

いきなり走り始めた彼を呼び止めようとしたけれど、彼はこっちを振り返ることなく走り去ってしまった。

「もう!! 一体何だって言うのよ!!」

わたしはその場で軽く地団太を踏んだ。

「少し、からかいすぎたかしら」

わたしは少しだけ、反省した。後悔ではなく反省だ。

だって彼をからかうとわたしの思った通りの反応をしてくれるから……正直面白い……いや、かなり面白い。これが男の感じる“萌え”であるなら、わたしは間違い無くこれに該当する気がする。

なんだか、思わず護ってやりたい可愛さを感じてしまっている。普通、こういった気持ちは男が可愛い女の子を護ってあげたいと言うのが正しいセオリーかも知れない。けれども、わたし達にとっては、否、わたしにとってはそんなセオリーは全くもって逆だ。

もう、彼を見ているだけでいわゆる母性本能がくすぐられてしまう。そして、彼はからかうと物凄く面白い。

だからいつも“ちょろちょろとだけ”イジメ過ぎちゃうのだ。

まっ、この際気にしなくたっていいか♪



わたしが彼に会ったのは、白羽学院に入学して間もない頃だった。

その日、わたしは特にこれといった用事もなく、普段通りに下校していた。

「辞めて下さい!! 私には男ですよ!!」

「ヒヤハハハハ、そんなカワイイ嘘についても無駄だ。さっき、俺にぶつかったツケはそのカラダでしっかり払って貰うぜ。」

複数の男の下品な笑い声が聴こえる。

「??.?」

その笑い声は、道の脇にある人気のない裏通りから聴こえてきた。

確かその通りは行き止まりだったはずだけど……

何事かと、声のした方向へ顔を向けると、案の定とも言えるべきか、ひとりの少女が複数の男どもに四方を塞がれる形でしっかりと囲まれていた。

数は……ひい、ふう、みい……ありゃまあ、10人だわ。こりゃ、あの娘独りじゃとてもじゃないけど逃げられそうもないわね。

なんて、冷静に観察している間に男どもの中の一人が彼女の腕を掴んだ。

その少女は、当然その手を振り解こうとしたが、他の男どもが一斉にその娘に襲いかかり、あっという間に羽交い締めされてしまっ

た。

「ちよっ!! 辞めて……くだ……」

「オイ!! しっかり押さえとけよ!!」

流石にこれ以上はマズイと感じたわたしは、すぐさま、その男どもの輪に向かって駆け出した。

わたしは、まず手始めにこちらに向かって反対側を向いてしゃがみこんでいる男の頭の側頭部に右足で回し蹴りを決めた。

思いつき蹴ったのと、不意打ちだったため、男は声を上げることなく横に吹っ飛んで動かなくなった。

次に、わたしのいきなりの登場にその場にいた全員の思考が停止している中、私はそんな事お構い無しに、さっき倒した男の右隣にいた男の顔面下真ん中に今度は左足で回し蹴りを決め、その勢いを保ったまま右に回って、後ろにいた男のまたまた側頭部に右足で後ろ回し蹴りを決めた。

今、蹴り倒した2人の男どもも最初に倒した男と同じ様に、声を上げることなく吹っ飛んでいき、動かなくなった。

「ッ!! テメエ、いきなり何しやがる!!」

そう言うとなりの男が右腕で振りかぶり、殴りかかって来た。

「あら？ わたしに言わせれば、あなた達こそこんな所に女の子一人連れ込んで一体何をしようとしたのかしら？」

「だから、私は男です！！」

わたしが言った言葉に捕まっている女の子は何か言い返してきたが、それをサラリと流して、殴りかかって来た男の攻撃を逃れるため、少し右側に屈んだ。

わたしは攻撃をかわしたあと、すぐさま反撃を開始した。

まず、殴りかかってフリーになった鳩尾に右ストレートを一発。

「かっ！！」

そして、痛みの余り前屈する形になった男の後頭部を両手で持ち、顔面に思いっきり左膝を叩き込んだ。

更に、鼻血を出しながら頭を後ろにそらせて、またまたフリーになった胴体へ左足を軸に右方向へ後ろ向きに回転して、その勢いを殺さず右足を男の鳩尾へ向けて真っ直ぐに放った。

「ぐふっ！！」

そのまま、男は後ろに吹っ飛び腹を押さえて呻いた。

「さて、これで4人ね。お次はどなたかしら？」

「ッ！　　テメエ、このクソアマア〜」

そう言うと、他の男どもは懷からそれぞれ、折りたたみ式のナイフを取り出した。

「呆れた。それでもあなた達男の子？情けないって言ったらありやしない。」

そう言うわたしは腰に手を当てて、思わず溜め息をついてしまった。

「うるせえ！！」

一番近くにいた男が右手に持ったナイフを高く振り上げ、切りかかってきた。

わたしはすぐさま身構え、振り降ろされてくる右手を狙って右足を振り上げた。

わたしの足は寸分の狂いなく正確に男の手を射抜き、ナイフを払い飛ばす。

わたしは蹴った足をしっかりと振り抜き、私の体の右半身が男の方向へ向くように右足を地面に着いた。

その勢いを保ったまま、わたしは右足に力を込め、その場で思いっきり上へ飛び上がった。

そのまま、360度回転して男の右側頭部に右足で飛び回し蹴りを決める。

「へぶ!!」

男は横向に吹っ飛んだ。しかし、わたしに男の倒れる姿を見る暇もなかった。

「死ね!!」

わたしから見て後ろにいた男が間を空けずにナイフで突いてきた。

私はその男を確認することなく、左足を後ろに向けて放つ。

「ぐっ!!」

わたしの足はピンポイントで男の鳩尾を射抜き、ナイフが音を立てて落ちた。

そして、体をすぐさま男の方へ向け、痛みの余り前かがみになっている男の顔面を蹴り上げた。

男は顔を後ろへ大きく逸らした。

「クソツたれがああ!!」

わたしの左側にいた男が真っ直ぐナイフを今し方蹴り上げた男同様突いてきた。

わたしはそのナイフを持った右手を左手で掴みながら受け流しつつ、体を回転させ、背中が男密着する姿勢をとり、右腕を男の脇から入れて男の右腕の上の部分の服を掴み、思いつきり体を跳ね上げ男を投げた。

一本背負い!! 一本!!

「グゴオオオオオ!!」

男はその場で声に成らない声で呻いた。

「ふう〜」

男を投げた後、軽く息をつき、後ろに振り返り残りの男どもの方へ向き、腰に手を置いた。

「さて、これで7人ね。どう？　まだ私とやる？」

足下にはわたしが倒した男どもの無残な屍が倒れている

白目を向いて気絶している者。痛みに呻いている者と様々で、もうわたしを襲う気力は残っていないようだ。

わたしが脅しの意味を込めた挑発に一人の男が上着を後ろに投げ捨てて、わたしに向かってゆっくり歩いてきた。

「ずいぶんとまあ、俺の仲間を可愛がってくれたもんだなあ」

そう言うと、男は自分の筋肉を私に見せつけてきた。

正直、余りの変態ぶりにかなり引いたが、未だ捕まっている少女が『すごい！私もあになりたいなあ〜』とか言っていたから、思わずツッコまずにはいられなかった。

何言ってるの!!! 貴女は女の子でしょ!!! こんな変態なんかになんないでよ!!!、と

「どうした? かかって来ないのか? ひよっとして、俺様のこの『華麗なる肉体』、略して『華肉』に恐れをなしたか!!!」

そう言う、男は何やらポーズを決めた。

んなわけないでしょ!!! わたしは只貴方のキモさに引いていただけよ!!! それから何が『華肉』よ!!! 勝手に変な言葉作らないでよ!!! あと、ポーズをとるな!!! 尚キモいわ!!!

「ふふっ、かかって来ないか! ならば、こちらから行かせてもらおう! 行くぞ!!!」

それを最後に男は殴りかかって来た。

男はまず、右腕でわたしの顔を狙ってきた。わたしはそれを右に屈んで避ける。すると男は急に左腕を下から捻り込むように放ってきた。

ドンッ!!!

「クッ!!」

男の左腕は見事、わたしの腹部へきたが、寸前のところで両腕でガードする。すると男は、計ったかのように右足を伸ばし、わたしの左膝を横から蹴った。そして、バランスを崩し、ノーガードになったわたしの腹部へ今度こそ男の右膝が入った。

「グッ!!」

わたしは思わずよろめきながら痛む腹部を押さえ、後ろに数歩下がった。

「ガハハハ!! どうしたどうした!! もう終わりか? んなわけねえよな? まだまだ俺様の『華筋』はこんなもんじゃねえぜ!!」

「冗談じゃないわよ!! この筋肉ナルの超ド変態!!」

わたしは男に向け回し蹴りを仕掛ける。

ドゴッ!!

わたしの蹴りが男に当たる。しかし……

「わはははは！！　ぬるいぬるい！！　我が鍛え抜かれたこの『華筋』には、まったく効かん！！」

そう言うのと、男は何事もなかったかのように笑い出した。

「くそっ！！　伊達に鍛えてる訳じゃないってことね……」

「そんなに褒めんじゃねえよ！！　照れるじゃないか！！　よし、お礼と言っちゃなんだが、倒れるまで得と俺様のこの『華麗なる肉体』を拝ませてやろう！！」

そう言うのと、男はまたもやポーズを決めた。

くっそくっそ！！　よくもここまでこの私をコケにして！！　許さない！！　……でも、わたしの攻撃の効かないくらいまでに体を鍛えられているこいつを、一体どうやって倒せばいいのよ！！　いくら攻撃しても全く効かないってのに……そうだ！！　いくら鍛えても無駄な箇所が一箇所だけあるじゃない！！　そこを攻撃しさえすれば……そのためには……

「いい加減にしない！！　あんたのそのキモイポーズを見てたら、目が腐るじゃない！！」

「なっ、なんだとおおお!! い、言わせておけば、よくも俺様の命とも言える『華筋』を貶^{けな}しやがってえええ!! 許さん! 許さんぞおおお!!」

そんなに自慢の美筋とやらを馬鹿にされなくなかったのか、男は顔を真っ赤にさせながら雄たけびを挙げながらわたしのところへ、イノシシのごとく突進してきた。

「ふっ、かかったわね」

「うおおおおお!!!!」

男はわたしの声が入らないほどに激昂しているようで、そのまま突進してきた。

男との距離は残り僅か……

「我が『華麗なる肉体』に勝るものなし!!!!!!」

「知らないわ、よっ!!!!」

わたしは今にも男の手が届きそうなギリギリの距離まで待つて、勢いよく右足を男のある一部分に放った。

チーーン♪♪

「~~~~~!!!!!!」

わたしに殴りかかった男の声なき苦痛に呻く声。男はそのままある部分を抑えながら倒れた。

「「うっ」

仲間の二人の男どもの声。倒れた男に哀れみの視線を投げかけている。

「イタッ!!」

捕まっている女の子の声。何故だか知らないけど、とても痛そうな顔をしている。

わたしの作戦——それは全く攻撃の効かない男を怒らせて、怒りに我を無くさせ向かってきたところを、この男の弱点を攻撃するといったもだった。……そう……男なら誰しもが持つ最大の弱点を……

「~~~~~!!」

男は今だ自分の股間を両手で押さえ呻いている。

毎度思うんだけど、そんなに痛いのかしらね〜？ それに、自分の馬鹿げた作戦がここまで旨く行くなんで、ちよつと気が抜けるわね。やっぱり馬鹿は馬鹿ね。

「よ、よくも、俺の命を……」

男はいかにも恨めしそうな視線で下から見上げてきた。私は顔に勝利の笑みを浮かべ――

「あら？ 貴方の命はその『華麗なる肉体』とやらじゃなかったのかしら？」

――と言ってやった。男は悔しそうな表情を浮かべ『あ、悪魔め……』と呟き力尽きた。

「さてと！」

わたしは顔を上げると残りの二人の男どもの方へ向け、少し微笑んだ。

「貴方たちは、一体どうするのかしらね？」

「「ヒッ!!」」

男どもは一斉に震え上がってしまったようだ。こちらから見ても明らかに震えているのが分かる。

ふふふふ、楽しいわ。ひよっとしたらこの瞬間が今まで一番面白いかも…………

わたしは更に顔いっぱいに笑みを湛え、一步一步着実に男どもの方へゆつくりと近づいていった。

「くっ、来るなっ!! こっ、この女がどうなってもいいのか!!」

「だから、男だって!!」

「その娘を放しなさい。そうすれば、貴方達二人は見逃してあげるから」

わたしは歩くのを止めずに、男に静かに言った。

「こっちに来るんじゃないっ！　さもないと——」

「あっ！！」

そう言うが早いか、男は女の子を無理やり立たせ、そののど元にナイフをピッタリ沿わせた。

男は混乱しきっているようだった。今の男は何をしでかすかわからないと判断したわたしは歩みを止めた。

「いつ、いいか？！　絶対にそこを動くんじゃないぞ！！」

そう言うのと、男はもう一人の男と一緒に女の子を引きずるように、わたしの後ろにあるこの道唯一の出口に向かいゆつくりと歩いてきた。

わたしは体を脇によけてやる。

「そこで、じっとしておけよ！！　さもないとこの女を本当にブツ殺すぞ！！」

「男だ……」

「はいはい、分かった分かった。早くその娘を放してやりなさいよ」

「うるせえ、黙ってそこに突っ立ってろ!!」

「私は男だー!!」

「おめえもうるせえ!! 黙ってろ、くそアマ!!」

その時、わたしは異変に気が付いた。今まで抗議を無視され続けていた、あの女の子の周りだけに不思議な白い霧のようなものが漂い出したことに……それは、今女の子を捕まえている男どもも気が付いたようで、恐る恐る顔を伏せ、肩で地震が起こっているかのように震えている女の子を見つめた。

「ア、アマア?! ……た、確かに家は神社で、私はその跡継ぎだけど……でも……」

そこで女の子は言葉をきった……

辺りに重い空気が流れる……

「でも……私は……いや、オレは………正真正銘男だー!!」
「^{アマ}尼になんか成かああああ!!!!」

顔を上げた女の子。否、自称男の子は、勢いよく顔を上げ周りあたり一面に聞こえるような声で叫んだ。顔は怒りのためか真っ赤で、

その形相は思わず私でさえ腰を抜かしてしまうほど、恐ろしくゆがめられていた。さながら、生きている般若か羅刹か……全身から殺気が溢れ出ている……

「ひっ!!」

男もわたしと同じ事を思ったのか、すぐさまその子から手を離れた。

すると、その子はその場で素早く回転して両手を交差するように腕を伸ばし、男の胸元に当てた。

そして、それと同時に周りにあった白い不思議な霧がその子を中心に渦を巻くように回りだした。

『高天原の主神、天照大神よ。我に今此の時、その大いなる力を貸し与えたまえ。我が目の前にいる敵から我を護る盾となり、敵を討つ刃となれ。』

「なっ!!」

その子が呪文らしき言葉を放った瞬間、その子を中心に強烈な突風が吹き荒れ、先ほど両手で触れていた男が物凄い勢いで吹き飛び、十メートルほど後ろにある行き止まりの壁に激突した。男はそのまま気を失い地面に崩れ落ちた。

わたしは今しがた目の前で起こった出来事を理解できず、その場に立ち尽くしてしまった。

さっきの一体、一体何が起こつていうの……白い霧みたいなのが出てきて……あの子が呪文みたいなのを唱えて……それからそれか、あの男がいきなり後ろの壁まで吹き飛んで……ああ、もう！！
何がどうなってるのよ！！

わたしが混乱していると、その子は一人残ったわたしと同じく固まっている男の方へ振り向いた。

「ヒイイイ！！　　ばっ、化け物！！」

こちらからは、その子の表情は分からないけど、余程恐ろしい顔なのか、その子を見る男の顔がドンドン青くなっていくのがハッキリ分かった。

「よくもオレを女と勘違いして、それも十人がかりで襲ってくれたな……おい、このツケはどう払ってくれるんだ？」

その子から、見た目からは想像も付かない様なとても低い低音が響いてきた。

「たっ、助けてくれ〜〜〜!!」

男は一目散に逃げ出そうとした。しかし、それは、その子の一言によってあっけなく失敗した。

「逃がすかよッ!! 『縛』」

男は、まるで金縛りにあったかのようにその場で固まってしまった。

「ふふふふふ」

男の元にゆっくりと向かっているその子から、とんでもなく不吉な笑い声が聞こえてきた。

「あっ……あっ……あっ……」

男は恐怖のためかうまく声が出ない様子だった。実際、わたし自身全く関係ないのだけれども、足がガクガクと震えて立っているのがやっとなんといった状況だった。

その子は、そのまま男の元へ歩いていき、男の肩に手を置いた。

「覚悟は出来たか？ ……地獄に落ちるな、ふふふふ」

わたしはその子の言った内容もさることながら、身も凍ってしまいそうな声に、思わず身震いした。

「ギヤアアアアアア！……！」

男は断末魔とも取れる声を出した。

この声を聞いた瞬間、私は耐え切れずに目を両手で覆ってしまった。だから、男がこの後どんな事をされたのかを知ることが出来なかったけど、不吉な『音』は、ハッキリと聞こえてきた。

バキッ！！ ボキッ！！ グニユ！！ グシャ！！ ドカーン！！
！ ボッカーン！！ チーーン♪ ……etc.

しばらくして音が止み、わたしは両目を覆っている手を恐る恐る下ろした。

そこにはボロボロに成って血の涙を流している男と、男のすぐ傍で男をこんな目に合わせた張本人が『気分爽快』と言わんばかりの表情で、満面の笑顔で立っていた。

第3話 二人の出会い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！！

書いてて思ったんですけど、真琴さん……とんでもなく黒い上に容赦ないですね……。まあ、真琴はともかく、私的にびっくりしたのが光です。真琴もさることながら、光も恐ろしいですね。（こっ、こんなはずじゃ……。汗）

もし宜しければ、感想、評価をお願いします。ちょっとした事でも構いません！！もし、読んでくださる方がおられましたら、是非とも読んだ感想をお聞かせ下さい。特にバトルシーンはこれから超重要になりますので、読んでどう感じたかお教え下さい。出来る限り今後に生かしたいと思います。

では、改めまして、ここまで読んでいただきありがとうございます！！

もし良ければ、次話も読んで下さい。

第4話 必ず探し出してみせる!! (前書き)

本当に申し訳ありませんでした。

何度もアクセスして下さった方には大変申し訳ないと思っています。

言い訳は後書きにでもさせて下さい。

では!どうぞ!!

第4話 必ず探し出してみせる!!

「ねっ、ねえ? ……あなた……一体……」

「へえ?」

私はさっきまで男をボコボコにして、『気分爽快』とばかりに清々しい笑顔の女の子（未だに男の子とは思えない）に、普段の私からは想像も付かないほど、おっかなびっくりした弱々しい声を掛けた。すると、その子は私の存在を忘れていたのか、ひどくビククリとした表情で私を見てきた。

「……あっ……貴女は……」

見るとその子の顔が段々と真っ赤に成ってくるのが分かった。

「すすすすすすみません!! あ、その、助けていただき有り難う御座いました!! それで……あの……」

余程慌てているのか、その子は額に冷や汗のようなものを沢山浮かべて、全身をいっぱいに使って、私に助けてもらった礼を述べた。

「そりゃ、まあ、どう致しまして……さっき、あなたは一

体あの男に何をしたの？」

そう言って、私は遙か彼方で倒れている男を指差した。

「なななななな何の事ですか！？ わ、わぁ！！ 大変だ！！
人があんなところで倒れてる！！ ああああれをオ、いえ、私
がやったというんですか！！」

私は明らかにさっきより一層焦りの色が濃くなっているとハッキリと感じた。

余程、今し方自分があの男にしたことが、私に知られてはならなかったようで、その娘の慌てぶりといったらまるで漫画の登場人物のごとくオーバーリアクションなもんだから、私は思わず嘔き出しそうになってしまった。

この娘、面白い……………ちょっとからかっちゃお♪

「へえ〜、あなたはどうしてあの男の人が、あんな所で気を失っているのか分からないんだ〜」

コクコクコクコク！！

その娘は、私の話しに合わせて何度も勢い良く首を縦に振って、相打ちを打つ。

「そう？ ……じゃ、あなたの足下で倒れている、血だらけの男の人もどうしてこうなったか分からないと？？」

ブンブンブンブン！！！！

その娘の首を振るスピードが上がって、今にも首と胴体が離れてしまうじゃないかと思うほど、激しく相打ちを打ってくる。

何この娘の反応、可愛い過ぎるんだけど……もうちょっとだけ、いじめちゃえ♪

「ふうん、そうなんだ……じゃ、さっき私が見た光景は夢で、この人達も私が無意識のうちに倒しちゃったのかな？？」

「そ、そうですよ！！ きつと！！ いえ、ぜつ、絶対にそうですよ！！ ……あっ！ いや、そうでした！！」

ほんと、期待通りの反応ばかりしてくれるわね。

私は緩みそうになっている頬に気を使いながら、尚も言葉を続ける。

「へえ〜、そうなんだ。ちょっと残念ね」

「ほっ」

私がとぼけて見せると、その娘は小さく安堵の溜め息を漏らし、額に浮かんでいた冷や汗をそっと拭いだした。

ニヤリ♪

「そう。じゃ、さっきの不思議な霧は何だったのかしらね〜??」
「？」

「ギクッ!!」

その娘が安堵したのも束の間、私は更にその娘を問い詰めた。すると、その娘は安堵のため緊張の抜けていた全身を、また激しく緊張させて、勢い良く背筋を、ピンッ、と伸ばした。その額から新たに大量の冷や汗が浮かんできている。

「あなた、この私がさっき見た光景が全部夢だったと、本気で思っているって??」

「ギクギクッ!!」

「それに、あな——」

「あっ!! あのだ!! さっきは助けていただき本当に有り難う御座います!!」

私が尚も追求しようと話し出した途端、その娘は強引に私の話しの上にお礼の言葉を被せ、再度深々と頭を下に下げた。

「だっ、だから、それは何でも無いって!! それより今は、あなたがさっ——」

「あの!! 助けていただいたお礼を是非ともしたいのですが、よろしいでしょうか?!」

私がさっきの話し続けをしようとすると、またまた強引に遮られてしまった。けど、ここで引き下がるような私ではない。

「そっ、そんなもの要らないわよ!! 別に私は、あなたからお礼を貰うために助けた訳じゃ無いんだから!! それよりも私が聴きたいのは——」

「ならばせめて、助けていただいた恩人の名前を教えて下さいませんか?!」

「だから、私が聴きたいのは——」

「名前を教えていただきますか！……！」

くっそくっ！ この私が、こんな可愛らしい女の子に負けていいは
すがないのよ……！

しかし、私は彼女の余りにも鬼気迫った表情と空気に――

「し、白羽真琴だけど……」

――言っちゃったよ、私……！ どうしてよ、私……！ 負けを認め
てしまうの、私……！

しかし、この時私はこの娘に対して、さっきの出来事について追
求しようという、思いは殆どなくなってしまった。それだけではな
い。私は何というか、目の前の彼女から、いわゆる自分と同じ“ニ
オイ”をしている気がしてきたのだ。

この娘………ひょっとして、私と――

「そそそそそですか……！ しら………えくと………真琴“くん
”」

——同じ………って!!

「ちょっと待ちなさい!! どうしていきなり名前なのよ!!」

違う!! ツツコミどころはそこではない!!

「すすすすすみません!! 焦ってたもんで、名字のところを聞き逃しちゃいました」

「名前を呼ぶことは別にいいのよ! それよりもどうして、真琴“くん”、なのよ!! なによ、“くん”って!! 私は女です!! 一体私をどこをどう見たら男に見えるって言うのよ!!」

それだ!! 何故にこの娘は私の事を“くん”付けて呼んだのだ!!

私が思わず怒鳴ってしまうと、彼女は目を目一杯開き、驚愕の表情を浮かべた。

どうしてそんな、驚きの表情になるのよ!!

「えっ? ……女性の方ですか?」

カチン!!

「当たり前でしょうが!! もしも、私達ぐらいの男が、こんなヒラヒラな女子高生が履くスカートを履いていたら気色悪いでしょうが!! 想像しただけで、鳥肌がでるじゃない!!」

ガーン

「き、気色悪い……………」

何やら彼女が小さく呟き、その後ろから見事な擬態語が聞こえてきた気がした。そして、何故か目の前の女が口を半開きの状態で固まっている。

しかし、一度火がついた怒りはそう簡単に止まれる訳がなく――

「それに、もし、仮に私達と同年ぐらいの白羽学院男子生徒が、私達、女子の着る制服を着て、それを『コスプレ』と称していたとしましょう。それから、仮に私やあなたみたいな喋り方していたとしましょう。そして、そんな奴が今、あなたの目の前にいると想像してご覧なさい!! どうよ!!」

「どっ、どうよ、って聞かれても……………」

私は目の前の彼女の肩を力強く掴んで、彼女の間違いを正すべく

最後の言葉を放つ。

「いい？ よろしく聞きなさい。私達の学校にはそんな人は絶対に居ないのよ！！ 仮にもし、私達の行っている白羽学院にそんな男子生徒がいたら、私はソイツにハッキリと言ってやるわよ！！ 変態だって！！」

ガーン ガーン ガーン ガーン ……

「へ……………変態って……………」

「どっ、どうしたの？」

彼女は、私の最後の言葉を聞いた後、なにやら真っ白になって、地面に私から背を向ける形で屈んで『の』の字を書き出してしまった。

「ねっ、ねえ？ 一体どうしたの？？」

私が驚いて急いで声を掛けると、彼女からブツブツと何やら呟く声が聞こえてきた。けれど、何を呟いているのかは解らなかった。

「いいんです、いいんです……………どうせ私なんか……………私なんか……………気色悪い、女子高校生の格好した変態ですよ……………そう……………私は変態……………」

…変態……グスン……変態……」

私が、彼女の眩きをもっとよく聞き取れるように、隣に屈んだ。
どうやら、私の説教(?)に落ち込んでいるようだ。

はて? 私、何かこの娘を傷付けるような事、言ったかしら?

ともかく、理由がどうこうよりも、どうやら彼女が落ち込んでいる原因は私にあるようだ。ここは私が謝るべきであろう。けど――

「あの……その……」

――私には、彼女が落ち込んでいる原因がサッパリと分からない。

私は何を言えば良いのか分からず、困り果ててしまった。

その時、突然!!――

「やっぱり、変態はイヤだ――!!」

「キャーッ!!」

——膝を抱えて落ち込んでいた彼女が、突如立ち上がり叫び声をあげた。

私はその声に驚きとつさに悲鳴をあげてしまった。

「も、もおゝゝゝ!! いきなりビクリするじゃない!! 一体、どう——」

「真琴さん!!」

私の文句の言葉は彼女の私を呼ぶ声に途中で遮られてしまった。余りにも力の籠もった言葉に、思わず後ろに引いてしまう。

「もっ、もしもですよ! さっき、真琴さんが言っていた人がやっぱりいたら、あの……その……きっ、気色悪いですか?」

何をそんなに力を込めて言うのかと思えば。

「そうね。もしもそんな人がいればそう思うでしょうね。」

私がそう返すと、彼女は少し俯いてしまった。しかし、すぐさま首を横に振ると、真っ直ぐな目で私を見つめてきた。

「例えそれに、どんな理由が有ろうとも、ですか？」

私は彼女の言葉の意味が分からず、口をつぐんでしまった。

どんな理由が有ろうとも？　　……彼女は何を私に言っているの？　　……

彼女の真っ直ぐな瞳が私を見つめる。直ぐに私は彼女が冗談で言っているのではないと気付いた。彼女は本気で私に尋ねている。私は返す言葉が見つからず、ますます黙ってしまった。

シャリーン……

突如、鈴の音が辺りに鳴り響く。

その音を聞いた瞬間、私達の間に沈黙が流れた。

そして――

「ワァー！　！　　たっ、大変！　！」

さっきまでの真剣な表情と打って変わって、その娘は急に焦りの色を浮かべた。

「こ、今度は何よ!!」

「今日はせっかく母上から稽古をつけてもらう約束だったのに!! 早くしないと遅れちゃうよ」

そう言うが早いか、彼女は急いで荷物をまとめだした。

私はその様子をただただ呆然と見つめる。

しばらくして、荷物をまとめ終えた彼女が私の元へ来て、もう一度深々と頭を下げた。

「さっきは、危ないところを助けて頂き、有難う御座いました」

そうして、その状態のまま、再度私に礼を述べてきた。

私とその光景を呆気にとられながらいると、彼女は私のそんな状態を知ってか知らずか、私に一步近付いて来た。

そして、手を伸ばすと、私の額の辺りをそっと触れると、小さな声で呟いた。

『彼の者から、我に関する全ての記憶を消し去り賜え。しばしの間、彼の者に安らかな眠りを与え賜え』

途端に私は物凄い眠気を感じ、立っていることも出来なくなり、前に倒れてしまった。薄れる意識の中、私は彼女にしっかりと抱きかかえられていると感じた。しかし、私はそんな眠気に負けじと踏ん張り、彼女の顔を見ようと、首を動かす。

「……あ……なた……の……名……前……は」

私の口から無意識の内に言葉が零れた。

「私ですか？ 私の名前は神寺かみでら 光ひかりと言います。真琴さん……すみませんが、暫くの間眠っていて下さい。そして、私と出会った事は忘れて下さい。……本当に有難う御座いました」

冗談じゃない！！

私はすぐさまそう言い返そうとした。けれども、眠気は最早限界だった。

ぼやける視界と意識の中、最後に彼女の静かに笑う顔が見えた気がした。

そこで私の意識はプツンと途切れた。

それから、どのくらい経ったのだろう。私は壁にもたれるような形で眠りから、目覚めた。辺りには、私が倒した10人の男どもが未だに倒れている。私はゆっくりと立ち上がると埃を叩いた。何だかさっきまで夢を見ていた気分だ。

どんな夢だったのか、何をしていたのかハッキリと思い出すことが出来ない。ただ、とつてもワクワクした夢だった気がする。

私はケータイを取り出すと、ゆっくりとダイヤルを回した。

プルルルル……プルルルル……

暫くの間、呼び出し音が聞こえ、相手が電話に出た音が聞こえた。

『もしも……し。真琴ちゃん、どうしたの……?』

「ごめん、母さん。また喧嘩しちゃって、男の人達をボコボコにしちゃったんだ。それで、直ぐに救急車の手配をしてもらいたいんだけど………」

『ええ〜、もお〜、真琴ちゃんたら、喧嘩しちゃダメだって言ってるでしょ〜』

「……ごめんなさい」

「で！ 今度は何人倒したの〜!!」

「えっ、ええ〜っと、10人」

全く。どこの世界に喧嘩で倒した人数を嬉しそうに聞いてくる親がいるって言うのよ……あれ？……私が一人で10人？

『キャー!!! すごーい!! 真琴ちゃん、さっすがあ〜』

「何を言ってるのよ。全く、どこの世界に喧嘩で倒した人数聞いて喜ぶ親がいるのよ!」

『あら！ それを言ったら、一体どこの世界に10人の男の人をたった一人で倒しちゃう女の子がいるのかしら?』

ほっ、ほっというてよ!! ……でも、本当に私一人で、10人倒したの？ 何だろ、この違和感。

『それで、今度はまたどうしてしたの?』

「うっ、うん。それはね、倒した男の人達が無理やり、一人の女の子を羽交い締めに行っていると偶々見つけて……」

えっ!?! 女の子!?!

私は無意識に出てきた自分自身の言葉に驚いてしまった。

その時だった。突如私の脳裏に一人の女の子と思われる人の静かな笑みと、声が聞こえてきた。女の子の顔は、ぼんやりとされていてハッキリとは解らなかったが、声はハッキリと聞こえた。

『私の名前は、神寺 光と言います。』

……………え?……………

『なるほど……。捕まった女の子が「キャー」って成りそうなところを偶然通りかかった正義のスーパーヒーロー真琴ちゃんが、その悪い男の人達をババンッと倒したのね!!』

「……………」

私はケータイの向こうで一人騒いでいる母親の声が耳に入っていないかった。

何? 今の……………さっきの子は一体だれ? 神寺……………光?

『……真琴ちゃん?……』

電話の向こうから、母親の心配そうな声が聞いてきた。

「えっ……まつ、まあ、そういう事になるかもね」

私は母さんの心配そうな声に、ハッ、としてすぐさま返事を返す。

『……まあ、いいわ。それで、今どこ?』

「えーと、ここはねえ……」

その後、私は私が今居る位置を母さんに話し、電話を切った。救急車がこっちに到着するまで待機との事だ。私としてもそちらの方がありがたかった。

母さんは、私の様子に気づいたに違いない。見かけは小学生のようだけど、人の様子とか、感情には人一倍鋭いからなあ。なんて、言い訳しようかなあ。でも、今はそんな事よりも……

私はさっき見えた同じ制服を着た『神寺 光』と名乗った少女の事を考え始めた。しかし、どんなに記憶の中を探しても『神寺 光』

と言う人は浮かんでは来なかった。ならば――

「よし!! 明日、学校でその『神寺 光』って子を必ず探し出してやろうじゃない!!」

私は、そう心に決め、救急車が来るのを待った。



「もお!! ヒカリったら、一体何処まで行ったのよ!!」

あれから私は、ヒカリが走って行ったであろう方向に手当たりしだいに歩いている。

「この私を、ここまで本気で怒らせといて、後でみていなさあい!!」

バンツ!!

私は目の前にある、ドアを思いっきり開け放ち中に入る。そこはとても大きな通路になっていて、今しがた私が出てきた校舎と他の校舎とを繋ぐ、いわゆる渡り廊下だった。

私はヒカリに対しての怒りが収まらないまま、廊下をドンドンと進んでいく。

半分ほど着た所だろうか。突如、私の背後に何者かの気配を感じ、私はその場に立ち止まった。すると、足音が聞こえてきて、同時に気味の悪い音が聞こえてきた。

ギギギギギ……ドクン…ドクン……

私は直感した。後ろに居るのは人間では無いと。そう、解った瞬間。私の体から嫌な汗が大量に流れ出てきた。体中に悪寒が走る。

どどどどうしよう。不味いわよね！ 後ろ向いちゃ、絶対不味いわよね！ 寧ろ、今動かないとそれこそ不味いわよね！ ここは一つ、このまま後ろを振り返らずに全速力で――

ガシッ！！

突然私の肩を後ろにいる“ナニカ”が掴んだ。掴まれている部分に妙な温かみを感じる。

「ッ!!」

後ろからは相変わらず『ドックン…ドックン』という何とも不気味な音が聞こえる。それに加え、前よりも後ろのナニカが付かずいて来たせいなのだろうか、今度は『グチヨ…グシュ…』という音も聞こえる。

私は覚悟を決めた。

どうせこのまま後ろにいる“ナニカ”に何かされるのなら、いつそ、その姿を拝んでやろう。

そして、私はゆっくりと後ろを振り返った。

第4話 必ず探し出してみせる!! (後書き)

ここまで読んでいただき有り難う御座いました!!

本当、遅れてすみません……

遅れた言い訳としては、作者が通う学校が丁度、期末試験の時期だったからです。

すみません……言い訳にも成りませんね……

それに、今回の話を読んで下さった読者の皆様の感想はきつとこうだったのではないでしょうか？

話が一向に進んでないじゃないか!!

それにつきましても、本当に申し訳ありません。

毎回毎回グダグダしてしまって……

感想・評価、お待ちしています。ちょっとしたことで構いません。寧ろ、「早く、次の話書けや!!」でも「この小説のここがダメだ!!」等のお叱りの言葉でも構いません。宜しく願います。

それでは改めまして、ここまで読んでいただき有り難う御座いました！

こんなダメ作者ですが、どうか見捨てず、次の話も読んで下さい。

第5話 悲鳴の理由（前書き）

前回、その場の説明をもう少し書いた方が分かり易くなってよくなる、というアドバイスをいただきました。

なので、今回はそれを意識して書いたつもりです。

もしよかったら、その事を少し注意して見てもらいたいです。

今までと比べて、かゝなく短いですが、どうぞ!!

第5話 悲鳴の理由

静かな夜。今夜は綺麗な満月だ。空には空気も澄んでいてためか、私達の頭上には満天の星空が広がっている。

辺りからは虫の音一つしない。

私の周りを照らすものは無く、唯一、明かりと呼べる物は窓から差し込んでくる月光だけだ。しかし、今はその明かりは月に雲が掛かってしまい、殆ど明かりと言えた代物ではない。

今私は学校の渡り廊下の上で恐怖のあまり身動きが出来ない状態でその場に佇んでいる。

その理由は、後ろから聞こえる『ドクン…ドクン…』という不吉な音と、時折聞こえる『グチョ…グシュ…』という気味の悪い音が聞こえてくるからだ。

そして、先ほど私の肩を何やら生暖かいものが掴んだ。

今や緊張は極度に高まり、全身から冷や汗が流れているのを自分でも分かる。

私は意を決してゆっくりと振り返る。

まず、最初に見えたのは私の肩を掴んでいる何やら生暖かいもの。それは、どうやら人の手のようだ。辺りが薄暗いためハッキリとは確認できないが、人の手で間違いない筈だ。

更に私は後ろを今度は少し目線を上に上げつつ振り返った。そこには、顔の左半分は月の角度のためか暗くてよく見えないが、顔のもう半分は見る事が出来た。

間違いない。この人は人間だ。おそらく、学校の警備員の人だろう。大方、こんな遅い時間に生徒が学校をウロウロしているのを見つけたために注意しに来たのだろう。

私は極度の緊張から解放され、思わず安堵のため息が零れる。どうやら、人間では無いと感じたのは気のせいだったようだ。きつと夜の学校なんかにいるから、出てくるのは勝手に怖いものだけだと勘違いしていたに違いない。

人間だと気づけば何も恐れる事はない。

私は完全に後ろへ振り返り、その人と向かい合わせになるような形をとり、とりあえず謝ることにした。

「すみません。こんな遅くまで学校に居て……ちよっと生徒会の仕事で長引いてしまって……あの、友達が何処かに居るはずなんですその人を早く見つけて直ぐに帰ります」

実は、生徒会の仕事でこんなに遅くまで残っていたと言うのは、嘘。本当はヒカリが、今夜学校に行くと母さんと話しをしていたのを盗み聞きしていたのだ♪

とりあえずそれだけ言うと、私は頭を下に下げた。

「……………」

しかし、その人は無言のままだった。

私はそれを不思議に思い頭を上上げる。

その時だった。

今まで月に掛かる雲の影響で見えなかった顔の左半分が、雲が動くのに合わせ、ゆっくりと姿を現した。同時に今まで気にも留めなかった、胴体の周りも顔が見えるのに合わせてゆっくりとその姿を現した。

私はその人の姿を見て、思わず息を止め、再び硬直した。

なぜなら……その人の顔の左半分は……体の左半身は……そして……胴体には……本来、人間の体を覆う“モノ”が無かったのだ……

つまり、その人の左半身と胴体には皮膚が無かったのだ。

そう、顔の左半分は本来見る事の出来ない細く無数にある筋肉がハッキリと露出し、眼球は飛び出し、その口には綺麗に並ぶ歯が唇が無いためにズラリと並んでいるのを確認することが出来る。更に

は、額の辺りから上は頭蓋骨が外され、ブニョブニョウネウネとした脳ミソをがハッキリと顔を出している。

胴体のほうはそれより更に酷い。胴体も本来覆っている筈の皮膚が無く、所々欠けた肋骨が顔を覗かせている。そして、欠けた肋骨の下からは、見えているだけで吐きそうになってしまいう人間の臓器が所狭しと並んでいる。

ドクン……ドクン……

その臓器の中でも最も目に付くのが、私の耳に先ほどから届いていた音を出す箇所……人間の『心臓』だ。

動いてる……

私はいささかさっきまで聞こえていた音の正体を知って気分が悪くなってきた。

よく見ると、動いているのは何も『心臓』だけでは無いことに気が付いた。

目に見える範囲でそれを確認出来るのは『肺』、『胃』、『小腸』に『大腸』……どれも殆ど同時にウネウネと動き、その動きに合わせて『グシュ……グチャ……』という何とも形容し難い音も聞こえる……更には臓器と臓器の間から、不気味な液体も流れている……ハッキリと言おう……リアルだ……どれもこれも、

リアル過ぎる……………どうをどう見ても人の内蔵にしか見えない………

私は驚きと恐怖の為に悲鳴を上げることさえなく、ただただ立ち尽くすのみである。

いや、強いて言うならば悲鳴を上げようとした。しかし、その悲鳴はまるで喉に詰まったかのように喉に引っかかり、悲鳴を上げることがおろか、声さえ出ない状況に陥ってしまったのである。

ギギギギギ……………カシャン……………

突然だった。

突如“ソレ”は私の方へ両腕をまるでゾンビの如く前に突き出し、私のもとへ一歩踏み出した。

途端に私の中の何かが吹っ切れた。

「キャーーーーー！！」

殆ど無意識だった。私は“ソレ”が一步踏み出したのを確認した瞬間、悲鳴を上げて私の後へ向かって走り出した。

私の頭は最早恐怖で埋め尽くされている。何も考えられない……
…ただ、本能のままに走っている……

私は一心不乱に渡り廊下の端の別校舎へとつながるドアに向かって走った……

ギギギ、カシャン…ギギギ、カシャン…

走る私の右隣から、私と同じペースで音が聞こえてきた。

見てはダメ！ 振り向いちゃ絶対に絶対にダメよ！！

しかし、そんな本能とも直感ともとれる危険シグナルが脳内で発令されるが、つい見てしまうのは人の怖いもの見たさという好奇心のせいなのだろう。

右隣横を見ると、言わずもがな、人に似た“ソレ”が、私と同じ速度で走っている。

すると、“ソレ”は私の視線に気が付いたのだろう、飛び出して
いる眼球が、ギョロッ、と動いて私を見据え、唇の無い口を薄気味
悪く、ニタツ、と歪めてきた。

顔は正面を向いたままなのに……

「ヒッ！！」

私の顔は自分の意志とは裏腹に乾いた口元が完全に引きつっている笑みを浮かべる。

そりゃもう、びっくりするぐらいピクピクと口の端が動いているのが解るくらい盛大に……

人というのは、本当に恐怖を感じたとき思わず笑ってしまうって言うけど……まさか、今それを自分が実際に体験するとは……

兎にも角にも、私はそんな正面を向いたまま眼球めだまだけ、ギョロ、とこちらを見据えて、歯だけが見える異様な口で笑っている人が、いや、人の姿をした……そう、いわば妖怪のような者が横で走っているのを確認すると、更に走るスピードをあげた。

だって、普通そうよね?! 普通こんなのが隣を走ってたら、それも自分を追いかけるように、しかも、正面向いたまま眼球めだまだけ動かず人間離れた、寧ろ人とは思えない動きをして、唇の無い口で、不敵に笑いかけて来てたとしたら……逃げるのは当然でしょ?! 当然の行動よねえ?! 当然だと思わない人がいるなら直ぐに出てらっしゃい!! 今すぐにも変わってやる!!

私は只、我武者羅がむしやらにひたすらに死に物狂いで走る。

そして、ついに渡り廊下の最終目的地である別校舎へと続くドアが私の眼中に入る。

ハア、ハア……もう少し……もう少しで……

流石に息も上がってきた。全力疾走で、しかも恐怖に駆られながら約400メートルにもなる超巨大渡り廊下を走るのは、流石に堪える。

ていうか、約400メートルでどういことよ!! 学校がデカイって言うっても限度ってもんがあるでしょ!! 御爺様とパパと母さんのバカ、バカ、バカァ~~~~!!!!

ドアはもう目と鼻先。

私は最後の力を振り絞って走る。

そして、ドアが開いた。

ん? 開いた?! 私まだ、ドアの所までたどり着いてないのに、独りでに?!!!

いや、訂正しよう。ドアは独りでに開いたりはしていなかった………ドアの内側に居たのは………

「が、ガイコツウウウウウウウウ?!!?!!!?!」

ドアの内側には、びっくりするぐらいスカスカの人間のガイコツがアゴを、ガチガチと鳴らしながら立っていた。

余りの骨の白さに、窓から入ってくる月光を反射して、青白く光っている。

あは……私、このまま気絶しちゃってもいいわよね？

第5話 悲鳴の理由（後書き）

ここまで読んでいただき有り難う御座います!!

少しは分かり易くなっているでしょうか？少しでも分かり易くなっていれば幸いです!!

それにしても、今回は短くてすみません……

書いている途中で思ったんですけど、やっぱり更新を早くするには『量より数』ですよ！（↑今更かい!!）

なので、今回からは『短く、たくさん』を目指して頑張りたいと思います!!

因みにですけど、次の話は今回の話と途中まで同じ所で書いていましたので、もう既に八割がた出来上がっています。ですから、二～三日中には更新出来ると思います!!

それでは改めまして、ここまで読んでいただき有り難う御座います!!

是非とも、次の話も読んで下さい!

第6話 夜の学校は怖いところです（前書き）

なんとか宣言通りに更新することが出来ました。

今回は（今までも大してありませんでしたが……）コメディイが殆どありません！！（それはコメディイ小説とは言えないのでは？）

作者のイメージとしましては、ホラーのつもりで書いてみました。

うまく怖い感じが出てるといいのですが……

さて、今回も前回同様真琴には酷い目にあってもらいます。

では、どうぞ！！

第6話 夜の学校は怖いところです

動物と言う生き物は須く、走る、飛ぶ、泳ぐといった行動をいきなり止める事など出来ない。

当然の事ながら、全力疾走している最中などもっての他で、止まる事など不可能なのである。

そして、またまた当然の事ながら、全力疾走をしている私が、目の前にガイコツがいると気が付いても止まらないわけで……

止まらないっということとは、これまた当然のごとく――

ドンッ！！ ガラガラ！！ ドシャン！！ ガラガラガラ……

――正面衝突するわけで……

因みに、今の効果音を順に解説すると……

『ドンッ！！』 ↑私とガイコツが正面衝突した音。

『ガラガラ！！』 ↑私がぶつかった勢いでガイコツが壊れる音。

『ドシャン！！』 ↑私が勢い余ってこける音。

『ガラガラガラガラ』 ↑壊れてバラバラになった骨が私の上に降っ

てくる音。

以上のことを踏まえて、私は今、血の海ならぬ骨の海の中に居ます。

カタカタカタカタ

こけた私のちょうど頭のすぐ横から、乾いた何かと何かを打ち鳴らしているような音が聞こえる。

見るとそこには、先ほど走って来る私を見て笑っていたガイコツの髑髏しやれこつべが、しっかりと私を見据え、アゴを打ち鳴らして笑っている。

「……あっ……あっ……」

一度転んでしまったら、腰が抜けてしまい、立ち上がることも、ヒカリに助けを求めることも出来なくなってしまった。

それでも、何とか座るような体勢をとりながら、後ずさろうと試みしてみる。しかし、それも膝が笑ってしまい上手く出来ない。

ガシッ!!

何かが私の左足首を掴んだ。

見るとそこには、人の骨の手が、私の足を掴んでいる。

横にある^{しゃれこうべ}髑髏が更に激しく高らかに、アゴを打ち鳴らす。

「……イヤ……イヤ………」

自分でも不^ふ甲^{がい}斐^な無い位に弱々しい声しか出てこない。

ギギギギギギ………カシヤン………

ドアの所に立っていた“ソレ”が、私の方向へ、一步踏み出してきた。

カタカタカタカタ………

横の髑髏^{しゃれこうべ}がアゴを打ち鳴らし、掴んでいる私の左足首にも力を込めてくる。

私は段々何が何だか分からなくなってきた。

いっそのまま気絶して楽になりたい……

体はもう座ってられないほど、グラグラとしてきた。感覚はとうに消え去り、恐怖も感じない。更に目の前は段々と真っ暗になっていき、異様に眠たくなってきた…………

あれ？…………この感じ…………前に何処かで…………

途端に脳裏に蘇ってくる記憶。

不思議な白い霧…………怒りのオーラを放つ、同じ制服を着た少女と思われる後ろ姿…………その少女の唱えた呪文らしきものによって、吹っ飛ぶ男の人…………優しい笑顔…………

シャリーン

鈴の音が私の脳内に響き渡る…………

…………鈴の音…………そうか…………あの女の子は…………

プルルルルル……プルルルルル……

私は突然の音で、ハッとした。

辺りを見渡すと、さっきまで居たはずの妖怪みたいな者とガイコツは跡形も無く消え去っていた。

プルルルルル……プルルルルル……

どうやら、この音は私のポケットから聞こえてくるようだ。

ポケットを探ると私のケータイが出てきた。

『着信中 神寺 光』

見るとディスプレイには、ヒカリの名前が……

画面を見た私は段々と腹が立ってきた。

ヒカリのヤツめえ……!! 私がいかに怖い思いをしたと思っ
ているのよ!! 絶対許さないんだからあ……!!

私は未だにけたたましく鳴っている自分のケータイを取ると、電話越しに思わず怒鳴った。

「ヒカリ!! あなた一体何処ほつき歩いてんのよ!! 早く戻ってらっしゃい!!」

『……あたし、メリーさん……』

その声を聞いた瞬間、私は血の気が引いていくのが分かった。

「ヒ、ヒカリ? ……じよ、冗談は…よ、よしてよ……ね?」

『……あたし、メリーさん……今…貴女の後ろに居るの?……』

引っ込んだはずの冷や汗が再び噴出してきた。

私はケータイを持ったまま恐怖の余り固まってしまった。

後ろから、誰かの視線を感じる……

う、後ろに居るのは……誰?

私は、ゴクンツ、と唾を飲み込んだ。冷や汗が顔をつたってアゴの辺りへ降りてきて、落ちる。

覚悟を決め、ケータイを耳に当てたまま一気に後ろを振り返る……

そこには真っ暗な廊下に教室、上へと上がるための階段が私の視界の中に飛び込んできた。

しかし、何処を見ても誰も居なかった。

『……………あたし、メリーさん……………』

耳に当てたケータイから更に声が聞こえてくる。

『……………今……………貴女の真上に居るの……………ウフフ……………』

最後の笑い声は、ケータイの声と一緒に私の真上から聞こえてきた。

そして、突然私の目の前に細い髪の毛のようなものが降りてきた。

ゆっくりと顔を上げる。

そこには――

「…………あたし、メリーさん…………やっど、見つけてくれたね……
…」

――女の子が逆さ吊りの状態で手をだらんと下に垂らし、私を上から見下げる形で見下ろしている。

私はあらゆる思考が停止してしまい何も考える事が出来なくなっ
てしまった。

「……………どうしたの……………」

そう言うとその少女――メリーさんはうつすらと薄気味悪い笑みを
浮かべた…………

そして次の瞬間、ゆっくりとその女の子のクビが180度回転し
た。

ガタンッ！！

私は恐怖の余りケータイを取り落としてしまった。

身動きはおろかまばたきすら出来ない。

目線をメリーさんから外せない。

息は詰まり、体中から冷や汗が流れ、体が小刻みに震えているのが自分でも分かる。

私のそんな姿を見てメリーさんは満足したのか、薄気味悪い笑みを更に深めて、口は耳のすぐ横まで裂け、大口を開けて、ニマツ、と笑った。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

私は力の限り叫ぶと、メリーさんから視線を外し、その場にうずくまった。

第6話 夜の学校は怖いところです（後書き）

ここまで読んでいただき有り難う御座います！！

どうですか？少しは怖く仕上がっていますでしょうか？

感想・評価お待ちしています！！どんな些細な事でも構いません！
！是非とも読んだ感想を作者に教えて下さい！！ほんとにもう、信じられないくらいやる気が上がります。

それでは改めまして、ここまで読んでいただき有り難う御座いました！！

次回は久々にヒカリが登場します。

宜しければ、次の話も読んでください！！

第7話 嫌われた？（前書き）

奇跡的にこんなに早く更新することが出来ました！！

今回は前回の話の最後、真琴が悲鳴をあげる少し前から始まります。

第7話 嫌われた？

「真琴さん！！ 何処に居るんですか？！ 返事をしてください！！」

真琴さんの夜の白羽学院を切り裂いくような悲鳴が聞こえた直後、私は真琴さんの悲鳴が聞こえた方向へ向かってひた走っていた。

バンツ！！

私は別校舎へとつながる全長約400メートルにもなる超巨大な渡り廊下へのドアを押し開け、さっき感じた霊の痕跡こんせきを追って走る。この痕跡を辿たどった先に真琴さんが居るに違いない。

そう確信した私は、私の出せる最高時速で走る。

ただ……………

なんですか！！ この異様にクソ長い渡り廊下は！！ 一般常識完全に見えませんか！！

もう息が上がってしまった。体はこれまで走ってきた疲労で上手く動いてくれない。けれど、ここで立ち止まるわけにはいかない。

きつと、今この瞬間も真琴さんが危険な目にあっているに違いない！！
たとえば真琴さんが、どんなに一般人よりも強いとはいえ、相手は人外の存在。そんな存在に襲われてしまったら、一応多分一般人だと思われる真琴さんといえど、どう足掻いたって到底太刀打ち出来るはずがない！！

私は胸の中に沸き起こる不安を抑えて走る。頭の中にはどうしても最悪のシナリオが流れてくる。そして、そんな嫌な考えを振りほどくように頭を左右に振ってみるも、不安は募る一方だった。

ようやく渡り廊下の終わりである別校舎のドアが見えるくらいの場所に到着した。

もう既に、真琴さんの悲鳴が聞こえてから随分と時間が経っている。

私の中で焦りの色がより一層深まるのを感じた。

真琴さんは無事だろうか…………

だが、そんな心配をしている時間など有りはしない。今は一刻も早く真琴さんのもとへ行かなければならない。

たといその先にどんな結末が待っているようにとも……………

バカか私は！！ 最悪なんて起こらない。私がこの手でなんとしても起こさせたりはしない！！

真琴さんはこの手で護る！！

私はそう新たな決意を固めると、疲れて走るスピードが鈍った自身の体に鞭打ち、またスピードを上げる。

——その時だった……………

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

真琴さんの悲鳴が月明かりに照らされた渡り廊下に響き渡った。

私はその悲鳴を聞いた途端、驚きの余り足を止め、一瞬目の前が真っ白になった。

間に合わなかったのか……いや、まだ間に合う。絶対に助けるんだ!!

私は止まっていた足をすぐさま動かし、必死で走る。私の頬を嫌な汗が伝い、私の脳裏には絶え間なく最悪のシナリオが駆け巡る。

バンッ!!

「真琴さん!!」

息を切らせながら、力いっぱいドアを開いて中に入る。

すると、目の前には普段の真琴さんからは想像もつかないほど弱々しくうずくまっていた。

その体は常に小刻みに震えていた。

「真琴さん!! しっかりしてください!!」

私はすぐさま真琴さんの傍に屈みこむと、その見るからに弱々しい肩に手を置いた。

すると、彼女は一瞬体を硬直させ、下を向いていた顔をゆつくりと上に上げた。

その顔は酷く青白く、唇も真っ青。瞳も心なしか揺れているようだった。

「……ヒ……ヒカリ……なの……?」

その声からは普段の明るく強気な感じが一切見られず、とてもか細く今にも消えてしまいそうだった。

「はい、そうです! すみません、こんな危ないところで真琴さんを独りにさせてしまって……」

「ヒカリ!!」

私の謝罪の言葉が終わるや否や、突然真琴さんが私の胸に飛び込んできた。

「えっ、ああああの真琴さん??! どどどうされたんですか? ?!」

「うるさい!! 一体今まで何処にいたのよ!!」

私は私の胸に抱きついている真琴さんから、確かに彼女の震えを感じ取った。

それと同時に真琴さんの微かな温もりと、女性特有の柔らかな甘い香りが私の鼻腔を通り抜けていく。

そして、こんな状況に置かれているにもかかわらず、私の心臓が大きく高鳴る。

傍^{はた}から見ればおそらく美少女二人が抱き合った、なんとも絵になる感じであり、男どもの目の保養になること間違いなしの光景であったに違いない。

しかあーーし！しかしながら私は男です！！ お忘れかも知れないが、青春真っ盛りの健全な（？）一応男子高校生なんですよ！（ありがたいことに、高校では理事長の彩花さんの配慮によって、私が男であることは生徒の間では秘密にされています）

再度繰り返すようですが、どんなに女性だと間違われる女顔であろうと、どんなに女物の制服やら何やらを着ていようとも、学校の理事長が承認しようとも！！

私は身も心も純度100%（？）の、O・T O・K O、『男』なんですよおーー！！

ですから、女性の、しかも学校一の美少女と謳^{うた}われる真琴さんに、抱きつかれれば当然心臓が高鳴る訳ですよ！！

そんなこんな言っている間にも、更に私の心臓の鼓動が高まり、狂ったように鳴り響く。

火照る身体…

上がる心拍数…

そして、やかましく鳴り響く心臓のビート…

私はまるで自身の身体の中で大太鼓を打ち鳴らされているような錯覚に見舞われてきた。

どうしようどうしよ!! こんなに心臓がドキドキいつてたら、真琴さんに聞こえちゃうよお!! なんか、とっても恥ずかしいよお!!!!

しかし、ここでヒカリの心理とは全くかけ離れた心理が真琴の中で起きる事となる。

それは……

真琴の耳には確かにヒカリの胸の鼓動がハッキリと聞こえてきていた。

そして、普段の彼女ならこれを使ってヒカリをおちよくったに違いない。

だが、今の彼女は、つい先ほどヒカリの胸の音と同じ『音』を聞いていたばかりなのだ。

そして、更にはその『音』を出す、内臓剥き出しの妖怪みたいな者に追い掛け回され、恐い思いをしたばかりなのだ。

だから、当然のように、ヒカリの胸の鼓動を聞いた瞬間、彼女の脳裏にはあの恐ろしかった記憶が蘇ってきた。

「……いっ……」

「いっ？」

ヒカリは本能的に何やら危険を察知したのだが、とき既におそろし……

「イヤアアアアアアアアア！！！」

「ゴフッ！！！」

ヒカリの腹のど真ん中に、現高校生最強の真琴の手加減なしの全身全霊を込めたストレートパンチが炸裂した。

ヒカリはそのまま、つい先ほど自らがぐったドアを通過して、渡り廊下の方向へ後ろ向きに、文字通り吹っ飛んで逝った。

あ、あれ？ 私、お空を飛んでるよ！ わぁ、すごい、一面お花畑だぁ〜♪ あっ、あっちではチヨウチヨさんが仲良く飛んでるう〜♪ それに綺麗な小鳥さんの声も聞こえるよ♪ なんだかまるで暖かな春のお花畑にいるみたい♪ あははははは♪♪♪

ドンッ！！ ガタンッ！！ ドカンッ！！ ゴロゴロゴロゴロ！！

ヒカりはしばらくの間、空を飛行した後、頭から廊下の上に落ち、何度かバウンドして、ゴロゴロと転がった後、

「……うつ……うつう………ガハッ……」

チーーン♪♪♪

むなしく伸ばした右手は、力なく降りる。

ヒカ리가飛んだ飛距離はおよそ四メートル。

ヒカりは、何処からか自分を呼ぶ声と自分のもとへ駆け寄ってくる音を聞きながら思った。

あんなに力一杯、イヤだといわなくたって……いいじゃない……
……です……か……

それを最後に、ヒカリは自らの意識を手放した。

第7話 嫌われた？（後書き）

ここまで読んで頂き有り難う御座います！！

とりあえず、ヒカリに合掌（いや、別に死んでませんけどね）

それにしても、ここまで読んでくださってる読者の方々、本当に有り難う御座います。こんな物語ですが、今後とも温かい目で見てやってください。

180度話しは変わりました、つい先日、総アクセス数が1000を突破しました。

なにをそれ位と思われる方もおられるかも知れませんが、この数字は僕自身にとって大きな数字です。

本当に読んでくださる皆様に感謝します。

それでは、長々とすみませんでした。

これにて少し早いですが、明けましておめでとうございます！！

来年もどうぞよろしくお願いします！！

第8話 ちょっとした仕返し（前書き）

新年、最初の更新です。遅くなってしまい大変申し訳ありません！！
言い訳はまた後書きに……

では、どうぞ！！

第8話 ちょっとした仕返し

「うっ!!」

お腹が痛い。それに加えて、酷い頭痛もする。息をするたびに鈍い痛みが身体全体に広がる。

私が少しずつ意識を取り戻す最中で、その痛みがより鮮明に感じられてきた。

「ヒカリ。気がついたの？」

直ぐ近くで、聞き覚えのある声が聞こえる。

私は、閉じていた目を少しずつ開ける。すると目の前には、私の顔を心配そうに見つめている、真琴さんの顔があった。

私はどうやら渡り廊下の横の壁に背を預ける形で寄りかかっているようだ。

窓から差し込む月光が辺りをうっすらと照らしている。月光によって見える渡り廊下は、昼間ではけっして見ることの出来ない、なんと神秘的な空間を作り出していた。

「ッ!!」

腹部に鋭い痛みが走り、思わずうずくまる。私は修行によって、ある程度の攻撃にも耐えることが出来る。それに、これまでも幾度となく、怨霊や悪霊と戦う中で、怪我を負ってきた。だから、こんな事は初めてではない。寧ろ、これから先も必ず怪我をするはずだ。怪我をするのはもう慣れっこだ。けれど、痛みとはいつになっても慣れてはくれない。それに、久しぶりのあの攻撃の重みは流石に堪えた。

「ちょ！ 大丈夫?!」

一度俯いた顔を少し無理やり上げる。すると、私の目のまで真琴さんが見るからに焦っていた。しかし、月光に照らされている真琴さんは、いつもと違う風に見え、焦っている姿でさえも美しく見える。

「ええ。まあ、なんとか」

私は弱々しいながら笑顔を真琴さんに向ける。

「それにしても、助けようと思ったら、まさかあんなに思いつきり殴られるとは思っていませんでしたよ……そんなに私に抱きつくのがイヤだったんですか？」

つい口から嫌味が漏れてしまう。まあ、この際あんどけ思いつき殴られたんだからこれぐらいの仕返しは許されるだろう。

「そつ、そんな事ないわよ!! ヒカリが来る前にちょっと恐い目にあつて、それを思い出したから……つい……それに……ヒカリに抱きついたのは私の意志だし……」

案の定、真琴さんは必死に否定してくれた。けれども、後半の部分では顔を下に俯かせ、ぼそぼそと小さな声で言つたから上手く聞き取れなかつた。

「へっ?! 最後のほう、なんて言つたんですが? 上手く聞き取れなかつたんですけれど」

「ななななんでもないわよ!! 気にしないで!! あなたに抱きついちゃつたのは……そう、事故! 事故なのよ!! 分かつた?!」

「は、はあ。そうですか」

「そうなのよ!! 誤解しないでよ!!」

「へ? 何の事ですか?」

「な、なんのつて。ああ……もう! 私ったら何言っちゃつてるのかしら!! いい? この話はもう終わりよ! 余計な詮索なんか

したらただじゃおかないから!!」

「りよ、了解です、真琴さん。ですから落ち着いて下さい。ね？
ね？」

はて、何故にそんなに慌てているのだろうか？

私はそんな勝手に一人で慌てて、激しく肩で息をしている真琴さんを見て、思わず顔が綻ほころんでしまった。そして、心の中でそっと胸を撫で下ろした。

なにはともあれ、真琴さんが無事で良かった。ほんとに良かった……

私は、ヨイショ!、と言う掛け声と共に立ち上がろうとした。しかし、足に力が入らず足元は覚束おぼつかなかった。そのため、止む終えず渡り廊下の壁に手を添えながら立ち上がろうとした。

「ちょっと! 貴方、なにをそんなに無理してるのよ!! ほら、肩を貸しなさい」

「えっ! ええ、有り難う御座います」

そんな私を見て、真琴さんは少しため息をつきながらも、すかさ

ず私の腕を自身の肩にまわして立ち上がるのを助けてくれた。本当に真琴さんは相変わらず誰に対しても優しいなあ、としみじみ思ってしまう。

だって、普通このくらいの年頃の女の子は男に、例え肩といえども身体に触られるのは苦痛なはずだろうし……それに――

私は真琴さんに悟られないよう静かに笑みを浮かべる。

――それに、私は男のくせに女物の服を着ている変態なんだから……

私は真琴さんの助けもあって、なんとか立ち上がることに成功する。

「有り難う御座います。お陰で助かりました」

私は横で肩を貸してくれている真琴さんの方に顔を向けると、感謝を込めてお礼を述べる。

そして、真琴さんは真琴さんで輝くような笑顔で私の礼に応えてくれた。

ふと周りに目を向けると、どうやら私がもたれかかっていた渡り

廊下の壁は、私が吹っ飛ばされた所のすぐ横のようだった。流石の真琴さんも気絶している私をここまで引きずるのに手一杯だったのだろう。

私は気絶する前、確かにくぐったはずの校舎と渡り廊下を隔てるドアを見ながら思わずため息をつく。

「だいたい四メートルくらいですか……それにしても、よくあの両膝をついた状態で人一人をここまで吹っ飛ばせるもんですね」

「あはははは……ごめん。ちょっと、力を入れすぎたわ！」

「『ちょっと』ですか。『ちょっと』でこれですか」

「ごっ、ごめんなさい……もお、謝ってるんだから、そんなにネチネチと嫌みを言わなかったっていいじゃない！」

私は思わず、私の隣で頬を膨らませている真琴さんを横目で見る。

「いえいえ、私はそんなつもりはこれっぽっちもありませんよ……：ただ、必死で走ってきたのに約四メートルほど軽く吹っ飛ばされてこの仕打ちはいどいなあ、って思っているだけですよ」

そう言って、私は真琴さんに微笑み見かける。そんな私を見て、私の横でこれまた珍しく真琴さんの顔が引きつらせている。そして、おそろおそろといった感じで口を開く。

「ひっとして…………怒ってる？」

「そんなことはありませんよ！ ……ただ、さっき言ったことと加えて、先ほどから主に私の腹部と頭部が非常に痛くて痛くて辛いなあゝ、って思ってるんですよ。まあ、その痛みのお陰で早く意識を取り戻すことが出来ましたけどね♪」

真琴さんは私の返答にますます顔を引きつらせる。そうして、顔を俯かせるととても小さな声で言った。

「…………ごめんなさい…………」

「あはははは。イヤだなあゝ、真琴さん。私は別に怒っていませんよ！ 冗談ですよ冗談」

私がそう言うと、俯いているまま真琴さんは私に小さく毒づく。

「……………性悪め…………」

私は思わず、ムツとしてしまった。そして、すぐさま真琴さんに言い返す。

「残念ながら、真琴さんだけには言われたくありませんね」

すると、真琴さんはすかさず顔を上げ私の耳へめがけて怒鳴ってきた。

「ちょっと!! それは一体どういう意味よ!!」

「言った通りの意味ですよ。……さて、もう支えてくれなくても結構です。自分で立てっぺいられますから」

私はそう言うと、さり気なく真琴さんの肩から腕を外し、三歩ほど前に歩を進める。

「あっ」

私の後ろで真琴さんが私が突然離れた事に驚いたように小さな声で呟く。

私はその声を聞いた後、後ろを振り返らずに――

「それでは、真琴さんはもうお家に帰って下さい」

――真琴さんにそう、静かに告げた。

第8話 ちょっとした仕返し（後書き）

ここまで読んでいただき有り難う御座います！！

はい、前書きで書いたように言い訳をさせて下さい。

遅れた理由は至極簡単です！！

それは、今回の話が僕にとって、とっても難しかったからです！！
いえ、正確に言いますと次の話がですが……

はい、実は今回の話も、以前に一度ありましたが、次の話と同じところで書いていたんです。そして、今回の話は少し前には出来ていたんです！！
ですが、この後が僕にとって難しくって（汗）
それで更新するのが遅くなってしまったんです。

その難しかった理由ですが……まあ、それは次回にまたと言うことで（ちよっとネタバレの恐れがあるので）

本当に遅くなってしまい申し訳ありません。

土下座もんですね、これは。

次回は頑張っって早く仕上げてしまいます！！
待ちしててください。
あまり期待せずにお

目指せ今週中
メラメラ

では、改めましてここまで読んでいただき有り難う御座います！！

次の話も宜しくお願いします!!

第9話 孤独な心、見つけた大切なもの（前書き）

大変長い間お待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

今回はこの物語初となるシリ阿斯です。

ですから、コメディとしては全く面白くないと思いますが、どうぞお付き合い下さい。

では、どうぞ！

第9話 孤独な心、見つけた大切なもの

「それでは、真琴さんはもうお家に帰ってください」

「えっ！」

私がそう告げると後ろで真琴さんが驚いたような声を出した。私は更に後ろを振り向かず、言葉を紡ぐ。

「今の白羽学院は非常に危険です。ついさっきだって、何があったかは知りませんが、真琴さんだって怖い思いをしたはずです。これ以上、ここには駄目です。今日あったことは忘れて、早く帰って下さい」

そう、真琴さんはこれ以上ここに居てはいけない。万が一何かあったときに、私には彼女を護る術が無い。だから、真琴さんは早く帰るべきなんだ。

「……………な、何をいつてるの？ どうしてよ！ どうして、私がここに居ては駄目なのよ！！」

私が話して、少し間が空いた後、真琴さんが後ろで大きな声をあげた。尚も私はそれを後ろを振り向かず答える。

「言った筈です、ここは危険だと。貴女だってそれはわかっている筈です。ですから、早く帰って下さい。理事長だって心配している筈ですよ」

「イヤよ！ 冗談じゃないわ！！ 私は危険を承知でここに居るのよ！！ 私は絶対にひとりで帰ったりはしないわ！！」

つくづく強情な人だな…………

私は密かに苦笑を浮かべる。

「危険を承知しているなら、尚更早く帰って下さい」

「イヤだって言ってるじゃない！！ あなたにだけ危険な目に合わせる訳にはいかないの！！」

私は今の真琴さんの発言にとっても驚かされた。だって、今の彼女の発言はまるで――

――まるで、これから私が何をするのか知ってるような口振りだったから。

「真琴さん……………あなたはこれから私が何を――」

「知ってるわよ」

真琴さんが私の言葉を遮るように言葉を上から被せる。

「私……聞いたのよ。今日の昼休みにヒカリと母さんが話しをしているのを……」

私はそれを黙って聞いている。

「盗み聞きしていた事は謝るわ。でも、そうすればきつと、あなたの事をもっと知れる気がしたの。……答えが見つかる気がしたの」

私はそれを聞いて思わず笑ってしまった。

「あははは。一体、私の何を知りたかったんですか？ それに答えって何ですか？」

「うるさいわね！！ 今はそんな事はどうだっていいのよ！！ 私
は——」

「だったら」

今度は私が真琴さんの言葉を遮る。

「だったら猶の事、早く帰って下さい。さっきも言いましたけど、ご家族の方々だってきつと心配していますよ。特に理事長なんか『もう、真琴ちゃんはまだ帰らないのおく！』って言って、フグみたいに頬を膨らませて怒っているはずですよ」

私は少しため息混じりで言った。自分で言った言葉の中に少し寂しさを感じながら……

しかし、それでも真琴さんに帰る気は全くないようだった。

「何度も言わせないでよ！！ 私はまだ帰らないの！！ あなたを一人で行かせたくないの！！」

「いい加減にして下さい！！」

私は思わず強い調子で怒鳴ながら、後ろへ振り返る。そして、真琴さんと向き合い、正面から彼女の目を見据えた。

「何度も何度も言わせないで下さい！！ 今の学校は危険なんです！ 貴女が今日の昼間に聞いた話は全部本当です。ですから、私の事を心配する必要はありません！！ 早く帰って下さい！！ それに、こんな事言いたくありませんが……貴女が居ると――」

ここで私は大きく息を吸い込む。

これと言ってしまったら、彼女に嫌われてしまうかもしれない。

これまでのような会話は出来なく成るかもしれない。

それでも、私は真琴さんを護りたいから。

さっきのように助けられず、彼女に恐い思いをさせたくないから。

二度とあんな悔しい思いをしたくないから。

今回の敵は今までとは格が違いすぎる。このまま、真琴さんと一緒に行けば彼女を危険な目に合わせるだけでなく、命を落としてしまうかもしれない。

だから、例え嫌われて、関わりを断たれようとも、私は今真琴さんに言わなければならぬ。

彼女を……初めて出来た友達を失いたくないから。

私の勝手な思い込みかもしれないけど………それでも、少なくとも私はそう信じている。

だから――――

「――足手まといなんですよ。はっきり言って仕事の邪魔です。貴女がいると出来るものも出来なくなります」

——私はそう言い切った。

私の言葉に真琴さんは一瞬、はっとしたように大きく目を丸め、その後顔を俯かせてしまった。見ると、真琴さんは身体を小刻みに震わせ、両手を強く握り締めていた。その手は力一杯握り締めているせいか白くなっている。

私はそんな真琴さんを見て、強く胸を締め付けられる。罪悪感の波が次から次へと襲ってくる。けれども、後悔はしていない。否、していないと思ひ込む。これで良かったんだ、と自身に何度も何度も言い聞かせて——

これで良かったんだ。こうすれば、真琴さんは安全に家に帰ることが出来る。

でも、何度も自分に言い聞かせても、やっぱり辛かった。否、違う。本当は恐いんだ。これで、真琴さんが自分から離れて行ってしまふんじゃないかと思ひ、恐いんだ。初めて、こんな私を毛嫌いせず、皆と同じように接してくれた人を失くすのが恐いんだ。……また、独りに成ってしまうのが恐いんだ。

私は思わず唇を強く噛む。そうする事によって、私自身の気持ちにケリを付けようとした。

しばらくして、気持ちも少し落ち着き、普段の調子で話しかけるよう注意しながら、俯いている真琴さんに話しかける。

「それでは帰って下さい。校門までちゃんと送りますから」

私はそう静かに告げると、真琴さんの返答も待たずに下駄箱のある元いた校舎——つまり、渡り廊下を走ってきた方向へ向かってゆっくりと歩き始めた。

「……………それでも」

私が真琴さんを二、三步通り過ぎた時、突然、真琴さんはとても小さく、囁く様な声で呟いた。私はその声を聞いて、後ろを振り返り、後姿の真琴さんを見詰める。

すると、真琴さんは不意にこちらへ振り返り、さっきとは比べものに成らないくらい大きな声で——まるで何かを懇願するように——叫び、私を強い瞳で見据えた。未だに身体は震えているままだった。その姿からは普段の、あの強気な様子は微塵も感じられない。

「それでも私はあなたと一緒にいきたいの!!」

私は思わず、目を大きく見開いて、驚いてしまった。

どうしてこの人は、私なんかと一緒にいきたがるんだろう？ あんなに酷い事を言ったのに…………

私は不思議でならなかった。次から次へと頭の中に疑問が湧いてくる。

「何故ですか？ どうしてあなたはそこまで……………」

気が付けば、私そう真琴さんに尋ねていた。自分でもどうしてこんな事を言ったのかわからない。ついさっき、真琴さんに嫌われて関係を断たれても構わないと思っていたはずなのに。自分の気持ちにちゃんとケリを付けたはずなのに。

でも、それと同時にそれを望まない自分がいた。

初めて私の事を知っても、態度を変えることなく、周りにいる人達と同じ様に接してくれた人。

初めて母上以外、親族でさえ呼んでくれなかった、『光』と言う私自身の証しを呼んでくれた人。

初めて、本当の嘘偽り無い自分を知ってもらいたいと思えた人。

初めて心の底から、失いたくないと思った人。

そして出来た、初めて友達と呼べる人。

いつの間にか、真琴さんは私にとって掛け替えのない存在になっていた。

これまで親族からは『忌み子』だとして忌み嫌われ、周りの人達からは変態と蔑まされてきた。

真琴さんは私を、そんな暗く冷たい孤独の中から助け出してくれたんだ。

だから、本当は真琴さんに嫌われるのは恐い。このままずっと友達でいたい。

そう思っているから、きっと無意識の内に少しでも真琴さんとの友人関係を保とうとして、思わず尋ねてしまったのだろう。

「嬉しかったの！！　だって、あなたは私の事を初めて『白羽』じゃなくて『真琴』と呼んでくれたから！！　初めて『白羽』の名前に捕らわれず、私を見て、普通に接してくれたから！！　家族以外で初めて私の事を『白羽真琴』、一個人として認めてくれたから！！」

真琴さんが私に向かって、前へ一歩踏み出しながら叫ぶ。身体がすぐ横にある両手を握り締め、私を見据える目には、うっすらと涙が滲んでいる。

私は予想外な内容に暫くの間、固まる。

「な……なんですって……」

大きく見開かれた目を閉じる事が出来ない。

「真琴さん……それは一体……」

真琴さんは何も答えてくれない。ただただ、さっきのように下を向いている。その姿は弱々しく、今にも壊れてしまふんじゃないかと思えるほど、臃^{おぼろげ}気だった。

「……私ね」

真琴さんが俯いたまま、とても小さな声で話し始める。

「今まで一度も家族以外に『真琴』って呼ばれたことないの……」

私はそれを黙って聞く。

「大人の人達は私の事を『あの白羽さんのお嬢さんか』って苗字で

すらまともに呼んでくれない。先生なんて論外。あんなの私の立場を恐れて、私の発言をろくに考えもせずホイホイ従ってくる操り人形みたい。それに、同年代の人達の殆どのは、私の事を『白羽様』って呼ぶの。それか若しくは名前を呼ばないわ。何人かの多少は親しい人達には『白羽さん』って呼ばれているけど、ほんの少数……：ううん、それだけじゃないわ。殆どの人達は私に話し掛けたりしない。関わろうとしてくれない。私が話し掛ければ、身体をびくびく震わせて、見たくもない作り笑いを浮かべ対応してくる。私の機嫌を損ねないよう、早く会話が終わるようにね」

真琴さんは未だに俯いたままで、語り続ける。

私は何も言うことが出来ない。私の中で未だ渦巻く痛みが、真琴さんの言葉に合わせて動き出す。

「それに、向こうから話し掛けてくれる人達の殆どは、何らかの形で私に気に入られたいと思っている人ばかり……どうしてだと思おう？」

私は何も答えられない。答えなんて分かりきってる。

真琴さんもそれを分かっているようで、私が何も言っていないのにまた話し始める。

「それはね……私が“白羽”だったからなの」

そう話す声は震えていた。

「……真琴さん」

掛ける言葉が見つからない。何を言えいいのか分からない。

不意に真琴さんは私のもとへ駆け寄り、両手で私の胸倉を掴んだ。

「ねえ！ どうしてよ！ どうしてみんな私が白羽というだけで、私を特別扱いするの？！ どうしてみんな普通に友達として接してくれないの？！ どうしてみんな私を――真琴としての私を見てくれないの？！ どうして……私とはみんなと違うの……」

喉が詰まり次の言葉が出てこない。私の胸倉を掴んだ真琴さんは、両目から涙を流しひたすら叫ぶ。

「本当は生徒会長にだって成りたくなかった！！ でも、周りの人達が私に期待をしてくれたからしないわけにはいかなかった！！ 私には“白羽”だから、みんなの期待に完璧に答えなければいけないの！！ それが普通だから！！ 白羽の後継者である私には出来て当然の事だから！！ だから、勉強だってスポーツだって、真琴という私を偽って、必死にみんなの期待に答えるために今まで努力してきた！！ けれど、それを家族以外に私を認めてくれる人なんていなかった！！ みんなはそれが当然だと思ってるから！！」

真琴さんは顔を歪ませ、今までずっと胸の内にしまい込んでいた想いが、涙とともに溢れだしていた。

そして、私はこの時初めて知ったんだ。

——彼女が——真琴さんは私とよく似ていると……そして、同じ想いを持っていた事を……

私も真琴さんも、それぞれ自分ではどうしようもない事を抱えている。

私は呪いを……真琴さんは社会的地位を……

それは自分の力ではどうしようもないものだった。

私がそうであったように、真琴さんもまたきつとそうだったに違いない。

「私は本当は、みんなが思っているような立派な人間じゃない！！
本当は我が儘だって、イタズラだって、意地悪だってしたい！！
みんなと同じように自分の気持ちをハッキリいたり、泣いたり、
笑いあったり、ふざけあって、そして時には思いっきり喧嘩しあっ
て、ちゃんと仲直りして……私はそんな極々普通な生活を送りた
いの……」

段々と小さくなっていく声。これが真琴さんの本当の気持ち、願

い。

以前は私もそう思ってた。

けど、今はもうあまり思わない。

もう、疲れたから。叶うはずのない願いを追い求めて、やっぱり叶えることが出来なくて、自分自身をもう傷付けたくないから。

「……本当は私にはどうせ叶えることが出来ないものだと思ってた……でもね。ヒカリと出会ってから気付いたの。私にもまだ望みがあるんじゃないかって。……ねえ？ 私がどうしてあなたに私の名前を無理矢理にでも呼ばせようとしているか、知ってる？」

「……わかりません」

私にはわからない。どうして彼女が、これほどまでに私が彼女の名前を呼ぶことに執着していたのかなんて。

「本当は私にもよく分からなかったの。でもね。私は今まで会ったこともないあなたを見つけたとき、すごく嬉しかったのを覚えてる。理由は分からなかったけど、すごく嬉しかった。

普通、今まで会ったこともない人に会ってもそんな事思うはずがないのに。だから、私はあなたに私の名前を呼んで貰いたいと思ったし、それが普通のことだと思ったわ。自分でも、どうしてそんなこと思ったのか分からないけど、あの時確かにそう思ったの。……そして、わかったわ。思い出したから。あなたと本当に初めて会っ

たときの事を。私があなたに対して思ったことを」

「…………それはもしかして」

「ええ、そうよ。あの時…………あなたと本当に初めて出会った、あの路地裏の時のことよ」

私はとても驚いた。

なぜなら、私はあの時確かに真琴さんに術を施したはず。別に自慢するつもりはないけど、私は私自身の使う術には絶対の自信を持つてる。

それが彼女があ那时的ことを思い出したということは、つまりは私の術が破られたということ。

でも、どうして？ どうして普通の人はずの真琴さんが私の術を破ることが出来たんだ？

「あの時、あなたは私の名前を呼んでくれた。例えば、私の名字を聞き逃していたとしても、私は嬉しかった。だから、私も知らず知らずのうちにヒカリに対して家族と会話している時みたいに自然に会話をすることが出来た。…………それにね。これは私が勝手に思ったことなんだけど、私はヒカリが私と似ているような気がしたの」

驚愕の表情を浮かべる私をよそに、真琴さんは会話を再開する。その表情はさっきまでと違い、少しだけ普段の真琴さん——いや、

ひよっとしたら普段以上に穏やかな表情だった。

そして、不意に、フツ、と微笑んだ。

「——って、これじゃまるで、私がただ単純にヒカ리를私の都合のいいように思っているだけね。本当はもう独りでいることに耐えられなくなって、誰でもいいから仲間を作りたいだけなのかもしれないわ。……それでもね、ヒカリ。これだけは分かってもらいたい。あなたは私にとって、初めて出来た友達なの。だから、そんな大切な存在のあなたが、これから危ない目に会おうと分かっているのに、みすみすハイそうですかと言ってこのまま帰るわけにはいかないの」

そう言うと、真琴さんは一度涙でクシャクシャになった顔で私が今まで見たことのない、日だまりのような笑顔で笑った。

その笑顔を見た瞬間。私の中からも言えない、暖かい——本当に暖かいものが溢れだしてきた。

そして、分かったんだ。私だけが真琴さんを友達だと思っている訳じゃないんだって。

自然と顔が綻ぶ。さっきまでの不安が嘘のように遙か彼方へ吹き飛んでいった。

心が暖かい。今までに感じたことのなかった、本当に優しい何かが私の奥深くから溢れ出して、私を包み込む。

私も真琴さんに笑いかける。

「ズルいですよ、真琴さん。そんな事言われたら、一緒に連れて行かない訳にはいかないじゃないですか」

「当然よ！ この私がここまで言ったんだから」

そう言いながら、真琴さんは私の胸元から両手を離すと、そっと涙を拭った。

声の調子もいつもの強気な感じに戻っている。

私はそれに気付き安心した。

しかし、次の瞬間。緩みきってる頬を引き締めると、真琴さんに尋ねた。

どうしても真琴さんに聞いておきたいことがあったから。

「……………真琴さん。一つ、聞いてもいいですか？」

「うん。何かしら？」

私の真剣な表情を見ても真琴さんは動じることなく、私に微笑みかけた。

私はそんな彼女を見て再度緩みそうになっている、頬を一層引き締めると、言葉を続ける。

「真琴さんが私と一緒にいきたい理由は分かりました。ですが、私と一緒にいくと言うことは、これから危険の真っ直中に入ることです。それでもいいんですか？」

そう言うと、真琴さんは可笑しそうに腹を抱えながら笑った。

「あはははは、なあゝんだ。なにかと思ったら、そんなこと？」

「そ、そんなことではありませんよ!! 本当に分かってるんですか? もしかしたら、命を落とすかも知れないですよ!」

私は笑いながら、呑気にそんな事を言う真琴さんを驚いた調子しで言い返す。

すると、真琴さんは笑うのを止めて、首を左右に振りながら両手を顔の横に水平に置くと、やれやれといった感じのため息をついた。

「そんなの関係ないわ。私が行きたいから行くの。危険? そんなの知ったことじゃないわ。それともなに? 本当に私のことを邪魔だと思ってるの」

そう言うと、少し流し目気味に目を細めて私を見る。

「そんなんじゃないませんよ!! 私はまだ、真琴さんを危険な目に合わせたくないだけです!!」

「そんな問題ないわ。だって、ヒカリが私を護ってくれるんですよ?」

真琴さんはさも当然だと言わんばかりに、しれっ、つと返す。

「またもや無茶苦茶な事をこの人はさらっと……」

「そ、それはそうですけど……でも、私には真琴さんを護りきれない自信がないんです」

「大丈夫よ! それに私を誰だと思ってるの? みすみすやられたりしないわ」

そう言っ、自慢げに胸を張る。

私は最早反論する気にもならず、ハア、と一息つく。真琴さんに右手を差し出す。

「わかりました……それじゃ行きましようか、真琴さん」

真琴さんはそれを見ると、笑顔で私の右手を握り返してくれた。

「もちろんよ、ヒカリ」

私たちはお互いに笑いあう。

暗く明るい神秘的な月光の下、私たちはしっかりと手を繋ぎあっていた。

カラカラカラカラ――

不意に私たちのいる渡り廊下に、空洞の空いている物が落ちたときのような軽い乾いた音が、私たちのすぐ側で聞こえてきた。

驚いて手を離し音のした方へ顔を向けると、月光の光を浴びて青白くなっている無数の棒状のものが当たり一面に散らばっていた。よく見ると、辺りに散らばっているのは棒状のものだけでなく、大きいものや小さいものといった具合に実に様々な形、大きさをし

たものもあつた。

突然、目の前に上から黒い丸い形をした物体が降ってきた。

それは、カラン、というやはり乾いた軽い音を立てると、こちらに向かってゆっくりと転がってきた。

そして、それは顔をこちらに向けたところで転がるのを止め、ぽつかりと空いた二つの暗い窪みくぼから、私たちをじっと見詰めた。

私たちは突然の事でお互いに声も出ずに、食い入るようにこちらに向かってきた丸い物体を見詰め固まっている。

カタカタカタカタ――

それが喧しくアゴを打ち鳴らす。辺りには虫の音も聞こえず、更には渡り廊下にいるために音が壁に反響して至る所から音が聞こえ、辺りの空間を不気味に包み込んだ。

カタカタカタカタ――

それ――人間の髑髏がけたたましくアゴを打ち鳴らす度に、頭が地面から跳ね上がる。

神秘的な月の光が、怪しげな光へと姿を変える。さっきまでお互いの息遣いまで聞こえていた無音の空間に不気味な音が鳴り響く。見詰める感情の無い二つの黒い窪み。息を吞んで、金縛りが有ったかのように身動きが取れない私たち。

それはまるで、永遠に続くかと思われるほど長く感じられた。

第9話 孤独な心、見つけた大切なもの（後書き）

ここまで読んでいただき有り難うございます。

もう、この後書きにグダグダと言いつきは書きません。全て僕の責任です。

ただ、前回の後書きの続きを書かせて頂くのならば、それはズバリ、「シリアスだったから！」です。

本当に今回は悩みました。

それで、この結果ですからつくづく自分の文章力のなさに嫌気がさしてきます。

話は長くなるし、真琴の思いを語る下りなんか僕の想像を軽く上回って、自ら真琴に「お前、そんなに悩んだのか」と突っ込んでしまふほど。更には、真琴が全く理解出来ない様な事まで言う始末。

本当に今回は色々と勉強になることが沢山ありました。

前書きにも書きましたが、更新がこんなにも遅くなってしまってますみませんでした。もう、気長にお待ち下さい、とお願いするしかありません。

一応、自分の中で一つの山を越えたつもりなので、次回は比較的早く更新できるかと思われます。（あと、余談ですが、もう一度シリアスな場面が入る予定です。もしかしたら、またそこで更新するのが遅くなるかも（汗））

感想・評価、お待ちしています。どんな小さな事でも構いませんので、是非ともお願いします。真面目にモチベーションが上がるんで……

それでは、改めましてここまで読んでくださり有り難うございました。

次回は、今回の反動で少し暴走するかも知れませんが、どうぞ宜しくお願いします。

第10話 殺す気ですか!! (前書き)

祝、第10話!!!

ここまで飽きもせずこの物語を読んでくださって有り難うございます。

今回は前回の後書きの宣言通り、多少暴走した内容になっています。

書いた今、とっても反省しております。

もし、女性の読者様が居られましたら先に謝ります。

スミマセン。

どうかこれを読み終わった後、ご気分を悪くされないで下さい。

では、どうぞ!

第10話 殺す気ですか!!

私達はいきなり現れた^{しゃれこうべ}髑髏を見て、その場に固まってしまっている。

カタカタカタカタカタ……

相変わらずその髑髏はアゴをけたたましく打ち鳴らしている。

「あっ」

私の口からなんとも情けない声が漏れる。

し、しまったあああ!! 私としたことがガイコツ（これ）の存在にまったく気が付かなかった!! いくらあの状況とはいえ、情けないたらありやしない!!

私は今までガイコツ（これ）の存在に一向に気が付いていなかったと分かり、いささか自らを殴り倒してやりたくなった。

何故ならこのガイコツは——

「キヤアアアアアア!!」

不意に私の横で真琴さんが悲鳴をあげた。

そして悲鳴をあげたかと思ったら、真琴さんはあろうことか突然私の顔目掛けて飛びついてきた。

「ぶっ!!」

真琴さんが私の顔面目掛けて飛びついてきた瞬間、私の顔にとてつもない柔らかい物がぶつかった。

そして更に、私はとっさの事で反応が遅れ、そのまま勢い余って、真琴さん共々後ろ向きに倒れてしまった。

「ぐほっ!!」

不運なことに当然の事ながら倒れたさい、見事受け身をとることに失敗して後頭部を地面に思いっきり打ち付けてしまった。

後頭部には激痛が走り目の前には満点の星空が広がる。
しかし、ここで私は呻くことも悶えることも出来なかった。

何故なら、私はうめき声はおろか、息が詰まり呼吸すらまともにすることが出来なかったのだ。

すぐさま私は氣道を確保しようと急いで頭を左右に振る。
するとどうだろう、私の顔を覆っている“ナニカ”は非常に柔らかないことに気が付いた。

フニユフニユフニユフニユ

柔らかい……非常に柔らかい。それでいて、妙に温かかった。
そして、激しい『ドクドクドクドク』という音が聞こえてきた。

私は呼吸が出来ず、だんだんと朦朧^{もつろう}としてくる頭で、つい先程起こったことを一つずつ思い出してみた。

ガイコツが突然頭上から落ちてきて、カチカチ、と喧しくアゴ^{やかま}を打ち鳴らす↓↓↓私はその正体に気が付き、目の前に出てくるまでまったくその存在に気が付かなかった私自身を恥ずかしい余り殴りたくなる↓↓↓何故か悲鳴をあげた真琴さんが私の顔面目掛け、体ごと飛びついてくる。↓↓↓そして、真琴さんが私の顔にぶつかった瞬間、私の顔にとっても柔らかな感触を感じる↓↓↓そのまま一緒に倒れ、私は真琴さんの下敷きにされる↓↓↓私の氣道は彼女が私の上にいるため塞がれてしまい、真琴さんが私の顔に飛びついてきたさきに感じた柔らかな感触のナニカが、真琴さんが飛びついてきたまま私の顔の上に置かれている↓↓↓そしてその“ナニカ”は柔らかな上に温かく、とめどなく『ドクドクドクドク』という音が聞こえる。

あれ？ これってひよつとして……………いや、ひよつとしなくても、これは真琴さんの……………胸？

カアアアアア

私はそうと気が付いた途端、顔が真っ赤になってしまった。

しかも、顔は火が付いたように火照り、身体も熱がでたようにどんどんと熱くなる。

や、ヤバい！！ このままじゃ色々ヤバい！！ ——なんともグッド！ いやいや、そうじゃなくて！ あっ、真琴さんて見た目によらず、結構おぉ——って、アホか！ 私は一体何を考えてるんだ！ このままだと窒息死しちゃうだろうが！！

そのとき、私の脳裏に明日の学校一番の話題になるであろう記事が浮かぶ。

『神寺光。学校一番の美少女、白羽真琴の胸に潰され窒息死！！』

ああ、この死に方は男として本望……………ってちがーう！！ 早く真琴さんを退かさないと！！ ——えっ？ 勿体無い？ 確かにそうだけど……………ってだ〜か〜らあああああ、このままだと、マジで窒息死するって！！ ヤバい！ こんな事考えてる間にどんどんと意識が遠のいて逝く……………

「モガモガ」

私は最後の力を振り絞り、手足をバタつかせなんとか真琴さんを上から退かそうと試みる。

しかし、真琴さんは真琴さんで死に物狂いで私の頭を抱きかかえているため、失敗に終わってしまった。

というより、更に私の頭をより強く真琴さんの……その……む、胸に押し当ててきた。

あああああ、マズイマズイマズイ！！ 本気でマズイです！！ 嬉し過ぎて———じゃなくてマジで窒息死してしまう………って、ぎやあああああ！！ あ、頭が頭が割れるううううう！！

真琴さんの腕に更に力が籠もり、抱き締めてるとかそんな甘い次元を軽く通り過ぎて、万力という拷問の道具へと姿を変えた。

完全に頭をホルドされ、全く動かせない。

頭がギリギリと締め付けられ、今にも割れそうになる。

どんどん意識が遙か彼方へ飛んでいく。

私は真面目に死の予感がした。

ま、まさか正体不明の妖しに殺されそうになる前に真琴さんに殺されそうになるなんて………

そして不意に、またもや私の脳裏にある言葉がよぎる。

『神寺光。学校一の美少女、白羽真琴の胸に潰され圧死!!』

いやだあああああ!! まだ、『胸に潰され窒息死』の方がいいいい!! って違う違う。おいおい、どうしたんだよ、私! 死ぬ前提かよ、おい! くそ! 今度こそ、真琴さんを退かさないと……

しかしもう、身体に力が入らない。手も足も痺れてきた。

もう……ダ……メ……だ……

「キヤアアアア!」

私のすぐ近くで超高音の悲鳴が聞こえ、危うく三途の川を越えそうになっていた私の意識が現実の世界へと帰ってくる。

そして、突如、今まで私の頭を締めあげていた真琴さんの腕と胸が解かれた。

空気が勢いよく肺へと入り込んできて、思わず何度も咳き込む。打ち付けた後頭部もズキズキと痛み、熱を帯びている。

「ゲホッゲホッゲホッ——」

今度は一体何があったんだ？ さっきまであんなにムチャクチャな力で締めあげていたのに？

不信に思い真琴さんの方を見ると、彼女は腰が抜けたように地面に座り込み、ブルブルと震えて私の背後のある一点を見つめていた。

それを見ると、私は真琴さんの視線を辿って、自身の後ろへと振り返る。

するとそこには人間の形をした内臓の飛び出した、身体の左半分に覆っている筈の皮膚がないなんとも恐ろしい姿の化け物がいた。

それは直立不動で、私のほぼ真後ろに私を見下ろす形で立っていた。

ギロツ

飛び出した左の眼球が突然、うねうねと動き出し、上下左右様々な方向へ動いた後、片目だけで私を見つめた。

「わっ！！」

私はまたもや情けない声を漏らし、不覚にも少しビビってしまった。

ううう、なっ、情けない……さっきといい今といい、こんなに近くに居るのに、自分の眼で確認するまで気付かなかったなんて！
！　ましてや、“彼”や“彼女”に少なからずビビってしまうなんて！！　うわうん、なんだか私、だんだんと自信が無くなってきたよ。

軽く泣きそうに成る程、自分を惨めだと思いつつ、私は“彼”に話し掛ける。

「あっ、あのう。そこで一体何をしてるんですか？　もしかしてあれですか？　私達を驚かそうとしてるんですか？　悪いですけど、ただ立っているだけじゃダメですよ、ジン——ぐえっ！！」

ぐぎゅ！！

ぐああああああ！！　首が今『ぐぎゅ』って、『ぐぎゅ』って！
！　ま、真琴さん、いきなり人の首を力一杯捻りながら抱きつかないで下さい！！　しかも捻った方向、逆ですから！！　分かってますか？　逆ですよ、逆！！　貴女って人はそんなに私を昇天させたんですかあああああ？

私が話している途中に変な事を言ってしまったて申し訳ありません。

しかしですよ！！いきなり人の首を反対方向へ『ぐぎゅ』っと動かされたら、あんな声の一つや二つ出して当然だと思いませんか？

ちなみにですが、今の一連の動作を詳しく説明するならば――

まず、私と真琴さんは向かい合って座ってました。

それで真琴さんが私の背後を見て、身体を震わせているから、私も彼女の視線を辿って、座った状態から左へ身体を思いっきり捻りました。

するとびっくり！！そこにはなんと“彼”が居るじゃないですか！

ええ、認めますよ！私はビビりました！ビビりましたとも！
！これじゃ退魔師失格なんて知ったことじゃありませんよ！！

いや、これはまだいい。問題はその後ですよ！

私が“彼”に声を掛けようとしたら、なんと真琴さんはあるところとか、私の頭を両手でガッチリとホールドすると、すごい力で、グリン、と私の頭を左へ回転させて、後ろにいた自分の胸へ向かって無理やり動かして、抱え込んだんですよ！！

いいですか？　ここで重要なのは、真琴さんが私の頭をどの方向へと動かしたかにあるんです。

そう！！　私はさっき左へと頭を捻ってたんです！　そしたら、真琴さんは更に力任せに私の頭を左へと動かしてくれたんですよ！！

どう考えたっておかしいじゃないですか！　だって、人間の首を動かせる行動範囲の限界より向こうへと動かそうとしたんですよ！　　！　　そりゃ、首も『ぐぎゅ』って鳴りますよ！！

「……………うっ……………うっ……………」

ピクッ！　ピクピクッ！！

い、いかん！　これはさっきよりマズイ状況下にあるぞ！

何故なら、首を無理やり行動範囲を越えて動かしたせいで、身体のアチコチが言うことを聞いてくれなくなってるから！　しかも、ピクピク痙攣を起こしてるし……………それに、未だ身体と頭がそれぞれ不自然な方向にあるし……………

っーか、これ普通死んでますよ！　我ながら自分の身体が恐ろしい……………

いや、結果的にまだ生きているから何も言うまい。

ギリギリ……………

イダダダダダダ！　い、痛い！　痛いですよ、真琴さん！
またですか！？　またなんですか！！　貴女って人は、また人の頭
を万力のごとく力で潰す気なんですか！？

ギリリッ！！

うぎゃあああああああ！！　だから、痛いですって！　明らか
にさっきより力が入ってるって！　せっかく嬉——じゃなくて、そ
んな力で締め上げられたら、マジで私の頭が割れてしまうよ、真琴
さああああああん！！

「……いや……」

グイッ

真琴さんは小さく拒絶の言葉を呟きながら、私の頭を抱き抱えた
まま身体を左へ捻り、左手を私から離して廊下に手を付け、少しで
も彼から遠ざかろうとした。

いやあああああああ！！　ひ、左に！　左に動かないで下さあ
あああい！！　冗談じゃなくて、本当に昇天しちゃいますってええ
えええええええ！！

しかし、真琴さんが左へと身体を動かしてくれたお陰で、なんとか前方を確認する事が出来るようになった。

だが、見えると言っても片目だけだった。もう片方の目は、相変わらず抑え込まれているので、目を開けることが出来ない。

私は片方しか見えない目を精一杯動かして、辺りの様子を知ろうとした。

まず目に入ったのは、私たちの目の前に立ち、両手をまるで映画に出てくるゾンビのように前に突き出し、足を一步踏み出した状態で止まっている“彼”が目に入ってきた。

顔を見ると、口の端を上げて笑っているように見えた。――正直いって、凄まじく不気味だ。

次に目に入ったのは、こちらから見て“彼”の右斜め後ろに居る“彼女”だった。

“彼女”は手や足をやたらめったらに動かして、何かを仕様と必死なようだった。

つまり、こちらはお取り込み中と言うことだ。

自分で直せないんだから、わざわざバラバラに成って現れなくって……

私は思わず、真琴さんの腕の中でほくそ笑む。

自分で言うのもなんだが、私は今、よっぽど不気味なんだろうなあ……　と言うより、不気味を通り越して壮絶な笑みを浮かべているに違いない。あつ、ほら！　“彼”だってビックリした顔で私を見ているし。……あれ？　なんかもう、身体からあまり痛みを感じられなくなってきたぞ。相変わらず、顔と身体は不自然な方向にあるけど。あつ、そうか！　あれか！　所謂『死ぬ直前にそれまで苦しかったものが、少しずつ無くなって楽に成っていく』と言うやつか。いやだなあ、まだ死にたくないなあ。死んだら祟るぞあ。

不意に私たちの頭上にある気配を感じた。

こっ、この気配はまさか！

間違いようが無い。これは“あの子”の気配だ。

しまったな。“彼”や“彼女”が居るんだから、“あの子”がここに居ない筈が無いのに、すっかり忘れていたよ。

頭痛を感じずには要られない。しかし、身体が利かない今では頭を抱える事は出来なかった。

思わずため息が零れる。

今度は一体どんな悪戯をしてくるのか…… おや？

突然、頭上にあつた気配がこちらに向かって接近してきた。

なんか、嫌な予感……

そう思った矢先。突然視界の中に、黒い影が舞い降りてきた。

「ヒッ！！」

私の顔の横で真琴さんが小さく悲鳴を上げた。

顔は私の顔の角度上確認する事は出来ないが、“あの子”が降りてきた時、真琴さんの身体が一瞬飛び上がったため、恐らくは恐怖で目を見開いているのだろう。

改めて意識を前方へと向ける。

そこには言わずもがな、“あの子”が居た。

しかし、その格好は凄まじく異様だった。否、どちらかと言うと不気味とか気味が悪いと言った方がしっくりとくる。

例えるなら、そう——今の“あの子”の姿は『上から無造作に吊り下げられた操り人形のピエロ』そのものだった。

うつ伏せの状態で、頭は力無く下へと垂れ下がり、右腕は不自然

な方向へねじ曲がりながら上へ吊されている。また、左腕は左腕で、身体からほぼ直角に横へと突き出っていて、丁度肘の辺りでこれまた直角に折れて、地面に向かって垂れていた。

身体も激しくねじ曲がっており、右足が殆ど真上にきている。そして、これまた有り得ない方向へねじり曲がっている。

恐らくこの姿が出来る人間はそうは居ないだろう。どっからどう見ても変死体にしか見えない。

それくらい、今、私たちの目の前に広がっている光景は凄まじかった。

不意に、垂れ下がっていた頭が上へと『ギギギギ』という擬音語が聞こえてきそうなほど、ぎこちなく機械的に上がってきた。

上がってきた顔は最初目を瞑^{つぶ}っていたが、完全に顔が上へと上がると、数秒の時間を置いて大きな目を見開き私たちを正面から見据えた。

その眼は小さな顔には明らかに不釣り合いなほど大きく、おまけに人の目の比較的大部分を占めている黒目が極端に小さく、見るからに人間の眼をしていなかった。

白目の部分が月の光を受けて、猫の目の様に怪しげな光を放っている。

それを見た瞬間、真琴さんの身体が恐怖で強張るのを、真琴さんの身体を介して私に直に伝わってきた。

そんな私たちを見て満足したのか、“あの子”は大きな口を、ぐわっ、と開くとケタケタと笑い出した。

不気味な笑い声が、辺りを満たす。

「ヒッ」

私の頭上で、真琴さんが小さく悲鳴をあげる。身体もカタカタと可哀想なほどに震えている。

流石にこれ以上は真琴さんでも、精神が持たないかも知れない……

私はそう思い、半場無理やりに声を搾り出す。

しかし、それよりも早く動くものがあつた。

一瞬真琴さんの身体が跳ね上がり、私の視界に黒い影が現れる。

「いやああああああ！！」

その黒い影は真琴さんの悲鳴に合わせるかのごとく、“あの子”方へと一直線に伸びていく。

そして――

ドガンッ!!

「みぎゃ!!」

なんとも可哀想な声が聞こえてきた。

その声の主は、渡り廊下の床に突っ伏している。

そして、その頭には正真正銘真琴さんの右足の踵かかとが置かれていた。

うわーお!　いつ、痛そう……。……。そうか。さっき私が声を出す直前にどうして真琴さんの身体が一瞬跳ね上がったのか分かったぞ!

つまりはこういう事だ。

恐怖に耐えられなくなった真琴さんが“あの子”に、座った状態という無理な体勢から力カト落としをその頭にお見舞いしたという事だ。

それにしても、相変わらず凄い――元い、惨いむじことをするなあ。
一応、お化けだから死にはしないだろうけど、それでも今、死の淵を彷徨ってるに違いない。だって、今絶対手加減していませんでし

たよ！ あっ、ほら。頭から白い煙まで出ているし……

私は真剣に手を合わせて祈るべきかと考えてしまった。

しかし、結局は呑気な考えであるその答えを出す前に、私の思考はあっさりと真琴さんの手によって強制的に遮られることになる。

真琴さんは息を切らせながら、“あの子”の頭から素早く足を退けると、勢い良く立ち上がる。

その際、真琴さん腕から私の頭は久々に解放された。頭と身体も元の正常な状態へと戻った。

私は、ほっ、と安息のため息をつく。

そして、身体を起こそうと試みたが、残念ながらまだ身体を上手く動かすことが出来なかった。

しかし、手足の痺れはもう感じられず、指先も殆ど自由に動かすことが出来た。もう少し時間が経てば、完全に回復出来そうだ。

我ながら、何という回復力なんでしょうか…… 本当に自分自身の身体がおそろいすねえ……

不意に右肩を誰かに掴まれた。

「ヒカリ、行くわよ！！」

私の肩を掴んだ主は、どうやら先ほど立ち上がった真琴さんだった。

「へ？　ど、どこにですか？」

私はなんとも間拔けな声を出しながら、目を白黒させた。

そんな私を見て、真琴さんは軽くその場で足踏みしながら、私に怒鳴り声を上げた。

「どこに、ってそんなの決まってるじゃない！！　逃げるのよ！！
今すぐに！　ここから！！」

「やっ、ちょっと落ち着いて下さい！　こちらにいる皆さんは安全ですから！」

私はそう言って“あの子”らの方を指差す。

見ると“あの子”は未だ頭から白い煙を出しながらピクリともせず、床に突っ伏している。そして、その横では“彼”と“彼女”があたふたとしていた。

“彼”は焦りの余り、自らの首をグルグルと回しながら、何をどうすればいいのか分からない、と言った感じに忙しくドタバタとしている。“彼女”に至っては、バラバラになっているため頭蓋骨

だけ、“あの子”に近づき、ピョンピョンと跳ねている。

私はそんな可笑しな光景を指さしながら、開いた口が塞がらなかった。

しかし、真琴さんはそんな可笑しな光景には目もくれず、私を急かす。

「つべこべ言っていないで、さっさと立ち上がりなさいよ!!」

「うう〜」

ようやく真琴さんの本気のカカト落としを食らっていた“あの子”がこちらの世界に戻ってこれたようだ。

それを確認すると真琴さんはいきなり、私の袴の襟をむんずと掴んだ。

「ヒカリ! 急ぐわよ!!」

そう叫ぶや否や真琴さんは今にも駆け出す体勢をとる。

「ちょ! ちょっと待って下さい!! そのまま走ると首が閉まっ
——ぐえっ!!」

私の制止も虚しく、そのまま真琴さんは走り出してしまった。
襟を持たれているため首が締めまり、更には身体も思うように動か
せず、なすすべも無く引きずられて行く。

せ、背中がああああああ！！　　と言いか首が締まっていますよお
おとおお！！　　真琴さああああん、離してくださいさあああああ
！！

当然首が締まっているため声を出すことが出来ず、かと言って心
の声も聞こえるはずが無く、私はすごいスピードで引きずられて
行く。

「うううう、いったあうううい！！」

後方から大きな声が聞こえてくると、その正体は先程真琴さんの
カカト落としを食らっていた“あの子”が頭を両手で抑えながら、
目に一杯の涙を浮かべて私と真琴さんを追いかけて猛スピードでふ
わふわと宙に浮きながら追いかけて来ていた。

その後ろには、“彼女”の頭蓋骨を抱えた“彼”も走っていた。

「くそ。もう追いついて来たの！？　　——わあ！！」

やはり後方の声に気がついた真琴さんは、後ろに振り向きつつ軽

く悪態を付く。

しかし、次の瞬間、後ろへ気を取られていたためにバランスを崩してしまった。

ガッン

その際、猛スピードで回転していた後ろ足が、私の後頭部へとクリーンヒットした。

「ぐはっ!!」

真琴さんも後ろ足を私の後頭部へぶつけてしまったためバランスを取ることが出来なくなり、そのまま横転してしまった。そして、その時真琴さんは私の襟を掴んでいた手を離してしまう。

バタンッ

「ぐほっ!!」

私を掴んでいた支えが無くなってしまった為、真琴さんが倒れるのに合わせて私の頭も床へと激突する。

一度に二度も後頭部への強烈な一撃を受けてしまい、私は最早氣

を失いそうになってしまった。

目の前には、先ほど見えた満天の星空を通り越し、銀河系が姿を現す。

「このお〜！！」

“あの子”が文字通り空を飛びながら、私たちの元へ向かって猛スピードで突っ込もうとしている。

「ええい。どうにでもなれ！！」

真琴さんはそう叫ぶと立ち上がり、いつでも攻撃出来るようにと右足を一步後ろへと下げて身構える。

二人が衝突するまで残り十秒。

九……

八……

七……

六……

五……

四……

三……

二……

一……

そして――

「ストロープ!!」

私は無理やり身体を起こすと両手を一杯に広げ叫ぶ。

間一髪。私は二人の動きを止めることに成功する。

先ほどまでとは打って変わって静寂が辺りに訪れる。

その中私は一人――

「あ、あだだだ!!」

――首と後頭部を抑え、襲ってくる激痛に悶絶していた。

第10話 殺す気ですか!! (後書き)

ここまで読んで下さり有り難うございます。

長らくかかりましたが、遂にこの物語も二桁に突入しました。
これも全て、この物語を読んで下さる読者様のお陰です。
有り難うございます。

しかし、自分で言うのもなんなのですが……

今回はマジでひでえ!!

文法も何もあったものじゃありませんね。(最も、お恥ずかしい事に余り文法など知りもせず書いているのですが)

これが祝うべき第10話だと思うと軽く涙が出てきます。

それはそうと、今回はホントヒカリが可哀想でなりませんでした。
(書いている時は凄く楽しかったのですが)

ホント、この回だけで彼は何度死にそうになったことか……ドンマイ(笑)

あと、女性の読者様。本当にごめんなさい。ご気分を悪くされてないといいのですが……

感想・評価お待ちしております。誤字脱字等や文法的な間違いなど、何でも構いません。

是非とも読者様のお声をお聞かせ下さい。

それでは改めまして、ここまで読んで下さり本当に有り難うございました。

引き続き『☆★妖魔封印物語★★☆』をよろしく願います。

第11話 愉快的学校のお化け達（前書き）

ようやくの更新です。

毎度毎度更新が遅くて申し訳ありません。

最近、更新が遅くてこの物語を読んでくださっている皆様に不快な
思いをさせていないかと心配です。

もしもそうであるなら、謝ります。申し訳ありません。

なんか、毎回毎回謝ってばかりでホントみっともないですね。

では、どうぞ！

第11話 愉快な学校のお化け達

「ちょっと！ これは一体どういう事よ！ ちゃんと説明しなさい！」

「わ、わ、分かり、ました、から、とり、あえず、その、手を、離してくだ、さ、い」

私の声がどうやらやっと真琴さんの耳に届いたらしく、真琴さんは「あっ、ごめん」と言いつつ私の胸倉から手を離し、ようやくぶんぶん私の頭を振り回すのを止めてくれた。

私が真琴さんと“あの子”の衝突を決死の思いで止めてから、数分。私は後頭部をはじめとする数々の激痛が癒えぬまま、今の今まで真琴さんの質問攻め——というより拷問を受けていました。

正直、死ぬかと思いましたよ。 いやいや、マジで。

「で？ あれは一体何よ！！ 安全ってどういう事！？」

そう言って、真琴さんは私達から少し離れたところに居る彼らを指差す。

いつもの強気な態度はどこへやら、今の真琴さんは彼らに完全に

そ、それ、ラマーズ法ですよねっ!! 確かに深呼吸と似たような呼吸の仕方をしますけど、真琴さんそれは妊婦さんがご出産される時にする呼吸法ですよ!!

ハッ!! ま、まさかまさか真琴さん……

いやいやいやいや、落ち着け私。そんなはず無い、そんなはず無い。今回は真琴さんもちよつとテンパっているだけだ。

そうだよっ! そんなはずは無い!! そう、です、よ、ね……真琴さん?

「おっ、落ち着きましたか……」

「う、うん。さっきよりは幾らかマシになったわ」

「そっ、そうですか……うん、そうですよね!」

「ヒカリ?」

まさかね。真琴さんに限ってそんな事ありえないですよ。うん。大丈夫だ。

……それにしても、何故、私はこんなにも焦っているんだろう……

しかし、結局その答えは出てこなかった。

その時、私の左頬に暖かな温もりを感じた。

驚いて見てみると、私の目の前に心配そうな顔をした真琴さんがいた。

「ヒカリ、どうしたの？　なんか顔色悪いわよ」

左頬の暖かな温もりは、心配そうな表情を浮かべた彼女の右手に
よるもの。

そうと気がついた途端、顔が一気に熱くなる。

「ななななんでもないです！　全然大丈夫ですよ」

私が慌ててそう言うと、真琴さんは少しだけ眉をひそ顰めた。

しかし、私は焦りのあまりそんな僅かな変化に気がつく事が出来
なかった。

「……まっ、いいわ。で？　あっちにいる“あれ”は何？」

何かを諦めた様にため息をつく、真琴さんは彼らの方を指指し

私に尋ねてきた。

「は、はい。そうでしたね」

私はそう言うと、ここから少し離れたところで、輪になってなにかをしている彼らの方へ身体を向ける。

見るとどうやら彼らはお互いに何か言い合っているようだ。

その時、ふと、私が彼らのほうへ身体を向けたせいなのか、彼らの会話が聞こえてきた。

「ううゝ。まだ頭がズキズキするよおゝ」

「ダイ、ジヨウ、ブ」

「カタカタ、カタツカン」

この会話から推測すると、どうやら前回真琴まことさんのカカト落としを受けた“あの子”を他の二人が心配して声をかけているみたいだった。

ただ……これはおそらく言っではいけない事なんだろうけど……

と、私は彼らの方を見ながら一人心の中でそつと呟いた。

内蔵が丸見えの“彼”と人の骨格だけの“彼女”が心配そうな顔（私の勝手な解釈）で、雪のように真っ白な長髪の女の子に声をかけているというこの構図は――

――なんと言いますか、ものすつごく不気味です。

と言うかこれはもはや変です。だってだって、女の子にガイコツに内蔵オープンですよ！？ 想像出来ますか！？

そ・れ・に、ですよ！！ 内臓オープンがしゃがみこんで下から女の子を心配そうな眼差しで見詰めていて、その上ガイコツが女の子の頭に出来た特大のたんこぶを擦さすっているんですよ！？ これを不気味と呼ばずに何と呼ぶんですか！

……………て言うか、内臓オープンって……………なんかのサービスでしょうか？

『ほら、今日は特別に内臓全部見せちゃうぞ♪』みたいな？ 出血大サービスのノリで。

……………

怖ッ！！　　て言うか、キモッ！！　一瞬でも想像してしまった私がバカでした。ホントなんですか、真面目に気持ち悪いですよ！　それからいい加減、“彼”の名前を出してあげようよ！

そんな事を思いつつ、彼らの元へと行こうと私は歩き出そう――
――として失敗した。他でもない真琴さんの手によって。

「ちょ、ちょっと！　どこに行くつもりよ！？」

そう言って私の腕を持つ真琴さん。その時、腕に柔らかい感觸感じ思わず、ドキッ、としてしまった。そして、脳裏にも前回の映像と感觸が蘇ってきた。

顔をはじめとする体中が熱くなる。それに加えて心臓の鼓動も早くなる。

私も一応男なんで……

私は出来る限りの平静を保ちつつ、真琴さんに問いかける。

「ど、どこにって、そんなの彼らのところに決まってるじゃないですか」

「絶ッッッ対イヤ！！　あんなお化けみたいなのがいるところにな

んて絶対イヤよ!!」

あの……あれは紛れもなくお化けですよ、真琴さん？

「え？ でも、さっきあの人たちの事を説明しろとかなんとか言っていないでしたっけ？」

「言ったわよ！ でも、わざわざ向こうに行く必要無いじゃない！」

「で、でも——」

「い・い・か・ら、ここで“あれ”の事を教えて!!」

「……りよ、了解しましたです、はい」

こ、怖いです！ 恐ろしいです！ まさに鬼です！ 口が裂けても
言えませんが……

「えっと、あの人達はですね——」

「ちょっと待ったあああ!!」

私が彼らの事を説明しようとしたら、突然、真琴さんでもましてや私でもない、甲高い声が私の話を途中で強制的に遮る。

その声に驚き、声のした方を見やると前回真琴さんまことのカカト落としを食らって、特大のたんこぶを作ってしまった女の子が怒ったように腰に手を当てて私達を見ていた。

それに気づいた真琴さんは小さく「ヒッ！」と悲鳴を上げると、すぐさま私の背後に逃げ込んでしまった。

何もそこまで怖がらなくたって……

「どうしてあたし達に断り無く、あたし達の事をその暴力野郎に教えようとしてるの？」

そう言いながら、後ろの二人を引き連れて私の前まで来て、私を睨み上げる女の子。

身長は大体150センチより少し大きいくらい。腰まで伸びた雪のような真っ白な髪の毛を括くくるでもなく、無造作に靡なびかせている。また、肌も髪と同様に雪を思い出させるほど白い。そして、最も目を引くのが、彼女の目だ。

まるで新緑思わせる碧の瞳。小さな顔には大きすぎるんじゃないかと思えるほどの、とても大きなバッチリとした目。かといって、まったくそれが不自然に見えず、寧ろそれがごく自然でぴったりと見える。

まさに絵に描いたような西洋人形を思い出させる、真琴さんにも

負けず劣らずの美少女だった。

「ひかりん、知ってる？ お化けにもちゃんとプライバシーってものがあるんだよ？」

そう言いながら、尚も睨み上げてくる女の子。

そして、あんな事を言われれば当然、勝手に彼らの名前を出すわけにはいなくなってしまうた。

未だ真琴さんは彼らの方を見向きもせず、私の服を握り締めている。

一体私はどうすればいいのですか？

「ご、ごめんなさい。でも、こちらの真琴さんがあなた方の事をどうしても知りたいと言っていたので」

「どうしてもなんて、一言も言ってない！！」

後ろで私にしがみ付いている真琴さんが大きな声で反論してきた。

“あの子”は一瞬、キョトンとした表情を浮かべたが、直ぐに「ふーん」とか呟きながら、私の後ろに隠れている真琴さんの顔を見ようと、横から後ろにいる真琴さんの方へ顔を覗かせる。

それに気づいた真琴さんは、一瞬だけ“あの子”と顔を合わせると、直ぐに“あの子”から離れようと、当然私の服を掴みながら身体を引く。

同時に私も激しく振り回される事になってしまったが、“あの子”はそんな私たちには目もくれず、両手を、ポン、と合わせるたまるで面白いものを見ているときのようになに話し始めた。

「あつ！ 道理で似たような顔をしている人を恐がらせているなあ」と思ってたらさっき恐がらせた人と同じ人じゃん♪」

そう言うとき、キヤツキヤツと喜んで、後ろにいる二人に声をかける。

「は？」

ええ？ さつきも恐がらせたって？ 何、どういう事？

「だあゝかあゝらあゝ」

と、困惑したような表情を私がしている事に“あの子”が気づき満面の笑みを浮かべて、まるで今日学校であった事を母親に楽しそうに話し始める小学生みたいに私に話しかけてきた。

「ついさっきも、この女の人を恐がらせたんだよ!! もろ、すぐく面白かったんだよ!! それにね、聞いてよひかりん! 最後はとおくても大きな声で『キヤアアアアア』て叫んだんだよ!!」

あの悲鳴は貴方たちの仕業かあああああ!!

私に楽しそうに言った後、“あの子”はその時の事を思い出したようで、更に愉快そうに笑い出した。

まったく、この子は……

私は思わず右手で顔を覆うとため息をついた。

「まっ、いっか!」

一頻りひとしき笑った後、“あの子”は自分の胸を指差し、高らかに宣言した。

「あたしの名前は、メリーさん。夜の学校の、みんなのアイドルだよ♪」

第11話 愉快な学校のお化け達（後書き）

ここまで読んで下さり有り難うございます！！

ちょっと前回があまりにも自己満足みたいな形になってしまったと思っただので、今回はそんな事がないように心掛けました。が、本当に自己満足みたいになっていないかどうか心配です。あんまり自信がないので（苦笑）

それに、今回はタイトルがあれなのに、肝心のお化け達があまり活躍しませんでしたね（汗）

ですが、ようやく役者も揃ってきたので、この話も段々と賑やかになっていきますよ。まだ、全員出てきた訳じゃありませんが……

それはそうと大変な事が二つ。

一つ目。肝心のキャラがただの一度も出ていない事。

なんと、この物語はタイトルに『妖魔封印』と書いているにもかかわらず、肝心の妖魔が全然出てきていないんですよ！！（文章として出てきていても、本体は一度も出てきていないんですよね）マズイです。これじゃ、この話が成り立たん！！

一応、次回にちよろと出てくる予定にはなっているのですが………どうなるんでしょう（汗）

二つ目。また更新が著しく遅くなる事。

これは僕の学校がもうじき学年末試験に突入するからです。只でさえ遅くて、皆様にご迷惑をお掛けしているのに………

でも、きつと現実逃避も兼ねて、少なからずあと一話はテスト期間

中に更新すると思います。気長にお待ち下さると幸いです。

なんだか、今回の後書きはいつも以上にまとまりのない上に、無駄に長くなってしまいましたね。

それでは改めまして、ここまで読んで下さり有り難うございました。

また、無駄に長々と申し訳ありませんでした。

次回も例のごと遅くなるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。

第12話 真琴VSメリーさん?! (前書き)

はい。と言う訳で久々の更新です。

いやあ、試験期間中に更新するとかどうとか言いながら結局こんなに遅くなってしまって本当にすみません。

それはそうと、今回、すっごく長くなってしまいました。それも無駄に。

なんか色々とごめんなさい (土下座)

では、どうぞゆっくりと読んでやってください。

ああ、そう言えば……………皆様は、メリーさん以外のお化け達の正体にもちろん…気付いていらっ……………しゃいま…すよ…ね? (汗)

今回は前回、名前を出す事が出来なかった二人の名前もちゃんと出てきますよ!!

第12話 真琴VSメリーさん?!

はあ？ メリーさん？ 夜の学校のアイドル？ まったく何が何だかさっぱりわからないわ。

私は思わずその場で、バカみたいに固まってしまった。

「おい、もっしもし。聞こえてますか」

メリーさんとか名乗った女の子が、あまりにもリアクションの薄かった私の顔の前で右手をひらひらさせている。

「ねえ、ひかりん。このにいちちゃん、全然反応してくれないよ」

私の顔の前で手をひらひらさせているのに飽きたのか、隣にいるヒカリに話しかけるメリーさん。

「当然ですよ。誰だって普通の人は、この状況にあの微妙な説明をされたらこうなりますよ。……あと、その妙な呼び方、いい加減にやめてくれませんか？」

メリーさんの言葉にため息を付きつつ、ヒカリは答える。

「ええ、なんでえ？ ひかりんはひかりんでしょ？」

ヒカリの言葉にメリーさんは直ぐに頬を膨らませてヒカリを見る。

それにヒカリはまたまた呆れるようにため息をつくど、ボソツと言った。

「小学生ですかあなたは」

「ぶう、小学生じゃないもん。メリーさんだもん」

さながらフグのようにますます頬を膨らませてメリーさんはヒカリを睨み付けている。しかしそれも束の間、直ぐにメリーさんは表情を楽しそうな表情へと一遍させると、ポンツ、と手を叩いた。

と言うか、私は完全に蚊帳かやの外なのね？ 何そこで勝手にそれこそ小学低学年みたいな会話をしているのよ。ねえ？ 今、こうして私がここに立っている事なんて、綺麗さっぱり忘れているんじゃないでしょうね？

「あっ！ わかった。つまりひかりんは『ひかりん』と言うあだ名がイヤなんだね！？」

「一体、どこをどうひねくったらそんな答えが導き出されるんですか？」

「うんうん。そうかそうだったんだね、ひかりん。ごめんね。あたしったら全然気が付かなかったよっ！」

「いや、だから――」

ヒカリの話など完全にスルーしながら、メリーさんは一人、うんうん、と頷きながら勝手に納得してしまった。そしてしまいには「よし！　じゃあ、新しいあだ名を考えて上げないといけないねっ！」とかまたまた勝手に言い出したてしまった。

「ん〜ん。だったら、どんなのがいいかなあ〜」

「そんなに悩むなら初めからそんなの考えなくてもいいじゃないですか」

「ねえ？　ジン太くんとガイ子ちゃんはどうなのが良いと思う？」

「また、無視ですか」

横で文句を言うヒカ리를華麗に無視すると、メリーさんは後ろで立っていたガイコツ達に話しかけた。

って！ え？ え？ ジン太くんにガイ子ちゃん？ 何それ、ひよ
つとして後ろに居る訳のわからない連中の名前！？

「ねえ、ねえ。ジン太くんとガイ子ちゃんはひかりんの新しいあだ
名は何が良いと思う？」

混乱し続けている私を一人置き去りにして、メリーさんは相変わ
らず楽しそうに後ろの二人（？）に話しかけている。その横では、
やはりヒカリが頭を抱えていた。もう、呆れてものが言えないみた
いだった。

メリーさんの問いかけに人の形をしたグロテスクな方が、カクカ
クとしたぎこちない感じで口を開いた。

「ソウ デス ネ 『ライト』 トカ？」

その口から、やはりぎこちない声が漏れる。何よりしゃべれた事
に驚きを隠せないけど、どうも呂律が回っていないくて片言に聞こえ
てしまう。

「ヒュー、カッコイイ！！」

そう言ってバカにしたようにメリーさんはヒカリを見る。

「じゃ、ひかりん改め、ライト！ うん。かつこいいね！ ライト、ライト♪ ……………そういえば、あれ？ おつかしくな、ライト。後ろに死神はいないの？ あっ！ そういえばノートがないと駄目だったね。じゃ、今、あたしが見えないだけで後ろにちゃんいるのかな？」

相変わらずメリーさんはニタニタといやらしい笑みを浮かべている。

「あゝ、もう！ 何、世間一般で広く知れ渡った名前出してるんですか！ 第一、死神が後ろにいるとか言わないで下さいよ！！ それ、結構リアルで、まったく笑えませんか！！ 不吉にもほどがあります」

そう言いつつ、ヒカリは色々な意味で焦っている。ちなみに、私はヒカリの意見に大賛成。

さっきは勢いに任せてあんな事言っただけ、本当は恐くてしようがないのよ！ 第一、夜の学校に居ること事態有り得ないってのに！！

「カチカチカチ、カッチカチ、カチ？」

突然、何かを打ち鳴らす音が聞こえたことと思うと、メリーさんの

後ろに居たガイコツが、メリーさんの方を向いてアゴを上下に打ち鳴らしていた。なにを言っているのかを理解するなんて、はつきり言って不可能に近い。第一、日本語とか英語とか、そういった言語にすらなっていない。

しかし、私はそんな光景を見て不覚にも少し……ほんの少しだけビビッてしまった。

「ぶ！　ぶはははは！！　ガイ子ちゃん、おつもしろい。それいいね♪」

ガイコツの打ち鳴らす音（もしくはは声？）を聞いた途端、メリーさんは腹を抱えて文字通り笑い転げ始めた。驚いた事にちゃんとガイコツ（ガイ子ちゃんとかだっけ？）の言っていた意味を理解する事が出来ているみたいだった。恐るべし。

しかし、それとは別にまったく予期していなかったヒカリもその意味を理解したらしく、顔を真っ赤にさせてメリーさんとガイ子ちゃん？　に言い返した。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！！　幾らなんでも、ぴっかりんはないでしょ！！」

うわぁ……。なんかイヤなあだ名。

「将来、頭もあだ名と一緒に、ぴっかりん♪ ぶはははは」

「なにまた、不吉な事言っちゃっててくれるんですか!! 今もこの先も私は問題ありません!!」

「エッ! ヒカリサン ソンナノ タイシタコト アリマセンヨ!
ゲンニ ワタシハ モンダイアリマセンシ」

「それはあなただからです!! 元々、あなたには髪の毛なんてないでしょ!!」

「カッチカチ、カチカチカチ?」

「ガイ子さん! なにが『やっぱり、気にしてたんですか?』ですよ!!! そう思うんだったら、わざわざ言わないで下さいよ!! 第一、気になってなんかないし心配もしていません!!」

「あはははは!!! ぴっかりん、必死だあ。やっぱり、気にしてたんだけ」

「だから、してませんって!! 何度も言ってますが――」

「ねえ?」

私は、目の前で繰り広げられる不毛な言い争いにいい加減呆れたのと、これまで一人ほっとかれて、黙っているのに疲れたのとで、ヒカリの言葉を無理やり途中で遮る。ちよっと、不機嫌そうな感じになってしまったけど、それは仕方がないことにしておこう。

「いつまで私を置いて、そっちで勝手に話し込んでるの？　て言うか、私の存在を忘れてたでしょ」

私がそう言うと、ヒカリはその場で心底驚いたのか、大きな声を上げた。

これで私の事を忘れていたのは決定つと。さてさて、どうしてくれるようかしら……

「わわわ忘れてなんかいいですよっ！　全然、オツケーです！」

なにが『オツケー』なのかは、とりあえず置いておくとして。私は左手を腰にを当てると、向こうに居る三人組を右手で指差す。

「で！　あれは一体、何？」

そう言って、ジロツ、と睨むとヒカリはあたふたと話し始めた。

「えーっと、ですね……」

そう言いながら、ヒカリは私たちから見て左側に居るグロテスク

な方を手のひらを上にして示す。

「まずは、こちらから見て左に居るのは、じん——」

「あははは、バツカじゃないの？」

突然、笑い声が聞こえたかと思うと、私たちから見て、三人のちようど真ん中に居るメリーさんと名乗った女の子が私を見ていた。

「気づくしょ、ふ・つ・う」

そう言って、私を馬鹿にしたようにそのメリーさんは笑った。

それを見て、少々ムカツ、とした私はそのメリーさんに若干怒りを含んだ声で言い返した。

「気づくって、何をよ」

「だから、あたしたちの事よ！ さっきあたしはメリーさんって名乗ったし、ジン太君とガイ子ちゃんを見たら、普通わかるでしょ？」

そう生意気な口調で言われ、更にムカツとした。

その時、横に居るヒカリが私に語りかけるように話し始めた。

「ほら、左側に居るのが第三理科室に居る人体模型のジン太君で、右側に居るのが第一理科室に居るガイコツの模型のガイ子さんです。それから、真ん中に居る女の子はメリーさんと言いまして、通称、雪ちゃんです」

わっ、分かってたわよ、本当は！！　でも、でも、それだと――

「っ、つまりは……今、私たちの目の前にいるこれは、本物のお、お、お化――」

「お化け、ですね」

わぁー！　そんなにあっさり言わないでよ！！　ダメダメダメ、本っ当にダメ！！

本物のと認めた途端、体が自然に震えてきた。更には嫌な汗も噴出す。

どうしよう……本当はお化けとか幽霊とか、そう言った類は全然ダメなのに！！　でも、ヒカリと一緒に行くといった手前。勿論、出会わないわけがないと思ってたけど、まさかこんなに早く出てくるなんて……………

いっ、いい、真琴？　まずは落ち着くのよ！　ほら、吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー……」

「ど、どうしたんですか？ 真琴さん？ 突然深呼吸なんかしだしたりして」

余談だが、真琴がお化けやら幽霊やらがダメになったのは、母親である彩花（理事長）のせいだったりする。ちなみに、真琴は雷もダメだったりする。その理由は、雷が鳴り響く豪雨の晩のときは決まって、彩花が家族全員を暗く狭い部屋に集めて、ろうそくを一本だけ灯して、怖い話をしていたからである。しかも、ども話も氷点下を通り越して、絶対零度の恐怖を誇っていたりする。更に恐ろしい事に、彩花が離している間は泣こうが喚こうが気絶しようが口から白い煙りが出てこようがその他どんな事があるうとも続行される。まさに、この行事は白羽一家最大かつ最凶の悪魔の行事なのである。

「あつ、あのー、本当に大丈夫ですか？」

ヒカリが心配そうな眼差しで私を見る。

正直、心配してくれるのはかなり嬉しいけど状況が状況であるためか素直に喜べない。

と言うか、この目の前にいるいかにもひ弱そうな、一見しただけだと普通に女の子にしか見えないヒカリが、極々普通に目の前のお化け達と会話しているかつ、顔色一つ変えずにしているのを見ると、何故か無性に腹が立ってくる。一体どうしてなのかしら？

なんて言うか、こう……男のなに普段は男らしいところなんてこれっぽちも見せないくせに、こういう時だけ度胸のある男みたいな反応をするんじゃないわよっ！　みたいな？　いや、違うか。第一、『男みたい』じゃなくて、そうだし。きっと慣れなんだろうなあ。

「うっ、うん。なんとか大丈夫よ」

そう言って私は何とか顔に笑顔を貼り付ける。手とか色々なところがプルプルと震えているような気がしてるけど、そこはもちろんスルーする。

「あはっ♪　大丈夫とか言ってるくせに体が震えてるよぉ」

目の前にいる三人のお化けの真ん中にいるメリーさんが、ニタニタと腹立たしい顔で私を見る。悔しいが私は反論出来ない。

「そんな事、言っちゃダメですよ！　真琴さんはお化けなんてきつと始めて見たんだろうし、それに見ていたとしてもやっぱり怖いものは怖いと思いますよ！　なにより、ついさっきあなた達が真琴さんを怖がらせたばかりだと言ってたじゃないですか。だったら、幾ら真琴さんといえど怖いに決まっていますよ」

庇ってくれたのは嬉しいんだけど、最後の一言が余計よっ！！

ヒカリが私をフォローしてくれたかいたってか、メリーさんはその腹立たしいニヤニヤ笑いを止めると、今度は無邪気な笑みを顔一杯に浮かべ、「それもそっか♪ まっ、あたし達に掛ければ当然よねっ!!」と言った。

その瞬間、軽くプチンときた。さっきまでのわざとらしさが感じられず、心底「そう思ってます♪」みたいな感じで言われて、流石に目の前にいるのがお化けだと分かっているも頭にきた。

ヒカリもヒカリで、私の横でまため息をつく。

「でもさ」

そう言いながらメリーさんは私の方へゆっくりと歩いてきた。なにやら不敵な笑みを浮かべて。

「なっ、なによ……」

そう言って思わず私は後ろに後ずさる。

しかし、そんな私にはお構いなしにメリーさんは私の目の前まで来ると、私の左肩に手を置く。

私の方が背が高いため、メリーさんは爪先立ちだった。その姿が何所となく可愛い。例えお化けだとしても!!

その状態のままメリーさんは私に、まるでこれから言う事をしっかりと聞きなさい、みたいな感じで話し出した。

「男のくせに、女の子みたいな悲鳴を上げるのはどうかと思うよ。まあ、このあたし達に怖がらされたら、仕方ないっちゃ仕方ないけどさ」

.....

「「はあ?!」」

暫しの沈黙の後、ヒカリと見事シンクロした。

今、ちょっと——いえ、かなりおかしいな単語と表現がなかった? それとも私の聞き間違い? いやでも、ヒカリも一緒に言ってたから本当にこのメリーさんとかいう娘が言ったの?

「あつ、あの雪ちゃん? 今、なんて言いました?」

隣で私の心中を代弁してくれたかのようにヒカリがメリーさんに尋ねる。

メリーさんは一瞬、キョトン、とした表情を浮かべたが、再度口を開く。

「もお、ちゃんと聞いててよ。だから、男の子なのに女の子みたいな悲鳴を上げるのは情けないと思うよって、言ったんだよ。まあ、でも、あたし達に――」

「ちょ、ちょ、ちょっと待って。今、私の事をなんて言ったの？」

今度は私がメリーさんの話を強引に遮ると、もう一度聞きなおす。

メリーさんは話を途中で遮られ、ポカン、という表情を浮かべたが、すぐに私の問いに答えてくれた。

「えっ！ 何って、にいちゃん、男の子でしょ？」

ブチッ

「お、男の子ですって……」

さっきとは違う意味で手とか色々なところが震えてきた。

「えっ？ 違うの？」

そう言うとメリーさんは可愛らしく首をかしげる。その動作は今の私に火をつけるには十分すぎるくらいの威力だった。

「なんで、私が男の子なのよ!!」

私は目の前に居るのがお化けだという事も忘れ、メリーさんに向かって怒鳴る。

「なんでって、見るからにカッコイイ顔してるし、最初の方だって『にいちゃん』って呼んでも反応しなかったから」

言われてみれば、そう呼ばれていたような気がしなくてもない。

「それは気が動転して聞いてなかったからよ!! 第一、第一人称とこのスカート見れば、私が女だってことに気づくでしょ!!」

私が再びそう怒鳴ると、メリーさんは詫びれた様子もなく、寧ろ、驚愕の表情を浮かべた。

「へえ、そうだったんだ。あたしっただらてっきり、ヒカリみたいに女装してしているのかと思ってた♪」

「なっ!!」

思わずその場で固まる。開いた口が塞がらない。

「そんな酷い事思ってたんですか？ 第一、好き好んでこんな格好しているわけじゃないですよ」

横でヒカリが言い返している。しかし、メリーさんはヒカリの話を無視すると、

「それにしてもなんか信じらんないなあ。まっさか、この人がにいちちゃんじゃなくて、ねえちゃんだったなんてなあ。へえ〜んなのお」

心底面白そうな顔で私を見てきた。

ブチブチブチッ

遂に私の中の色々な線が切れた。

「い……いい加減にしなさいよ……」

私は一度顔を下に向ける。そして、直ぐに顔を上げると、メリーさんに向かって怒鳴る。幽霊だとかどうとかはもうどうでもいい。

「なんで私があんなバカな男なんか間違われなくちゃいけないのよ!!」

「だっさあゝ、顔がカッコいいんだもん。しょうがないじゃん」

その一言に余計に頭がカッとなる。

「ちょ、真琴さん落ち着いてください!」

ヒカリが横から私に話しかける。

「うっさい!! ヒカリは黙ってて!!」

そう乱暴にヒカリに返事を返し、ヒカリを、ギロツ、睨む。

「まあまあ、そんなに怒らないでよ。ね?」

そう言いながら、メリーさんは謝る気など全くない感じで私に話しかけてくる。そして、彼女を見るか限り、メリーさんは私のこの状態を楽しんでいるように見える。現に口元に手を当てて、笑いを堪えている。肩がプルプルと震えているのが何よりの証拠だ。なんと腹立たしい。

「貴女こそ、うるさいわね！ 第一、貴女なんかに言われたくないわよ！ ふん、何がメリーさんで夜の学校のアイドルよ。学校のお化けで一番有名なお化けの女の子は、普通トイレの花子さんでしょ！ それに比べたらあなたは知名度の低い脇役じゃない！！」

「ああ、あたしが一番きにしていることをよくも言ったなあ！ なによ、どうしてみんなあんなトイレに居る、陰湿でジメジメしたカビの生えてそうな女の方がいいみたいな事言うのよっ！！」

私に最も言われたくない事を言われたせいにか、今度はメリーさんが怒り出した。いい気味だわ。

「ふん、陰湿なのは貴女だって一緒じゃない。わざわざ人の携帯に自分の居場所を教えるような電話なんかしてきて。そっちの方がよっぽど陰湿だし、性質たちが悪いわよ！！」

「なによなによぉ！ あたしはただ親切に『これからメリーさんがあなたの目の前に現れますよ☆』って教えてあげてるだけじゃない！！」

「だからそれを性質が悪いって言うのよっ！！」

「ちょ、ちよつと二人とも!!」

横でヒカリが何かを言っている気がするけど今はそれど頃ではない。

「あゝ、せつかくあたしが親切に教えてあげたつてのに!!!!
なによ、さっきなんてあんなに悲鳴を上げて今にも泣きそうな顔
していたくせに!!」

「あんなの誰だって怖いに決まってるじゃない。そもそも、あんな
風に人を怖がらすあなた達が悪いのよ!!」

「言ったなあ」

そう言いながらメリーさんは床に悔しそうに片足で足踏みする。
でも、直ぐにそれを止めると、ピシッ、という音が付くくらいの勢
いで私を指差す。

「じゃあ聞くけどさあ———学校のお化けが夜の学校に忍び込ん
だ学生を怖がらせなくてどうするのよ!!」

「うっ!!」

これには参った。思わず、私は次の言葉を飲み込んでしまう。そ

れでも、目だけはしっかりとメリーさんを睨む。

「ほっ、ほら、真琴さんも雪ちゃんも落ち着いてください」

ヒカリが必死に私たちを止めようとしている。けれども、私たちはお互いに睨み合ったままその場にじっとしていた。

——その時だった。

「危ないっ!!」

「「えっ!?!」」

不意にヒカリから放たれた警告。私とメリーさんの声が見事に重なる。

次の瞬間、ヒカリはそんな私たちを無視したまま、私たちの間に割り込むと、両手を前に何も見えない廊下の向こうがへ突き出した。

『我を護る聖なる光よ その大いなる力を持って彼の者から我を護る盾となれ』

ヒカリはいきなりそう大声で呪文のような言葉を唱えた。

その直後、何も見えなかった廊下の向こう側から白い線のようなものが伸びてきた。

間一髪。ヒカリが前に突き出した両手からまばゆい光が溢れ出てきて、その白い線から私たちをまるで盾のように防いだ。

私は突然の事に目を大きく見開く。

何にも考えられない。ただ、目の前の光景が信じられなかった。

「そこから出てきたらどうです？」

ヒカリが光の盾をと解きながら、白い線が伸びてきた暗闇に向かって、普段は聞く事の出来ない低い声で訊ねる。

暫しの間の後、暗闇から声が聞こえてきた。

「ほお、我が糸をいとも容易く防ぐとは。なかなかやるではないか、人の子よ」

そのこんな場所でなければ思わず聞きほれていたに違いない綺麗な声とともに、暗闇から女の人がゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。

全身に見たこともないような服を纏い、腰に届いていそうなほどに長い綺麗な漆黒の髪を無造作に下へと垂らしている。また、肌は辺りが暗くてよく見えないはずなのにその白さが確認できるほどその白さが確認できるほど白い。

顔は長く綺麗な眉毛に、若干つりあがった目。瞳の色は黒。筋の通った鼻に、薄い唇。それら他の顔のパーツも合わせた各部分が絶妙な位置にそれぞれあり、何ともいえない美しく妖艶な顔を形作っていた。

そこにはまさに、絶世の美女と呼ぶに相応しい女性が立っていた。

私は思わずその場で大きく息を呑む。姿は確認できないが、メリーさん達も大きく息を呑むんで驚いているのがわかる。

「ふむ。これは驚いた。人の子にしては大層な霊力を持っておる。気に入った。どうじゃ？ 我の糧となる気はないか？」

そう言いながら、その女性は、クッククック、とひとりさも愉快そうに笑う。

「真琴さんたちは少し後ろに下がっててください」

そう言うが早いか、ヒカリは数歩前に歩き、私たちから距離をとった。

背を向けているため表情を見ることは出来ないが、その小さな体からは只ならぬ雰囲気を放出されている。

「生憎、私にはそんな趣味はありません。……………ここで、あなたを倒します」

私たちから数歩先で立ち止まったヒカリが、暗闇から出てきたあの女性に向けて、低い声でそう力強く宣言した。

すると、その女性はまたもや、クッククツ、と愉快そうに笑った。

「面白い事をいうのお、人の子よ。そのちっぽけな力で我を倒すとな。おもしろい。相手になってやろう」

女の人はその言い返すと、ヒカリを嘲笑うかのように笑った。

「行きます」

それを合図に、ヒカリはその女性の元へ向かって突然走り出した。

第12話 真琴VSメリーさん?! (後書き)

ここまで読んでいただき有り難うございます。

やりました！ 遂にこの話のある意味では最も重要な人物を出す事に成功しました！！

長かった……本当に長かった（しみじみ）

なにせ、彼女は本来第10話に登場する予定でしたからね！！（と言いましても、最後に無理やり入れた感じになってしまいました）

何と酷い事でしょう。自分の文章力のなさを本気で呪いたいです。

まあ、道のりは長かったですけど、これでやっと次回からこの話の真の本番がスタートする事になります。

え？ 今までののはなんだったんですって？

もちろん、今までも本番ちゃんとした本番でしたよ。

でも、次からが真の本番（↑意味わからん）

なんか、今回の後書きはうざったらしくて、本当に申し訳ありません。

ですが、ちょっとテンションが上がってしまっているもので（苦笑）

学年末は終わったし、心配だった赤点も一つもないし、もう半分春休みだし（笑）

ということで、更新の方をしつかりと頑張ります。ええ、それはもう、今までを取り戻す勢いで。

あ、ですがさっそく次回は少し遅れるかもしれません（いきなり前言を撤回してしまってすみません）

その理由は……長くなりそうなのでまた次回という事で、勘弁してください（土下座）

あつ、それともう一点皆様に謝らなくてはいけないことがありました。

それは『詳しい真琴の説明』です。

実はとあるきっかけまで、真琴の容姿云々を全くと言っていいほど書いていない事に気がつきませんでした。本当に申し訳ないです。なので、最後にちよろっと書きますね！ 勿論、別にいらな思われましたら、飛ばしてください結構です。

それでは改めまして、ここまで読んで下さり有り難うございました。

次回は今までも大してなかったコメディーが完全でない、純戦闘になりそうですが、どうぞ読んでやってください。

【白羽真琴】
しらばねまこと

年齢…15歳

性別…女性

身長…大体170センチくらい

容姿…彼女を一言で表すなら、少し気の強い美少女。しかし、美少女とは言っても見ようによっては美男子にも見えなくはないような容姿をしている。そのため時折、初めて出会った人には男子だと間違われる事もしばしば。（例…今回の話やヒカリと初めて出逢ったとき^^）

長く綺麗な眉。気の強そうな目。筋の通った鼻に、桜色の薄い唇。髪の色は黒と茶色の間と言ったところ。その髪の長さは、肩に掛かるか掛からないといったぐらい。（ちなみに、地毛）
肌の色は特別白ということはないが、それなりに白い。（外などで運動をしているため。本当は雪のように白い）

ふう、こんな感じですかね。その他各部分は皆様の想像にお任せします。それと性格はあんな感じです（笑）

それではまた次回、出来るだけパツパツと仕上げますので、今回はこの辺で失礼します。

第13話 妖しきオンナ（前書き）

思ったより早く更新できて、ちょっぴり安心しています。

そして、戦闘シーンだと（上手い下手はとりあえず置いといて）ス
イスイと書いてしまう自分が、なんとなく憎い……

では、どうぞ！

第13話 妖しきオンナ

間違いない！ 全身から溢れ出ている禍々しい妖気。こんなに遠くからでもわかるナイフのように鋭く、今にも凍えてしまいそうなほどに冷たいオーラ。先ほど放たれたあの糸のこの感じ。間違いない。目の前にいるあの女性こそが今回の事件の犯人。

迂闊だった。これほどの妖気を持っているのに、何故最初の攻撃が来るまで全然気がづかなかったのだろう。手が震えているのがわかる。怖い。今まで感じたことのない恐怖が私を襲う。今にも逃げ出したい衝動に駆られる。だが――

今逃げれば次はない。それに、ここで逃げてしまったら、真琴さんたちが危険な目にあってしまう。

瞼を閉じて大きく息を吸い込む。そして、ゆっくりと吐き出して気持ちを落ち着ける。

よし、いける！

私は勢いよく目を開けると、掛け声とともにあの女の人に向かって駆け出した。

距離は大して離れていない。この距離ならばものの数秒で女の人の下へたどり着く事が出来るだろう。

けれども、今のまま何も考えずに飛び込んでいったら返り討ちにされるのは目に見えている。

ならどうする？

今、お互いにお互いを真正面から見据えている。今更隠れて不意打ちを食らわす事は出来ない。第一、私はもう走り出している。

ならどうする？

私は走りながら高速で頭を働かせる。

戦いの基本はいかに相手の裏をかくかにある。相手の予想外の攻撃、予測不可能な手段。それらを使い相手に戸惑いや焦りを生ませる。そうして生まれた戸惑いや焦りは相手の動きを一瞬ではあるが動きを止める事が出来る。

ほんの一瞬でも構わない。戦いの中ではその僅かな時間が勝敗を大きく分けるのである。

ならどうやってその隙を作る？

私はさらに頭を捻る。

そうこうしている間にどんどん彼女に近づいていく。

「我もしばし眠っておったからの。加減の仕方には少し自信がなくなってももうたな。とは言え、そう簡単にやられてくれるなよ、弱き人の子よ」

紫色の見たこともないような服をした彼女がそう言って嘲笑う。

だが、そんなの構っている暇はない。

私は両足に霊力を送る。もうこれしか彼女の裏をかき、尚且つ攻撃を与える機会を作る方法は残されていない。

踏み出した足の膝を深く曲げ、力を溜める。

一瞬、私の体が止まった後、両足に溜めていた靈力を爆発させる。その勢いを使い、残りの距離を一気に縮める。

そして、左手で右手を支えつつ彼女の腹部に押し当てる。

この技は我が家に伝わる技の一つで、縮地法を改良したものだ。両足に靈力を集中させ、それを一気に爆発させる事により目にも留まらぬ速さで移動する事が出来る。

この技はこのよう不意をつかった攻撃は勿論の事、素早いあやかしに難なく追いつくことも出来、さらには咄嗟にその場から逃げる事も出来る。

だが、どんな優秀な技にも欠点はある。この技の場合、足にそれなりの負荷がかかり、あまり多用しすぎると足がダメになる場合がある。幾ら、靈力を使っているからと言っても足の生の人足の足なのだから仕方がない。

また極めれば、全十六方位に移動する事が出来、一步で数十メートルを一気に移動できるのだが、生憎私にはまだ、十六方位はおろか八方位にも及ばない四方位しか体得していない。

正直言って今の私には勝ち目がない、と言わざるを得ないかもしれない。けれども、そうやすやすとやられる訳にはいかない。

「ハッ!!」

詠唱なんて唱えている暇はない。全身の靈力を右の手のひらに集中させて、一気に放出させる。

手から青白い光が当たり一面にまるで稲妻のように走り出す。

しかし、手のひらに手応えを感じる事はなかった。

「ぐっ!!」

右のわき腹に強い衝撃が走り、私はそのまま横に吹き飛ばされる。

「ごほっ、ごほっ――」

うつ伏せに倒れたまま、何度か咳き込み、痛みに顔をしかめながら顔を上げると、先ほど私がいたちょうど横辺りにあの女の人はい余裕の表情で立っていた。

「ふむ。なかなか、と言いたいところではあるが、所詮はその程度か」

そう言うのと、その女の方はまた嘲笑う。

私は手のひらをぐっと握り締めると、素早く体を起こし肩膝を突くと、手のひらを前にクロスさせ腕を前に目一杯伸ばす。

『我が目の前にいるは 邪悪なるモノ その光の矢をもって彼のもの貫き 正しき罰を与えよ』

詠唱とともにクロスに合わせた両手から光り輝く矢が現れ、彼女のもとへ一直線に伸びていく。

「ふん」

しかし、その矢も片手で易々と払われてしまった。
払われた矢の破片が光り輝く雪のように、その女の人を中心に舞う。

「ほれ、我を退屈させてくれるな、弱き人の子よ」
「くっ」

よろよると蹴られたわき腹を押さえ、私は立ち上がる。
そして、力一杯女の人を睨む。

「まだです」

言うが早いかまた両足に靈力を込め、爆発させる。
すぐに女の人との差は縮まり、お互いにお互いの顔が目と鼻先まで近づく。

そして、再び両手を重ね合わすと詠唱を唱える。

『罪と言う罪は在らじと――』

「遅い」

「ぐっ」

今度は詠唱を唱える暇もなく横へ吹き飛ばされる。
冷たく硬い廊下の床に激しく叩きつけられ、何度か飛び跳ねた後、横に倒れこむ形でようやく止まった。

「う……うう……」

「ヒカリ！」

「ひかりん!!」

今までショックのためか、身動き一つしなかった真琴さんたちが
駆け寄ってくるのがわかる。

「ヒカリサン ダイジョウブデスカ？」

「カチカチカチカチ、カチカチ！」

ジンタ君とガイ子さんも来てくれたみたいだ。

「ヒカリ、しっかりしなさい！」

そう言いながら、私を抱きかかえる真琴さん。

その目には、驚愕と焦りと不安と、そして何より恐怖がありありと映し出されている。

「弱い、弱すぎるぞ。弱き人の子——いや、虫けらよ。そなたの力はその程度か？ 実につまらん」

体を起こし、あの女人を見れば、見るからに呆れたといった感じで、髪を横に払う。

唇を強く噛む。

悔しい……どうして、かすり傷をつけることはおろか、まともに触れる事すらできないんだ……

ふと、女の人から視線を外すと、抱きかかえてくれている真琴さんと視線が合う。

そうだ……今私は一人で戦っているんじゃないんだ。後ろには雪ちゃんにジンタ君にガイ子さん、それに真琴さんだっている。それに――

「くっ」

「ちよっ、ちよっと！」

私が無理やり起き上がろうとすると、上から心配そうな真琴さん

の声が聞こえてきた。

しかし、私はその声を無視して、両手を床に着く。

腕が震えて力が上手く入らない。

それでも、私はそんな自分を叱りつけながら立ち上がる。

だが、体はふらふらとゆれ、上手く立ち上がってもなお、体のあちらこちらに力が入らず、今にも倒れてしまいそうになる。

「真琴さん、有り難うございます。けど、今はまだ危ないですから、少し下がっててください」

「ちよっ、何言っているのよ！ そんな体しているくせにまだやるっていうの！」

「ええ、もちろんです」

そう言うのと、後ろで叫んだ真琴さんに笑顔を見せる。

——それに、私は誓いましたから。真琴さん。あなたを護るって。

「冗談じゃないわ！ そんな体をしているってわかってるのに行かせる訳ないじゃない！」

そう叫ぶ真琴さんに、私は困ったような笑顔を向ける。

「そんな事言われましても、状況が状況ですし……」

それに実際のところは、今こうやって悠長に話している暇なんてないんですよ？

「わかっているわよ！ だからここは一時退却して、体を休めるべきだって言っているのよ！」

さて、困りましたね。言っていることはもったもんですが――

私はちらつとあの女の人を見る。

見ると、彼女は腕を組んだまま、まるで目の前で愉快的サーカスでも見ているような表情で立っていた。

――あの人が相手では、逃げるなんて不可能でしょうね……

私は、はあ、と一人ため息をつくとき、真琴さんの後ろにいる彼女の方を見る。

「ちよつとの間、真琴さんをよろしくお願いしますね」

私がそう言うと、ジンタ君とガイ子さんがかくんと頷き、その皮膚のない筋肉がむき出しの腕と、文字通りの骨の腕で真琴さんの両腕を掴む。

「ひゃっ！　ちよつと、なに！　キャアアアア！」

私は二人に腕を掴まれ、顔面蒼白になって悲鳴を上げている真琴さんを見て、なんとなく申し訳ない気持ちになった。

彼女のためと思って頼んだけど、と一人苦笑を浮かべる。

全部が片付いた後、仕返しに何かされそうで怖いなあ……

その時、袖をくいくいと引っ張られる感触があり、そちらの方を見ると、真っ白な髪に大きな碧の瞳を持つ少女が私を見ていた。

「ひかりん、大丈夫なの？」

その顔からは普段のふざけた感じはなく、緊張を浮かべていた。私はそれをにっこりとした笑みで、ええ、大丈夫ですよ、と言うと、納得したように頷き、未だ悲鳴をあげて後ろに引きずられている真琴さんたちのほうへ駆けていった。

「さて、もう終わったか？」

振り返ると、さっき見た腕を組んだ格好のまま、あの女の方は立っていた。

「ええ、お待たせしました」

私はそう言いつつ、女の人と正面から対峙する。

「なかなか、良い余興だったぞ」

「それはそれは、お褒めの言葉、ありがたく頂戴します」

「ふん、我が言葉は重いぞ、虫けら」

お互いに軽口を叩きあいながら、お互いに動きを静止する。

しばらく、お互いに口を閉ざすと相手の様子を伺う。

だが、それもどうやら私だけのようだ。

なぜなら、彼女は動いたかと思えば、組んでいた腕を下に下ろし、片手を腰に当てただけだったのだ。その顔には余裕の笑みさえ見受けられる。

「ほれ、どうした？ かかってこないのか、虫けらめ」

ニヤリと女の方は笑い、相変わらずその場から動かない。

疑うまでもない。あの女の方は私を見て、楽しんでいるんだ。わかってはいても、見下されれば腹が立ってくる。

しかし、私もさっきとは違う。

さっきは早く倒さなければという、焦りがあり、不要に攻めてしまった。

けど、もう大丈夫。

私は目を瞑り、再び息を深く吸いゆっくりと息を吐き出す。

そして、目を瞑ったまま右腕を横へ肩の高まで水平に持ち上げる。意識を辺りに集中させ、呼びかける。

「ほう。次は何をするつもりか」

どんな表情をしているのかはわからないけど、きっと今の私を見て嘲笑っているのだろう。

私はその声を見無視し、さらに呼びかける。

どうか、そのお力を私に貸してください……

しばしの間の後、私は右手に風を感じた。

答えてくれた……

右腕を中心に風がゆっくりと渦巻いているのがわかる。

私は、私の呼びかけに彼らが答えてくれたのが嬉しくて、少しだけ笑みを口元に浮かべる。

ありがとう……

それに答えてくれたのか、腕にさらに強く巻きつくように風が回る。

私はそれを確認すると、瞑っていた目をゆっくりと開き、目の前

で嘲笑う女の人を見る。

そして、先ほどの問いに答えるべく、口を開く。

「名もなき、風の神様に力を貸していただくんですよ」

それを聞くと、女の方はさも愉快そうな笑い声を上げる。

「なんと、そなたのような虫けら風情がそのような事まで出来るのか。だが、所詮は名もなき低俗な神よ。我の取るに足らん」

今度はそれを聞いて、私が笑う。とは言っても、声には出さず、口元をそっと歪めるだけだけど。

「さあ、それはどうでしょう？ やってみなければわかりませんよ？」

「なめた口を。よかろう。相手をしてやる。さっきみたいにそう簡単に倒れてくれるなよ」

「ええ、それはもちろん」

未だ水平に上げている腕を中心に風が渦巻き、私の服はパタパタと仰がれている。

さあて。これからが本番ですよ！

私は口元を歪めたまま、今度は掛け声もなく、あの女の方のもとへ向かって駆け出した。

第13話 妖しきオナ（後書き）

続くなあああああ！！

はい。いきなり申し訳ありません。ここまで読んで下さり有り難うございます。

いやあ、ちょっぴり困りました。

実はこの回と次回で戦闘を終わらせようと考えていたのですが、どうも後、1話増えてしまいそうです。

はあ、困りました。どれもこれも、全部ヒカリがコテンパンにされたいです↑

しかも、次回神様使うのかよっ！

これは僕自身もまったくの予想外で、真面目にどうしようかと思っております。が、きっと大丈夫でしょう（苦しい笑顔）

とまあ、そんな事はとりあえず宇宙の端までぶっ飛ばしておくとして、前回の後書きで書いた『遅れるかも宣言』について、少しでも書かせていただこうかと思っています。

ちなみに、→の変な宣言は軽くスルーしてください。

いえ、別に大した事ではないのですが……

実は僕、他に短編を幾つか書いていまして（それも全部書きかけ）、そろそろ完成させないとな、と激遅なのに思い、今そちらの方も本格的に書いている途中なんです。

ちなみに書きかけの短編は、だいたい五作くらいあります。まさに、どんだけだよ！、と自分自身にツツコミを入れております。軽く泣きそうです。

はっ！ 気が付けば、こんなに長々と……

申し訳ありません（汗）

いつも自重しているのですが、どうも自分は長々と書きたい性分なようです。

はあ、本当は前回やった真琴の説明みたいに、ヒカリの事も軽くここで書こうと思っていましたのに……

まあ、誰も期待なんかしていないと、開き直りつつ、次回の後書きに書こうかとたくらんでおります↑

やばいです。また長くなってしまいました（汗）

いい加減切り上げないと、永遠に書いてしまいかねませんので、今回はこの辺で失礼します。

それでは、改めましてここまで読んで下さり有り難うございます。どうか、あと2話ほど戦闘にお付き合ってください。

それでは失礼します。

第14話 風を纏い、敵を打ち払え（前書き）

勉強って大切ですね。

一応とは言え小説を書かせて頂いている身。やはり、調べごとは大事です。曖昧だと大変な事になる。

今回の話を書いていて思いました（大した内容ではないですが）よし、ちゃんと調べよう！

でも、まっ、こんな事感じてても、これっぽっちも学校の勉強をする気にはならないんですがね（笑）

第14話 風を纏い、敵を打ち払え

日本はよく“神の国”と呼ばれ、日本民族がつくられてから現代まで、私たち日本人は『八百万の神』という数々の神々を祭ってきました。

日本の神々の内、皆さんの知る最も有名な神を挙げるのならば、まず第一に日本列島をつくった伊弉諾尊いざなぎのみことと三柱の尊みはしら子供たちではないでしょうか。三柱とはつまり、太陽神の天照大神、月の神つきの月読尊よみのみこと、そして、海の神の素戔鳴尊すさのおのみことのことです。また他の神の名前を挙げるならば、素戔鳴尊の妻である奇稻田姫くしいなだひめが一番有名なのではないでしょうか。

もちろん、その他にも沢山の神々が居られます。しかし、日本の神道には他の国にはいない神々がいます。

山には山の神、川には川の神。鹿には鹿の神、そして、風には風の神。それこそ、沢山の神々がこの日本には居られます。そして、私たち日本人はそんな神々を祭ってきました。

私は右腕に風を纏ったまま、勢いよく駆け出した。

目の前にいる女の人は、見下したような笑みを浮かべ、腰に手をやったままその場から動く気配さえしない。

私はそれを見ると軽く口元を歪める。そして、走ったまま今まで横に水平に保っていた右腕を体に巻きつけるようにに持ってくると、

「ハッ！」

という掛け声とともに右腕を勢いよく横に薙ぐ。

すると、シュッ、という鋭い音が聞こえ、まるで刃のような無数の風が、あの女の人の下へと一直線に飛んでいく。

「ふっ、何をするかと思えば」

その無数の刃と化した風に怯むことなく女の方は両手を前に突き出す。

「所詮はただの子供だましょ」

そう言うと、突き出した両手の平から、無数の白く妖しい糸が飛び出す。

その糸は、私の放った風をいとも簡単に捉えると、相殺していく。そして、遂に全ての風の刃が捉えられてしまった。

だが、私は足を止めない。ひたすらにただ前を見て、私が風の神に頼んで生み出した風の刃と相殺してばらばらとなった、きらきらと月の光を受け輝いている糸の間を走り抜ける。

「愚かな、虫けらめ」

女の方はそう呟くと、さらに両手の平から糸を生み出し、私目掛け放つ。

私はそれに負けじと同じように風の刃を生み出していく。

相殺できる糸は相殺させ、それが出来ないものは足に霊力のため、その力を使って左右に上にと縦横無尽に動いて交わす。

細く、切れ切れになった無数の糸が、ひらひらと空気に漂っている。

「ハッ！」

女の方から放たれた、私を捕まえようとせんばかりの無数の糸の束を交わすべく、私は空に舞い上がる。

「あまい」

どうやら先ほどの糸の束は罔だったようだ。

そう言った女の人は両手を近づけると今までの糸とは比べ物にならないくらいの糸の束を放ってきた。

足りない！

私はそう素早く判断すると、手の平を前に腕を突き出すと、風の神様の風を両腕に纏うと、高らかに唱える。

『罪と言う罪は在らじ祓え給い清め給う』

その直後、無数の糸の束とぶつかる。

だが、その全てを払い散らして地面に舞い降りる。

「ほお。なかなかやるではないか、虫けら。見直したぞ」

顔を上げ前を見る。

女の人との距離はまだ少しある。

「それはどうも有り難うございます」

私は女の人から目を離すことなく言い返す。

それを聞くと女の人は何とも言えぬ、不気味な笑みを浮かべる。

「だが、もう少ししっかりとしてくれれば、なお楽しめたというもの。実に惜しいな」

私はその妙に含んだ言い方に思わず眉を細める。

「それは一体、どう言う意味ですか？」

「言ったとおりの意味よ」

不機嫌そうな私を見て、女の方はさらに笑みを深める。

これは何かあります。けれど、私が先手を打てば良いだけのこと。
何があるのかは知りませんが、攻撃の隙を与えなければ、所詮は宝の持ち腐れ。そんなへまはもうしません。

「無駄話はここまでですよ」

私が睨みを聞かせながら言うと、女の方は何も答えず、私を見てただただ笑っていた。

私はそれを見ると、足に靈力を再び溜める。

「行きます」

それを合図に一気に足に溜めた靈力を爆発させる。
たちまち私は物凄い速さで女の方の下へと向かう。

女の方はそんな私を見てもその場から動かず余裕の笑みを浮かべている。

「またそれか。芸のない奴よ」

そんな事を言いながら、女の方はやはり動かない。

かかりましたね。その余裕が命取りですよ。

私は堪えきれずに口元を歪める。

今の私には風の神様が付いているんですよ。

右足が渡り廊下に着く。

その瞬間、私は足を中心に全身に風を纏う。

そして、その風を使いさらに速度を上げ女の人に近づく。

「なに！」

女の人が焦ったような声を出す。

もう遅いですよ。

女の人との距離はもう目と鼻先。

「おのれ！」

女の方は右手の爪を突然伸ばし、若干後ろに体を仰け反らしつつ、私の顔目掛け右手を伸ばす。

私はそれを確認すると、少し強引に体を左へ屈める。

シュ！

女の人の鋭い爪が私の右頬を赤い小川を作りながら掠める。

そして、私は左に屈んだ状態で風の神様の力を借り、素早く体を右回りに回転させる。

「はあああああ——」

回転したまま、右腕に再び風を纏い、初め駆け出したときのように右腕が体に巻きつくように構える。

「――ハッ!!」

その掛け声とともに、風を伴った右腕を女の人の脇腹へ向け、思いつきり薙ぐ。

「ガッ!」

右腕が女の人の脇腹に見事当たり、横へ吹き飛ばす。

しかし、私はただ吹き飛ばすだけでなく、更なる攻撃を加えるべく、風の神様の力も借りて女の人を追う形で飛ぶ。

「虫けら風情があまり調子にのるでない」

そう言うと、女の人是我が殴りつけた右の脇腹を押さえつつ、左足で強引に吹き飛んでいた体を止める。

そして、さらに攻撃を与えるべく来た私を見ると、再び笑みを浮かべ、今度はその鋭い爪を私の胴体目掛け薙ぐ。

ザシュ!!

私の服は裂かれ、五本の線が入る。

女の人の爪はどうやら私の体自体にも届いたようで、服の間から赤い鮮血が飛び跳ね、鋭い痛みが私の体を貫く。

「くっ」

その痛みに思わず顔を歪めるも、直ぐに顔を引き締める。

そして、予定通り風の神の様の力を借りつつ、右足を床に着け、体の動きを止める。

私を中心に外に溢れ出した霊力が、まるで霧のような白い煙となって辺りに噴出す。

「なっ！」

女の人の顔が笑みから驚愕の表情へと変わる。

「ヒカリ！！」

遠くの方から真琴さんの声が聞こえる。

私は両手の平を前の女の人の腹部にクロスさせて当てると、いつぞや始めて真琴さんと会ったときに使った術を唱える。

『高天原の主神、天照大神よ たかまがはら 我に今此の時、その大いなる力を貸し与えたまえ 我が目の前にいる敵から我を護る盾となり、敵を討つ刃となれ』

その術に答えるかのように、私から溢れ白い霧となった霊力が私を中心に勢いよく渦巻き、一瞬まばゆい光が女の人の腹部に当たっている両手の手の平から放たれる。

ドゴオオオオオオン！！

その光を最後に女の人は暗い渡り廊下の向こうへと吹き飛んでいった。

沈黙。

相変わらず、渡り廊下の窓には雲ひとつなく光り輝く満月が映し出され、その光が辺りをうすぼんやりと照らしている。全てのものは息を潜め、沈黙が辺りを支配している。

ふと辺りを見回せば、辺りには私たちによって細々にされた無数の輝く糸たち。

その糸たちは窓から漏れた月光に照らされ、美しく、幻想的にきらりと光り、それでいてどこか妖しげな光りを放っていた。

第14話 風を纏い、敵を打ち払え（後書き）

いつもいつも読んで下さり有り難うございます！！

さて、今回は前回のようにならないため一気にヒカリの説明に入ります。

【神寺光（かみでらひかり）】

年齢…15歳

性別…（生物学上は）男性

身長…163センチ

容姿…かなりの女顔で童顔。一目どころか、ずっと一緒にいても本人が自分の性別を言わなければ、誰も男だとは気がつかないほどの、どこからどう見ても美少女にしか見えない顔をしている。

その他…実家はその“道”ではかなり有名なところで、その家の次期跡取り。幼少の頃から他の一族の力を遥かに凌ぐ力を持ち、その力は歴代でも最高ランク。

他の一族同様、“呪い”を受けこの世に生を受けたはずだが、その影響をあまり受けずに生まれたもよう。その呪いの名は【女爾生呪】自分の生い立ちのせいで、友を持った事がなく、家でも他の一族の大半に“忌み子”と呼ばれ、常に孤独だった。そのため、ヒカリにとって真琴とは始めて出来た友であり、何が何でも護り抜きたい存在である。

また、表にはけっして出さないが、“自分自身”にかなりのコンプレックスを持っている。

とりあえず、以上！！

やばい。書き出したら止まらない。まだまだ書きたい事はたくさんありますがこの辺にしておきます。

性格は真琴のときと同様、とりあえずあんな感じということで（汗）

ああ、そう言えば。ヒカリという名前の表記の仕方についてはどう思われますか？

最初は【光】一文字にしていたんですけど、（自分が）読みにくいかな、と思いこのように【ヒカリ】とカタカナ表記にしました。

もしも、カタカナ表記の方が読みにくいと言われる方がおられましたのならば、最初の【光】に直そうと考えているんですがどうでしょうか？

もし、どなたからも何もないければ、このまま【ヒカリ】にしようと思っています。

あっ、あともう一点。

実はこの話を書き始めていたときから、ずっと気になっていたことがあります。

それはヒカリの呪いの名前です。

名前の中の【爾】という漢字、意味を間違えてないでしょうか？

一応、電子辞書で調べて“だけ”という限定の意味があったようなので採用したんですが、もしもこれが『間違っている』もしくは『もっと相応しい漢字がある』といった場合があれば教えてくださると、大変ありがたいです。出来ればよろしく願います。

また長くなってしまった……

まっ、いっか↑

それでは今回はこの辺で失礼します。

それにしても、もっと人物説明をしたいなあ……

第15話 糸は漂う、ひらひらと（前書き）

え、ええつと……

おつ、お久しぶりでs（殴

いや、なんと言っているのやら……

あれです。とりあえずごめんなさいっ!!

春休み中にたくさん更新するといいながらせず、挙句およそ一ヶ月の間更新すらせず、本当に申し訳ないです（ふかぶか

ど、どうか、こんな更新速度が激遅な、亀野郎を見捨てないで下さいっ（必死な形相でっ！

あ、あと、色々と書き方が変わっています。

おそらく、完結した際には全話を今回のような形に書き直すかもしれません。

それでは、拙い文ですがよろしく願います！

第15話 糸は漂う、ひらひらと

未だ女の人が生み出し、私の手によって壊された無数の糸がそこ彼処に漂っている。

それらは渡り廊下の窓から零れる月光の光を受け、きらきらと光り、実に神秘的で幻想的な空間を生み出している。

他に動くものは何一つない。

戦いの後、命の削りあいの後の静かな、それでいてどこか哀しい余韻が残る。

それは言うなれば、ある種の喪失感。命を奪う、という焦燥感。互いにけっして交わる事ができない空しさ。――なのかもしれない。

それはそうと、難しく言うって、なんだかおかしいですね。

つまり私が言いたいことは、きっとそう。

――無くした、ということ。

これが一番合っているかな？ 正直あまりよくわかりませんね。なにはともあれ、また一つ終わった事は確かだった。

それが、今後、どのような結果を招くかは別にして。

「ハア、ハア、ハア——」

これで……終わりです……

息が荒い。どうやら今まで無意識の内に息を止めていたみたい。

肺が酸素を求め、体からは無数の汗が噴出し、無理をした両足がひどく痛み出す。

私は両足の膝に手を着くと、息を整え始める。

「うう……」

胸が痛い。

見れば、そこには裂かれた服に赤い染み。けれど、それほど大したことはない。あの女の人の力を考えればよくこれだけで済んだなあとさえ思ってしまう。

「けど……」

なにか腑に落ちない。明らかにおかしい。

あの女の人の力は確かに本物だったと思ってまず間違いないでしょう。今回のこの事件の犯人にも間違いはないと思います。そんな彼女に、私は確かに攻撃を加え、倒した。それも間違いはないと思う。

けれど——

「——弱すぎる」

そう。確かに彼女は弱すぎました。倒しておいてなんですが、正直拍子抜けです。

そりゃ、あの攻撃をもろに加えられれば、それも当然かもしれないません。現にさっきまでの気配は消え、今は他の不穏な気配を感じる

事はないのですから。

むしろ気は穏やかだともいえます。

それでも、この腑に落ちない感じは何故か拭いきれません。

第一理解できないことが多すぎます。

あの余裕の笑み。悠然とした態度。あの言葉。そして、どんなに押し隠していても溢れ出していた、あの内に秘めた何か。

わからない。なんだったんでしょう、一体。

はつきり言って今の私の力では、勝つか負けるか、どちらに転んでもおかしくない、むしろ負ける確率の方が高かったものでした。

そしてなにより――

「――なにより、初めて感じたときのあの感触。それがなかったなんて……」

それが一番理解できない。

あの時初めて感じた、あの冷たく絶望の淵に叩き落されたかのような身も凍る感触。

それが、あまりにも――いえ、まったくあの女の人からは感じられませんでした。

それこそ似たような感触は感じたものの、あの感触にはほど遠かったような気がします。

「おかしい。一体、どうなっているんでしょうか？」

考えれば考えるほどわからなくなってきました。

あの、女の人是一体……

「ヒカリ！」

「ひかりん！」

「ヒカリサン！」

「カッチカチ！」

私を呼ぶ声に一旦、思考を止める。

声がした方を見ると、嬉しそうに私のもとへ駆け寄ってくる人たちの姿が目に入ってきた。

みんなそれぞれに満面の笑みを浮かべている。

それぞれに、というのはもちろんそれなりの意味がありまして、真琴さんと雪ちゃんは文字通りの満面の笑みなのですが、残りの二人は明らかに恐怖をそられる顔だったんです。

なんせ、あの二人は人体模型とガイコツの模型ですからねえ。ジン太君のあの、顔の半分がズル剥けの状態で目をぐるんぐるんと回されているのを見ると、恐怖しか生まれてこないですから。いえ、あれはもはや恐怖じゃなく気持ち悪い以外の何物でもないですよ。ガイ子さんなんて、もはや笑っているのかすら危ういし……いや、一応は笑っているみたいです。アゴ打ち鳴らしているし。

うえ……なんだか気持ち悪くなってきました。

私は込み上げて来る吐き気を何とか押さえ、何とも言えない苦笑を浮かべると、右手を上げ真琴さんたちの笑顔に答える。

——その時。

私は自身の目を疑った。

現れたのは、さっきまで見ていた、あの白い糸。

その糸が真琴さんたちがいた側の渡り廊下の奥から、シュルシュル、という音とともに伸び、無常にも真琴さんたちを縛り上げた。

「キヤアアア、なんなのよこれ!!」

「うえーん、ネバネバしてるよお」

「カッ カンセツガ ヘンナ ホウコウニ マガッ テマス!!」
「カチ？」

その糸に絡め取られ、真琴さんたちは一斉に渡り廊下に倒れこむ。真琴さんと雪ちゃんは、そのネバネバとした糸から逃れようと、むやみやたら手足を動かし、ジン太君は関節を変な方向で縛られて身動きが出来ない状態。ガイ子さんに限っては、糸に縛られる事なく、その勢いによって体をバラバラにされて、何が起きているのかわかっていないよ様子。

その糸を見て、私は考えを改める。

あの糸が、先ほどまで戦っていた女の人と同じもの? ……………

違う。あんなものとは、まるで比べものにならない。

その力。その妖気。———そして、その美しさ。

格が違い過ぎます。……一体、なんなんですか……

私は急いで、糸が伸びてきた暗闇を見る。

「だから言ったであろう、『あまい』、と」

その言葉とともに渡り廊下の奥、暗闇の中からあの先ほど倒したはずの女の人が悠々と歩いてきた。

ゾクッ

刹那に蘇るあの感触。冷たく冷酷で、そして尚且つ残酷。あるのは死という簡単に重い一文字。

ナイフが心臓へと突き立てられているみたい。

「どお……して」

声が震えて上手くしゃべれない。声だけじゃない。身体も、そして心も震えている。この震えは寒さから来るもの。けれど、もちろんただの寒さからではない。普段の生活、生き方をしていれば決して感じる事ない寒さ。

「どおして、とな？」

不敵に嘲笑うと、女の人は一言、私に向ける。

「簡単な事。そちが倒した者は真の我ではない。ただそれだけの事。どこも難しいところなどない」

そう言うのと、女の方は口の端を吊り上げわたしを見る。

「あれは我が我^{われ}が糸で紡ぎ、生み出した単なる糸の人形よ。……どうであつた？ あれはよく出来た人形であつたろ？」

「……にん、ぎょう？」

その通り、と女の方はせせら笑う。

——その一言は、あまりにも唐突で、私を墮すには十分すぎる威力を持っていた。

「そう。あれは我^{かたど}を模った大した力も持たぬ糸人形。そちはただ、我が人形を滅したにすぎぬのだ」

そう言った女の方はそうも変わらぬ顔で私を見る。

わたしは重い鈍器で殴られたみたいに視界が真っ暗になった。

信じられない。信じたくない。……けど、これでようやく合

点がいった。

なぜ、倒したのに納得がいかなかったのか。なぜ、さっきまでの女の人があんなに弱かったのか。

——なぜ、さっきまでとは比べものにならない妖気を持つ、瓜二つの顔をした女の人が姿を現したのか。

それが解った途端、身体が動けなくなってしまった。

女の人が再び歩き出す。氷のような冷笑とともに。

それでも私は動けなかった。

未だかつて、感じたことのない殺気が電となって私を襲い、私を動けなくしてしまった。

がちがちがち

当てられる寒気に歯の根が合わない。

手足は震え、目の前が暗くなる。

けれど、そんな私を見ても顔の形を変えずに女の人は一瞬と迫ってくる。

このままじゃ危ない。

そう思って体に力を込めようとするものの、身体はちっともいう事を聞いては聞いてはくれない。

「くっ」

動けよ身体。お願いだ、動いてくれ！ このままじゃ……このままじゃ、みんなあの女の人に殺されてしまう。

けれど、無常にも体は一向に動いてくれる気配を示そうとはしてくれない。ただただ、体の震えが増すばかり。

動け動け動け動け動け動け動け——動けえ!!

しかし、私がどんなに動こうと思っても、体が私の意志に反し、ピクリとも動けない。

それはまるで一本の幹。足は地面に根を張り、けっして動く事を許さない。

「くっ…そ…!!」

冷たい冷や汗が顔と言わず、全身から溢れ出し、袴を濡らす。

胸の痛みなど感じない。感覚が麻痺してしまった。味覚も触覚も聴覚も嗅覚も、まるで機能をしていない。

唯一、かろうじて機能をしている視覚は、あの女の人しか見えていない。否。見れない。視線を外そうものならば、それはすなわち死を意味する。

蛇に見込まれた蛙、とはまさにこの事かもしれない。そんなどうでもいい事だけが、脳裏をかすめる。

「まったく。こうして我が姿を見せるまで、我に気付かないとは…
…。神寺が聞いて呆れる」

女の方は歩くのを止めると、目を細め落胆したような口調で私を見やる。

その細めた目で、わたしを品定めするように、そして何かを試すように見ている。

それに何故、わたしの名字を？　まるで、わたしを知っているみたい…

「不思議そうな顔をしておるな。何故我がそちの名を知っておったのか、であろう」

私の考えを正確に読み取ったように、女の人と話し出す。口調は変わらぬものの、その目は鋭さを増した。

「忘れるはずがない。なにせ、その神寺という名は、我をこの場に封じ込めた、あの忌々しいあやつの名であるからな」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

なんですか、それは。この女の人を封印した人？ 一体、何を言っているんですか？

些かめまいを感じて、頭がくらくらしてきた。

もし、この女の人と言った事が本当ならば、それは何百年も昔の話になります。それに、その人にこの女の人封印されていた？ そんな話、今まで聞いたことがありません。

ただ、一つだけ理解できた事は、そう言った途端女の人雰囲気は急変した、ということだけ。

女の方は尚も言葉を続ける。まるで、そうする事によって、名前も知らないその人に対する憎悪を思い出すかのように。

「忘れてなるものか。あやつも。そして、その力も」

女の方の口の端が吊り上る。

「その神をも使役する力は、あやつが使う力。そして、その力は古来より神寺使う力」

女の方は右腕を払うと、その手の先の爪が伸び、鋭く尖って突き

出す。

「嗚呼、思い出すだけでも憎たらしい。あやつあの澄ましたような顔。我を見下し、その上我の力とともに我をあの下賤な者どもと一緒に封印しよった」

そう言いながら、あの女の人は再びこちらに向かって歩き出す。口元を薄っすらと歪め、更に細めたナイフのような目で私を見る。そう。その目はまさに、かつて己を封印した者が自分に向けていたように、私を見下していた。

私と女の人との距離は残り僅か。

動こうにも、未だ身体は私の言う事を聞いてはくれず、その場から一歩たりとも動こうとはしてくれない。

また、さっきよりも増して頭痛が激しくなり、今にも意識を手放しそうになる。

冷や汗が頬を伝い、地面へと落ちる。

「ほう。我が妖気をこれほど長く当てられ未だ正気を保っていられるとは。さすがはあやつの子孫、と言ったところか。

じゃが、どうやらそれが精一杯で身体が思うように動かないとみえる。しかし、安心せよ。それは虫けら同然のそちらには仕方がないこと。それこそが、弱き人が取る正しき行動よ」

女の人が私の目の前で、その歩みを止める。

「しかし、なんとも残念であるな。久々に我の相手をするに値する奴かと思っておったのに」

それほどがっかりとしたような表情を浮かべずに女の人には私に言う。それどころか、口元を薄っすらと歪めたその表情は、まさに見

も凍るような冷笑と言うに相応しかった。

「私を……どうするおつもりですか……？」

「ふっ、知れたこと」

搾り出したその震えた声を聞くなり、女の方は笑い、その鋭く突き出た右手の爪で、私の大腿部へと突き刺す。

「くっ！」

刺さった箇所からは血が溢れ出す。

私はその痛みに思わず顔を歪める。

「残念な事にあやつはもはやこの世にはおらん。だが、そちはあやつの子孫であろう。なにせ、そちの気はあやつによくにておるからの」

そう言いながら、女の方は更に右手に力を込め、その爪を私の大腿部の奥へと突き立てていく。

思わず口からは苦痛に呻くが漏れ、爪が深く沈むに伴い、更に血が溢れ、下へと流れていく。

私はその増した激痛とも言える、その痛みに耐えるように顔を更に歪める。

「あやつの変わりに八つ裂きにしてくれる。それで少しは気が晴れるであろう」

心底樂しそうに私の耳の側で囁く。

なすがままにされている自分に腹が立ち、私は強く唇を噛む。

なんて情けない。こんな簡単なことに全く気がついていなかった

のだから。

私の中で、絶望という言葉が渦巻く。

——その時。

「————やめて」

突然の聞きなれた、けれど震えたか細い声が聞こえてきた。

振り向けば、女の人の糸によって縛られた、美少年のような顔立ちをした彼女が目映る。

その彼女は、彼女にしては珍しく白く泣き出しそうな顔をしていた。

第15話 糸は漂う、ひらひらと（後書き）

はい。という訳で、15話でした。ここまで読んで下さり有り難うございます（ペコリ

そして、改めておよそ一ヶ月間もの間更新しなくて申し訳ありませんでした（土下座

なんか、毎回毎回このパターンをし続けている気がしないではないですが、今はあえてスルーします（殺

誰も知りたくはない（てか聞いていない）と思いますが、あえて僕がこの一ヶ月間なにをしていたかを暴露しますと。
ズバリ！！

死んでました（どおーん

いや、ホントに（乾いた笑み
別に病気とかそんなのではなく、新学期でからなりドタバタしてました。

それこそ執筆することはおろか、他の先生方の作品を読む事も、あまつさえこの「小説家になろう」のサイトを開く事もできなかったですからねっ！（ダメ人間

あっ、でも聞いてくださいっ！！

実はこの話の他にあと2話書き終わってます（爆

だったら、なんで更新しねえんだよ、て話ですが実は

昨日、完成しました（再び、どおーん

ええ、昨日、健康診断で学校が午前中に終わったので、深夜一時過ぎまでひたすら執筆していました。

まさに快挙。こんなに集中して書いたのは初めてです。

お陰でかなりの量を書くことに成功し、お決まりの文章力の無さで1話にまとめ上げる事に失敗し、見事3話ほぼ同時完成となったのです（わーい

他の2話は、3日後ずつ順に更新します。

ちなみに、現時点で戦闘は終わっていません（どおおん

ほんと、どんだけだよっ！ 信じられねーよっ！

まっ、まあ、とりあえずは3日後という事で、ひとまず失礼します。

では、また3日後の27日にお会いしましょう。

追伸。

✓ケンタ様

長い間お待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

今回の後書きでよい、とのことでしたが、あえて評価の方の返信コメントに返事を書きました。ご確認下さい。

今回の提案。実に天にも昇る思いでした。嬉しくてニタニタしてました（危ない奴

向こうにも書いたのですが、できればケンタ様の作品を読ませてください。

このなろう上で活躍されているなら、作品名を。他のサイトで書かれているのならば、そのサイトを。とっても興味があります。

それでは、今後ともよろしくお願いします。

第16話 想い、約束、そして確かな……

「——やめて」

突然、か細い、震えた、注意して聞かなければ聞き逃してしまうような声が聞こえた。

私はは苦痛に顔を歪めながらも、目の前にいる女の人から視線を反らすと、女の人^{がんじがら}の背後で、彼女の糸で雁字搦めにされ地面に伏している彼女を見る。

その一連の動作は自然そのもの。今まで絶対に外すことが出来なかった女の人から、私は当然と視線を外して彼女を見る。

一瞬。不思議と彼女の、その弱々しい声で私は、女の人^{がんじがら}の呪縛から解放された気がした。

——そう。なにがなんでも護ると決めた彼女の綺麗な声で。

「その手を退けて、ヒカリから離れなさい！」

さつきよりは幾分かましな、しかしそれでも震えた声で、彼女は気丈に叫ぶ。

——叫んだ彼女は今にも泣きそうな顔をしていた。

私は大きく目を見開く。

私としたことが、一番大切なことを忘れていた。

そうだ。ここで恐怖している暇なんて一秒たりとも存在していないのだ。

——彼女を、真琴さんを護るんだ

その想いが、再び私の胸の中で赤い炎となって燃え上がる。

たとえば、今、この場で死んでしまおうとも私は彼女たちを護らなければならぬんだ。

もちろん、そこには一般人を危険な目に合わせてはならないとか、

これが私たち一族の宿命だとか、そんな事もあるにはあるのだけど、本当はそんな事どうだっていい。

ただ護りたい。たとえこの身がどうなろうとも。

それともう一つ。

約束。

それは忘れもしないあの日々に、母上としたたった一つの約束。

その約束で私はどれだけ、辛い日々から助けられていたのだろう。

あんな、ありもしない夢物語を語る言葉に。

それでも、なぜかな？

あの時の私はそれが本当だと、根拠もなしに思えたんだ。

そして、見つかったよ、母上。

きつと、今この時があの中の約束を果たすとき。

自分のために。なにより私を救ってくださった母上のために。

そして、彼女のために。

だから、ここで恐怖なんか押しつぶされるわけにはいかない――

「――ほう」

先ほどまで静かに真琴さんの方へ顔を向けていた女の人は、そう言うと一緒に突き刺していた爪を引き抜く。

「――ッ！」

あまりの激痛に私は思わず膝を折る。

額からは滝のように気持ち悪い汗が吹き出し、今までせき止めていた支えが消え去ったことにより傷口からとめどなく鮮血が溢れ出す。

だが、そんなわたしには目もくれず、女の人はずっと焦らすように真琴さんのもとへと歩を進めている。

「人間のくせに、よもやそのようなことを言えたものよ」

そう言いながら女の人は、あっという間に真琴さんとの距離を縮め、真琴さんを見下ろすように立ち止まる。

その顔に冷笑が浮かぶ。

それを地面に横向に倒れている真琴さんが見て、顔色がさっと青ざめる。

「やめ——」

「なかなか威勢が良いではないか、人間の娘よ」

私の制止の声も所詮は無駄で、女の方は左を真琴さんの上にかざす。

すると、糸で操られた人形のように真琴さんの身体が宙に浮かぶ。そしてそのまま、真琴さんは吸い寄せられるように女の人の左手へと身体が宙を舞う。

「ッ！ ……そ、その手を、離しなさい」

宙に舞っていた真琴さんは、首を女の人に掴まれることによってようやくその動きを止めた。

首を驚掴みにされ、空気が肺に入ること遮断されたにもかかわらず、真琴さんは怯むことなく抵抗を続けている。

手足は妖気で作られた糸に縛られているためろくに抵抗をすることができない。

「ほう。まだ、我に楯突く気力があるのか。気に入ったぞ、人間の

娘」

ニヤリと不気味な笑みを女の人は浮かべ、更に絞める力を強くする。

真琴さんは声にならない悲鳴をあげ、遂に抵抗を止める。それでもなお、閉じた目を見開き女の人を睨みつける。

「こ、の、私が……これ、ごときで……負けるもん、です、か」

そう言った真琴さんは強く、女の人を睨みつける。

「ヒカリに、あんな、ケガさせて……絶対に……許さないん、だから」

それを聞くと、女の方はさも面白そうに声を上げて笑った。

「いいぞ。ますます気に入った。己が殺されそうというのに他者の心配をするとは」

再び、ニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「友達が……ケガ、したんだから、ぐっ！ しっ、心配するのは……友達と、して……当然でしょ！」

だから、と真琴さんは続ける。

「その友達に、怪我を負わ、せた、貴女を……私は、ぜっ、たいに、許さない」

そう言った真琴さんは苦しげに顔を歪め、けれどその目だけは女

の人から離さない。

ふっ、と女の人は小さく笑うと、その手に更に力を込めた。
それと同時に真琴さんは悲鳴をもちやあげる力も残っていないのか、ただ消え入りそうな声にならない声を上げ、必死で空気を求めている。

「良い心がけだ。美しく気高い、綺麗なもので————なんと愚かな」

「た、確かに……その通りよ……私は、愚かだわ」

そう言い返すと、苦しげながら真琴さんは口の端を吊り上げる。
そんな真琴さんを女の人はずただ嗤い、その華奢な首を折らんとする。

真琴さんが、苦しそうに身を振った。

「その手を今すぐ離せ」

これ以上見て入れない。

私は左足の痛みなど構わず、立ち上がる。

頭に来た。

なににも増して許せない。

私は知らず知らずの内に女の人を睨む。

久しぶりだ。いや、こんなに誰かが憎いと思ったのは初めてだ。

「これ以上、真琴さんを傷つけるのは許さない。その手を離せ——

——殺しますよ」

「ヒカ……リ」

自分でもこんな低い声が出るのかと少々驚いた。
真琴さんが私を心配そうな目で見ている。

残念だが、今はそれに答えられそうになかった。
今、この瞬間は笑顔なんて思い出せない。

微かに理性で自分を押しとどめているだけ。

最後の一言だって、残った理性でなんとか普段の口調に戻したただけだ。

それでも、最後の一言。これは確かな本心だ。

苦しいな真琴さんの顔を見ただけで、手足が驚くほど震えた。
信じられないが、今はあの女の人しか考えられない。

怒り。憎しみ。悲しみ。そして、暗い、初めて体験するこの感じ。
それらが無数の色となり、混ざり合う。

この女の人を見ているだけで、次から次へと力が湧いてくる。

「ふははは。何を言うかと思えば。我を殺すだと。そちら二人は実に我を愉しませてくれる」

私と対照的に女の人は実に楽しそうだった。

ただ私を見て、真琴さんを見て、嗤う。

そんな女の人を見て、私の中の色がより一層濃くなった気がした。

……一步。私は踏み出す。

それを確認すると女の人は嗤うのをやめ、私の足を傷つけた右腕を真琴さんの顔にかざし、その鋭く尖った爪を真琴さんの目の位置にぴったりを当てる。

それは動けば彼女の目を貫くと言う合図。

女の人は嗤うことをやめはしたが、その顔は狂喜に緩んでいるようだ。

——ぴたりと、私は歩を止める。

「どうした？　我を殺すのではなかったのか、神寺の子孫よ。それとも何か？　この娘が我の元にいるから下手に手が出せないなどと申すのではあるまいな？」

愉しそうに嗤う女の人に私は無言を返す。

それは認めてしまうのが、実に腹立たしいから。

だから、私は無言で女の人を睨む。

女の人は嗤う。またそれを無言で睨む。

それがしばらく続くと思われたが、不意に真琴さんの口元が動く。しかし、それは声になることなく、真琴さんは口を動かしたらそのまま力なく瞳を閉じてしまった。

私は彼女の声なき声を聞き、愕然とした。

——ヒカリ。

真琴さんはそう言っていた気がした。

それにどんな意味があるのかなんて、正直なところ理解できなかつたけど、そう呟いた彼女はどこか哀しげだった。

ただ、一つだけ理解できたことがある。

それは、もうもたもたしている時間はないということ。

「そうだ。一つ確かめたいことができた」

無言の闘争に飽きたのか、女の方は口元を緩ませながら不意にそう切り出した。

「どうやらそちたちは、互いに互いを大事だと、自分がどうなろうと構わないから相手を助けたい、と思っておるように見える」

女の人は狂喜で今にも飛び上がりそうだ。

見ているとそれは、子供が親を驚かそうとして、それが驚いてく
れると信じて、楽しくて仕方がない時のようだ。

「ならもし、どちらかが壊れてしまえば、もう片方はどうなっ
てしまっただろうな？」

ニヤリとまた嗤う。

私は身体から血の気が引いていくのがありありと解った。

真琴さんはもはや、ぐったりと力なく瞼を閉じている。

だが、まだ辛うじて息はようだ。

目はその瞼を開こうと、微かにひくついているのが解る。

――すう、と女の人は右手を後ろに引く。

狙うは真琴さんの左目。そしてそのまま、脳へ。

女の人は目を細めた。

「さらばだ。気丈なる人間の娘よ」

言うが早いか、女の人は真琴さん目掛け、その手を突き刺す。

「やめろおおおおお！！」

殆ど無意識だった。

私は、持てる力すべてをこの両足に集め、地面に向かい放出する。
コンクリートでできた渡り廊下が僅かに沈む。

女の人へと向かう刹那。

私は、未だかつてないほどの速度で神を呼び出し、左腕に纏う。
そうしてそのまま二人の間にすばやく割り込む。

――ベキッ

普段聞きなれない音とともに、左腕に何かを押しつぶしたような感触が伝わってきた。

声もなく、女の人は真琴さんを手放し、廊下の奥、深い闇の中へと吹き飛ぶ。

私は無造作に投げ捨てられた真琴さんを、できる限り優しく抱きかかえると、そっと地面にしゃがみこむ。

女の人が何所まで吹き飛んだのかなんて、今の私にはまったく興味がない。不意に襲ってこようが知ったことではない。

それよりも真琴さんの安否の方が大事だ。

急ぎ真琴さんの顔を見る。

顔面蒼白だった。唇も蒼い。瞼もひくついていない。身体はひどくぐったりとしていて、一向に動く気配を見せない。

そして、辛うじてあった息も今はどうも……なかった……

第16話 想い、約束、そして確かな……（後書き）

ここまで読んで下さり有り難うございます。

はい。というわけで16話でした。

何故だろう。当初の予定だともう最終話付近なのに……

まあ、そんな事はどうでもいいとして、次回は今回のラストの通りシリアスです。そして、出来てはいるのですが、3日後更新できるかどうか怪しくなってきました。

その理由は文に納得がいかない、と言うより思うように書いていないことに気がついたからです。

なんか、なんと読み返しても何かが違うんです、僕の中で。次話は非常に重要かつ大事なのに。

これじゃ、更新できないかも、です。

あと、いい加減コメディーらしい事を書きたいです。

よくよく考えたらこの話、ジャンルがコメディーなのに半分以上がファンタジーのようになってる気がします。

これは真面目に対応を考えるべきだな、自分。

それでは、色々と話しが逸れてしまいましたがこの辺で失礼します。
また次回も是非、目を通してください。

第17話 また一つの分岐点

——間に合わなかった。

嘘だ。そんなの認めない。認めて堪るもんか。

「真琴さん、真琴さん、しっかりして下さい！ 真琴さん！！」

揺する訳にはいけないから、ただひたすらに真琴さんの名前を呼び続ける。

「真琴さん、お願いです！ どうか返事をして下さい！！」

真琴さんはぐったりとして動かない。

嘘だ。そんな筈ない。絶対に認めたりしない。

「いやだ！ 真琴さん、お願いですからその目を開けてください！！」

いやだ。そんなのいやだよ、真琴さん。死ぬなんてそんなの絶対に嫌だ！

「お願いですから……その目を開けてください」

自然と声が掠れてきた。もう、とてもじゃないけど、普通にしゃべれない。

「まこと……さん……」

約束、守れなかった。

初めて、本当の私を見てくれた人を護れなかった。

初めての、誰にも負けない大切な人を——私は護りきれなかった。

「まことさん……ごめんなさい」

もうまともに彼女の顔を見れなくて、私は真琴さんの身体にもたれる。

真琴さんの身体はまだ、確かな温もりを持っていた。けれど、それもやがては冷たくなってしまう。

それが妙に悲しく、私は知らず涙を流していた。

頭の中は後悔の念で覆い尽くされている。

なぜ、私は無理にでも彼女を家に帰らせなかったのかと。

そうしていれば、たとえ二度と口を利いてくれなかったとしても、彼女は生きていられたのに、と。

——私は、一番大切な人を失くしてしまったんだ。

「そんなの……いやだ」

私は素早く身体を起こす。

真琴さんの身体はまだ温かった。

大丈夫。まだ、間に合う。

根拠なんて、そんなの存在していないけど、今の私はその微かな希望に縋るしかなかった。

——そうでもしないと、私が壊れてしまいそうだったから。

私はできるだけ優しく、冷たい真琴さんを寝かす。

「今は冷たいですが、少しの辛抱ですよ」

そう言うと、私は両の手を真琴さんの中心へと持って行き、目を閉じる。

すう、と深く息を吸い込む。

そうして、そのまま術を唱えていく。

できうる限り、この想いを乗せて……

『我らが神々よ　その大いなる力を我に与え　彼ものを清めたまえ
——』

生憎、私は死者を甦らすなどと大それた事はできない。

それはいわば、『禁術』だ。

人がけっして犯してはならない、神にたいする反逆。生への冒瀆。もちろん、私がその術を知っていれば使った。その代償に死のうが地獄へ堕ちようか構わない覚悟だ。

だが、それはできない。するしないより先に、私はその術を知らないのだ。

ならば、と私は考えたのだ。

この命を真琴さんに注ぎ込み、息を吹きかえらせよう、と。

幸か不幸か、真琴さんの息が止まってから時間はあまり過ぎていない。

だから、まだ、間に合う。

十分に真琴さん呼び止めることができるはずなんだ。

そのためなら、この命、真琴さんに譲っても構わない。その覚悟

ならとうにできている。

『――我が命は 彼の者の物なり――』

詠唱なんて関係ない。

かなりやたらな詠唱だけど、たぶん問題ない。

『――彼の者の魂 我が呼びかけが聞こえたら答えよ――』

身体中のありとあらゆる力が、この両の手に集まり、真琴さんの中に注がれる。

私たちを中心に円形の風が巻き起こり始める。

『――聞こえたなら その手で今一度掴み取れ――』

一瞬、意識が飛びそうになった。

私はなんとか意識を繋ぎとめる。

けれど、一瞬気を失いかけたせいだろう。不意にある疑問が浮かんだ。それは――

――なぜ、私はこの人にここまでできるのだろうか、と。

どんなに大事だ、大切だと言っても所詮は単なる“友”に過ぎない。酷い言い方をすれば、赤の他人だ。

どうして私はそんな人に、一番大切だと言っても過言でもないこの命を差し出そうとしているのだろうか。

正直に言って、自分でもよくわからない。

いやだ、だめだと言って、結局はその場の勢いなのかもしれない。でも、これはそうきつと、真琴さんのことが好き、とかそういうっ
た類ではない気がする。

その理由は——まだ見つからない。

誰か親しい人のために死ぬ、て言うのはすごく詩的だけど、そんなことできる人はそういない気がする。

だって、どんなに着飾っても、究極のところ自分が一番大事なものは自分の命だと思うから。

『——我が命はそなたが掴み取る細い道しるべなり——』

だったら、どうして私は自分の命を削るようなことをしているのかな。

そう自身に問うてみるも、やはり答えは見つからない。
なんだか、自分の心が莫迦^{ばか}みたいにして笑えてくる。

『——辿れ 我が声を印しに 我が指す路^{みち}を——』

絶え間なく、私の両の手の平から、真琴さんの身体の中に霊力やら命らしきものやらを流れ込ませる。

その間、私は自分の中でひたすらに自身へと問う。

——なぜ、解りもしないのに、こんな莫迦^{ばか}みたいなことをしているのか、と。

それでも、やはりその問いの答えは返ってこない。

けど、真琴さんが助かった暁には、その答えが見つかるような気だけは、確かに感じた。

心の中で密かに呟く。私という人間はどうしようもない莫迦^{ばか}なんだなと。

『——我が命はそなたとともに 我が命はそなたの新たな礎なり——』

最後に自嘲的な笑いを口元に浮かべてみる。
そして、高らかに最後の節を唱える。

『——今一度ともに 来たれ 我が許へ』
もと

それを機に、私たちを囲んでいた風が消え去る。

私はゆっくりと、真琴さんの中心から手を離す。

やれるだけのことはやった。想いを全部、唄に込めた。

私はそっと、真琴さんの顔を窺^{うかが}ってみる。

真琴さんはゆっくりとしたリズムで安らかに息をしている。

良かった、とほっと撫で下ろす。

「うつ……」

その時、気が緩んだのか、はたまた命を削ったからか、私は酷い眩暈を感じて真琴さんの上に倒れそうになった。

真琴さんの顔が目前にある。

その距離、およそ十センチ。

身体は異常なまでの気だるさに襲われ、起こす気にもならない。

だからと言うわけではないけど、私は意味もなく真琴さんの顔をずっと見詰めた。

——やっぱり、綺麗な人だなあ。

セミロングの、茶色と黒色の中間色みたいな色をした髪。桜色の薄い唇。筋の通った鼻。とても長く細い、綺麗な眉毛。

どれもこれも完璧だなあと改めて見る。

ただ、あまりにも完璧すぎて、美人とも美少年ともいえる中性的な顔立ちをしている。

けれど、顔の造作に加えて雰囲気からしてとても凛々しいから、真琴さんを初めて見た人の殆どは、男女問わず真琴さんを男の人だと思う人が後を絶たないんだとか。現に私がそうでしたしね。

思わず、くすりと笑ってしまった。

そう言えば聞いたことがある。なんでもうちの学校。『王子様ファンクラブ』なるものが主に一年生の女子生徒の間で非公認ながら存在しているみたい。もちろん、王子様とは真琴さんのこと。

まあ、真琴さんは基本、並みの男子を抜いて強くてカッコイイし、誰にでも優しくして平等に接するから、当然といえば当然なのかもしれない。けど、なんかちょっとずるいと思ってしまう。

「ん」

不意に真琴さんの瞼が揺れた。

自然、嬉しくて嬉しくて顔が緩んでしまう。

「わたし……」

そして、真琴さんはゆっくりと瞼を開いた。

「真琴さん。大丈夫ですか？」

なにがなんだか分からない、とでも言いたげな真琴さんに、私は飛びっきりの笑顔で答える。

その声を聞き、真琴さんが私の目を見た。

「ヒカ……リ……?」

「はい。なんですか、真琴さん!」

未だ寝ぼけているのか、少々半眼だ。

けれど、それも直ぐに、実に急速に大きく見開かれ始めた。

「な、なななな、なにを、し、しょ——」

意識がほぼ完全に覚醒したためか、真琴さんは酷く慌て始めた。

——心なしか、顔も少し赤くなりだした。

はて？ どうしてでしょうか？

残念な事に私にはさっぱり見当がつかなかった。

「どうしたんですか、真琴さん？」

言って初めて気がついた。

いえ、正確に言う『初めて気がついた』ではなく『ようやく思
い出した』でした。

そう。今の私と真琴さんの顔の距離はおよそ十センチ。

言うなれば、互いの鼻と鼻がくっつきそうなほどの、すごく危険
で、でもハプニングがあれば正直少しラッキーな、はたまたものす
っごい勢いで誤解されかねない距離なのだ。

なぜなら、客観的に見て、私が眠っていた真琴さんの上に被さり、
今にも襲いかかろうとしているようにしか見えないのだから。

「あ、あの、真琴さん……？ こっ、これには深い、それこそ深海
よりとおくても深い事情がありました……」

ま、不味い。

身体を起こそうにも、力が入らない。

それでも、急いでそこを退くべく身体に力を入れる。

だが、更に不運とでも言おうか。

力が入らないのに、無理に上体を起こそうとしたためか、不意に
腕の力が抜け、身体が更に真琴さんの方へ倒れこんでしまう。

「わっ！」

「きゃっ!!！」

素早く、両手を真琴さんの顔の横へつき、なんとか正面衝突は免れる事に成功する。だが、それでも互いの鼻と鼻が触れ合ってしまった。

更にばっちり合う目と目。

自然、顔が熱くなってきた。自分でも解るくらいにユデダコだ。って言うか、頭が沸騰して脳がとろけてしまいそうだ。

真琴さんの息がそっと顔に降りかかる。

それは真琴さんも一緒なのか、私と同じでまっかつた。

目の錯覚かもしれないけど、僅かに目が潤んでいる気がする。

——やつ、やばい。

このままではかなり不味い。なにが不味いって、本当に真琴さんを襲ってしまいそうになっているからだ。

さっきと違う意味で理性が切れそう。

って言うか、既に崩壊間近。

真琴さんの顔のある一部分に吸い込まれそうになるのを、私は必死で堪える事しかできない。

「ヒカリ……？」

不意に真琴さんが、私にしか聞こえないような囁き声で私の名を呼ぶ。

その際、真琴さんの息が顔にかかり、妙にこそばゆかった。しかも、状況が状況だけに色っぽく聴こえて仕方ない。

それを文字通り顔面で受けた私の理性は、もはやノックダウン寸

前。

正直あと一発決まれば、理性を保っていただける保障はないに等しい。

「真琴…さん……？」

知らず、私も彼女の名を囁いていた。

ああ、私の馬鹿。大馬鹿者。なにやってんですか。今この場でしゃべるなんて自分の首を絞めている以外の何者でもないじゃないですかっ！

頭の中ではそんなことを思っている、もう身体は言う事を聞いてくれない。

どうやらもう理性はとくに崩壊していたらしい。

視線を外そうにも、真琴さんの少し潤んだ目から片時も離せない。

——不意に、ではなく、自然と瞼が下りてきた。

真琴さんも同様みたいだ。

私は、ゆっくり、確かめるように顔を下ろしていく。

するりするり

どんどん真琴さんの、薄い桜色の唇に吸い寄せられていく。

もう、他の事は考えられない。

私はただただ、顔を下ろしていった。

第17話 また一つの分岐点（後書き）

もし、あなたの身近な人があなたの目の前で死にそうになっていたら………あなたはどうしますか？

もし、その人が助かる方法が自分の命を与えるしか方法がなく、あなたにはそれをする力があるとしたら………あなたはどうしますか？

もし、命を分け与える事でああなたの大切な人が必ず助かるとして………代わりにあなた自身の寿命が縮まるとしても、あなたはそれをする事が出来ますか？

………ってことを最初に書こうと思っていたんですが、後半の展開のせいで全部ぶち壊しですね（笑）

しかも、こんな事書くから余計にぶ・ち・こ・わ・し☆

……すみません。悪ふざけが過ぎました。

なにはともあれ、第17話を読んで下さり有り難うございました。なんと、言ってよいやら………

書き直したら後半がああなったんです、はい（殴）
自分でなんか寒気がします。鳥肌が立ちました。

ホント、なんなんだあの桃色の展開はっ！↑

まあ、いいです。お陰でひっそりさにコメディイが書けそうですし
♪↑

え？ 敵さんはどうしかって？

あれです。『不意に襲ってこようが知ったことではない』ですよ。

(↑殺しますよ?)

……ゴホン。えー、今回はどうも悪ふざけが過ぎるらしいです。本当はもう、立ち去るべきかも知れませんが、どうしても最初に書いた事が書きたいのでご了承下さいね。

つまり、さっきまでの悪ふざけはこれから書くことがあまりにもダークになりそうだったので、すこしでも場を明るくしようとして書きました。

え！？ そんなに明るくなってないですって？ H A H A H A H A

！ (↑誤魔化すなっ！！)

……さて、本題です。

もし、さっき上で書いた事が本当に起こったら、あなたはどうしますか？ ヒカリと同じように自身の命を分け与える事ができますか？

それが出来る人は心からすごいと思います。

でもきつと、そんなことが出来る人はほんの一握りではないかと思っています。

おそらく大半の人がその瞬間戸惑いなかなか実行に移すことが出来ない、と僕は思います。たぶん、こんな事書いている僕自身もその一人だと思います。

自分の命と相手の命を天秤にかける。

そんなこと、正直考えたくありません。考えただけでぞっとしますけど、もしそんな選択が迫られれば……僕は一体どんな答えを出すんでしょうね。

相手を助ければその分、自分が早く死ぬ。かといって、そのまま何もしなければ、その人は確実に死に、何故あの時自分は助けなかったんだと悔やむ事になる。

それでも選ばなくてはならないなんて、僕はとてもじゃないけど耐えられません。

だけど、ヒカリはそれが出来た。それも、自分の命を顧みずに。理由は本人も今は気がついていませんが、いづれ気付きます。

その答えにちょっとでも共感していただければなあ、と試してみたり。

……さて、僕のような糞ガキがたいそれた事を書きました。正直、殆ど流してくださって結構です。

さっきまで僕が書いたのは、僕がこの話を書いている途中で思ったことなんで。

それでは、ここまで暗い話に付き合ってくださいまして、本当に有り難うございました。

今回は、戦闘そっちのけでコメディーだと思われるので、後味を悪くされた方はそちらで口直しをしていただければと思います。

まあ、ひょっとしたら例のごとく大したものではないかも知れませんがっ！↑

それではこの辺で失礼します。

……………どうでもいいですが、ヒカリが真琴を助ける時、

『何故、そこで人口呼吸じゃないんじゃー!!』

って思いませんでした？

え？ 僕だけですか？

すすすすすみません、忘れてくださいっ!!

で、では今度こそ失礼します（ペコリ）

（こんなこと書くから、本当に全部ぶち壊しなんだよ）

第18話 し、仕方ないじゃないですかっ！

私はただただ、真琴さんの桜色の唇に吸い寄せられるように顔を下ろす。

真琴さんの熱い息遣いを感じる。

それを感じながら、私は更に顔を下ろした。

しかし、私と真琴さんの唇が触れ合うことはなかった。
それはなぜなら――

「カチカチカチッ！！」

「デスヨネ ワタクシモ アソコニ モモイロノオーラガ ミエマス」

「ヒュー、ヒュー♪ よっ、アツツアツウ〜♪」

ばっ！ とさっきまで起き上がれなかったのが嘘みたいに凄まじい勢いで私は起き上がった。

顔が物凄く熱い。ひょっとしたら蒸気が上がっているんじゃないかな？

素早く声をした方へと振り返る。――この時、心の中で小さく舌打ちをしたのは、当然私だけの秘密です。

そこには言わずもがな、学校のお化けトリオがこっちをニタニタといやらしい笑みを浮かべて、ガン見していた。

切に勘弁して貰いたい。

「おや？ おっしい〜、あとちょっとだったのにね、ひかりん♪」

その内の、一番生身の人の姿をした、白銀の髪をした中学生くらいの女の子が、私に向けて相変わらずニタニタとした笑みで言う。

「あっ！ それとも、あたしたちのせい？ いっや、ごめんね、ひかりん。でも、あたしたちのことそっちのけで、目の前でいちゃつかれてたらつい言っちゃってさあ〜♪」

そう本気かどうか何とも微妙なことを言いながら、主に私に向かって笑いかけてくる女の子。

そういえば、真琴さんと一緒に、女の人の糸で縛られていたんだっけ。すっかり忘れてました。

けどそんなことは、とりあえずどうだっていい。それよりも問題なのはこの異常な暑さと汗。

見なくても分かる。絶対、今私は耳までタコみたいに赤くなっていて、頭からは蒸気が立ち上っているに違いない。

正直言って、穴があれば入りたい。穴がなければスコップを持ってくるなり、モグラになるなりしてなんとかしてでも深い穴に入りたい。具体的には二十メートルくらいの穴に入りたい。そして、そのまま地震が起こって、出入り口が閉じちゃえばいいんです。

「な、なんのことでしょうか……？」

く、苦しいよ、私。かなり、無理があるって。しかもこんなこと言ったら、まるでなにかヤマシイことをしていた人そのものじゃないですか！

「ほっほお。ひかりんは、自分がなにをしていたのか分からないんだあ。そうかそうか、分かったよ——」

そう言うと、雪ちゃんは糸で雁字搦めがんじがらにされているのにも構わず、

身体を上下に動かして私のもとまでやって来ようとし始めた。

……一応ツツコミましょう。あなたは、イモムシですか。

ともかくにも、雪ちゃんはそのまま私の目の前まで這って来ると、邪悪な笑みを顔いっぱいに綻ばせて、さっき途中で切った話しの続きを言う。

「――つ・ま・り、ひかりんは無意識にあんなことをしていたんだね♪」

ぐはっ！　そ、そうきましたかっ。正直、予想外ですよっ！　しかも『あんなこと』って言うとき、妙に力がこもっていませんでしたか？

ああゝゝ、そんな、そんな満面の笑みで私を見ないで！　お願いしますから、見ないでえゝゝ！！

「……ヒカリ……それホント？　ホントに無意識に、この私にあんなことやこんなことをしたの？」

「ひゃい！」

その時、不意に私の、それも真横からおぞましいほど冷気が漂ってきた。

な、なんですか、この横から来る冷気。いや、殺気。一気にマグマのように熱をもっていた、顔やら身体やらが急速冷凍されましたよ。この異常な量の汗たちも氷の結晶に早代わりですよ！

さ、寒い。寒いよお、ブルブル。

こ、殺される。間違はなく殺される。殺されちゃうよお！

ていうか、え、なに？　膨張してる！？　膨張してるよ、真琴さん！

なんですか、あんなことやこんなことって！　なんか、私が卑猥な人間みたいに聴こえるじゃないですか！

しかも、まだ何もしていませんから！ 未遂です未遂！ 私はまだやってない！

「や、やだなあゝ、真琴さん。そ、そんなわけないじゃないですかあゝ……」

自分でもはや無茶苦茶なことを言っているのは理解している。けど、私にどうしろと？ この状況下で私に何を言えと？

もう、冷や汗だらだら。本音を言わせていただくなら、今すぐこの場から尻尾巻いてでも逃げ出したい。

「お？ 認めた？ 認めたね？ ひかりん、今、認めたよね！？」

ぐっ、今度はそっちが来たか！ も、もう勘弁してください。ホント、土下座でも何でもしますから、これ以上なにも言わないでえゝ。

「ねえ、ねえ、ひかりん。今、認めたよねえ？」

「な、なんのことでしょう、メリーさん？」

「あれえゝ、よくきこえなかったなあゝ。ねえ、まっこん？」

ニタニタとした笑みを崩さず、雪ちゃんは隣の真琴さんに言う。

「……ヒカリ……やっぱり、そうだったのね？」

それを真琴さんは、変なあだ名をつけられた事には反応すら示さずに私に問う。

「いいいえ、あの、その、なんていうか………気の迷い？ そ、そうですね、気の迷いですよ、真琴さん！」

「そっか……そうなのね。ヒカリは気の迷いで、私に……」

「ち、違います！ 違いますからその振り上げた拳を下に降ろしてください！ さっきのは、その、あれです、あれ」

「あれって、なあゝにかな、ひかりん♪」

「それは、だから、その……つまり私が言いたいのは……」

二人の交互の質問に私はもうけちよんけちよん。なんか、自分で墓穴を掘っている気が、ものすごくするんですが、たぶん間違いないはず。

「……つまり……何？」

真琴さんが顔を伏せながらも私に問いかけてくる。

真琴さんの周りだけ、気温が氷点下にあるのはおそらく私の気のせいではあるまい。

しかも、背後に目を血走らせたヒョウがこっちに牙を剥いているのも気のせいではあるまい。

ぶっちゃけ、誰かたすけてえ〜。

「ねえ、ねえ、ひかりん。つまり、なんなんだよお〜」

真琴さんとは対照的にメリーさんこと雪ちゃんが、そりやもう満面の笑みを浮かべながら私の更に近くにぐいぐいとイモムシのように近づいてきた。

本当に実にこの状況を楽しんでいるように見える。てか、絶対にそうだ。

真琴さんの背後が血に飢えた猛獣なら、この娘は目の前にあるネコじゃらしで遊ぶ、キラキラとした目を持つ子猫に違いないありません。絶対にそうです。そして、ネコじゃらしは確実に私です。

もう一度言います。誰かたすけてえ〜。

ふと思ったのですが、今この状況って他に類を見ないものじゃありません？

片や猛獣を従えた絶対零度を発している、地上最高の権力を持っているであろう生徒会長。片や子猫のように他人をネコじやらしごとき扱いで遊ぶ、学校のお化けメリーさん。

そんな二人が、巫女さん装束を着た男子生徒に交互に、さきほどその男子生徒が行っていた行動について詰め寄っている……というこの状況。

……果てしなくシニカルですよ、これ……ありえませんが、本当に泣いてもいいですか？

しかも、もとを正せば全部私が悪いというね。………ありえません。

例えるなら今の私の状況は、私の後ろは切り立った崖で、目の前には牙を剥いた氷山を引き連れたヒョウと、悪魔のような愛らしい子猫がじりじりと詰め寄ってくる状況に違いありません。まさに逃げ場なし。絶対絶命。一貫の終わり。あるいは、THE END。

冗談でもとてもじゃないですが笑えない状況です。

ああ、神様。私は一体なにをしたの言うのでしょうか。何か悪いことをしてしまったのでしょうか。どなたか、どうか教えてください。

あつ、そういうばしましたね、悪いこと。しかもほんの四、五分前に。それならそれで、罰を与えるまでの時間が幾らなんでも早すぎやしませんか？　ちゃんと罰は受けるので、どうかこれ以外の罰にして下さい。……本当にお願いします、神様。

「「ねえ、どうなの？」」

二人の声が綺麗にシンクロする。また、それに合わせて、二人して一緒に顔をずいっと近づけてくる。

あつ。これはまず間違いなく何を言おうと私に待つのは『死』です
ね。

短い人生でした。母上、どうか先立つ私をお許し下さい。
まぶたを閉じると、冷たい何かがそつと出てきた気がした。

「……それは」

「「それは？」」

またもや二人の見事なまでのシンクロ。けれど、それぞれの表情
はまさに雲泥の差。冷たい猛獣と悪魔なお化け。

私は息を吸い込む。

「それは………だって、私は思春期の男の子なんだもん！ ……
って言ってみたりして。あ、あははは」

………。

そういった瞬間、私たちの周りだけ時間が止まった気がしました。

「……………っんの——」

真琴さんが俯いたままでゆっくりと立ち上がる。

声色からも十二分に分かるほどの殺気が滲み出ています。

さ、さあ、来いッ！ どどどどど、どんな罰でも、あつ、甘んじ
てう、受けてたとう——じゃなくて、受けてたたせていただき…ま

……す……よお……

「――ヒカリの……」

そうボソツと言ったかと、キツと顔を上げて、どこかのマンガのヒロインみたいに足を天高く振り上げ、

「……バカーーーー!!」

「ぐほっ!!」

そのまま白い霧を伴って私の脳天へ一直線。私は動けずクリティカルヒット。冷たく硬い渡り廊下にこんばんわ。

……ふっ、やりましたね、真琴さん。あなたのカカト落しは、きつと音速を超えましたよ――

その後、しばらく真琴さんの荒い息と、雪ちゃんが釣り上げられた魚よろしくバタバタと悶えながら爆笑していた声と、

「カチカチチ」

「ゴシユウシヨウサマデス ライセデハ ドウカオシアワセニ」

というなんとも失礼な声がどこか、遠いところから聞こえてきていました。

………最後に、私はこれだけ言っておきたい。

真琴さん、お願いしますかカカト落としだけは勘弁してください。
真面目に死にます。

ほら、頭から白い湯気が出てますし、血も出ていますから………
……あと、真琴さんは仮にも女の子で、それに今スカートを穿いているんだから、カカト落しはやめようよ、ねえ？

あれ？　　そういえば、何故私は自分自身を見下ろしているのです
ようか？

第18話 し、仕方ないじゃないですかっ！（後書き）

ここまで読んで下さり、有り難うございました！！

というわけで、久々のコメディーでした。

いかがでしたか？ ちよつとは、笑えましたでしょうか……（冷や汗）

そんなことより、大ニユースです！！

なんと、一日に二話も更新する事ができました。

前々回ぐらい（曖昧）に次ぐ快挙です。やはり、コメディーだったからでしょうか。それとも、今までの鬱憤が堪っていたからでしょうか。

でも、たぶん、GWのお陰ではないかと思います。

GWバンザイ！！↑

この調子で、あと一話位GW中に更新できるかと思っています、はい。

……たぶん、ですが。

次回からはまた戦闘に戻りますが、もう終わります。ていうか終わらせませす。終わったらコメディーに戻れるかと思っています。ええ、コメディーに戻して見ませす。………ひよつとしたらあまり長く続かないかもしれません（ボソツ）

こんな事書いていると、『なんでジャンルがコメディーなんじゃい

！！』という怒声が聞こえてくるような気がしないではないのですが、頑張ってコメディ―を主体にしていきたいと思います。

最後に一つだけ。

今回の話で前回の後書きの口直しはできたでしょうか？ 出来ていたら幸いです。実は、あれを書いた後、後悔していたり（ゴニョゴニョ）

そ、それでは、今回はこの辺で失礼します。

次回も是非読んでください。どうかお願いします。

第19話 ある意味お約束？

「ぶははは。おっ、お腹イタイ。よ、よじれ……ぷぷぷ、ぶはははは、ゲホゲホ、あはははは——」

はっと気がついて最初に聞こえたのは、愉快そうに笑う笑い声。それともかなりの爆笑で、時々笑い過ぎてせき込んでいるのがわかる。

どうして笑っているのかは知っていますが、なにもせき込むほど笑わなかったっていいじゃないですか。

「うう……」

……痛い。それもかなり。特に頭部と顔面が痛くて溜まりません。しかし良かったですよ、本当に。なにせさっき自分自身を見下ろしていると知ったときは、流石に死ぬかと思いましたがからね。

いや、それにしても、一体私は何度、それも敵でない味方であるはずの真琴さん達に殺されかければいいのでしょうか？

よくよく考えれば、たった一晩で軽く三度は向こう岸を見ましたよ。

もう、あんなのは今後しばらく拝みたくありませんね。

「ハア、ハア……」

私の頭上から誰かの荒い息遣いが——って言うまでもないですね。私のちょうど頭上で、真琴さんが今し方激しい運動をしてきたかのように荒々しく息遣いしている。

そんなにイヤだったんですかね？

……そんなことよりもいい加減に起きなきゃいけませんね。そして早く止血をせねば。

起き上がろうと両腕に力を込める。ああ、頭が割れそうです。ぐわんぐわんします。本当に久しぶりですね、こんな重い一撃を食らったのは。勘弁して下さい。

「いたたた……」

顔もすつごく痛い。特に鼻なんて、先っぽがへし折れているか、へっこんでいるんじゃないかと思うほど痛いです。

「……ふう」

体を起こすと正座で座り、一息。そつと後頭部を触ってみたら、大きな突起が三つ。どれもこれも触った瞬間に鈍い痛みが走る。しかも、その内の一つは未だ熱を帯びていた。

……このケガ、全部真琴さんのせいですよね？

「……まだ、起き上がる力があるのね」

その時、地獄の底から聞こえてきたのではないか、と凍えるほどの鋭い殺気を滲ませた低音が、ちょうど私の頭上から響いてきた。途端に蘇るあの絶対零度の冷氣。

さ、寒すぎて凍りそうです！

べつとりとした脂汗を全身から滲ませながら、私は顔を上に上げる。

「……すう」

うわっ！ 左半身で腰を落として構えていますよ。しかも、呼吸まで整えて気を溜め始めましたね！ そんなに私が言ったことが不味かったんですかあああ！？

「えーと……」

正座の状態のまんま、視線をさまよわす私。飢えた猛獣のようなギラギラとした眼光を放ち、私を亡き者とせんという勢いで見下ろす真琴さん。そんな私たちを爆笑やら珍しいものを観るような目で見ている学校のお化けトリオ。

……すんごいカオスだ。

「ぶひゃひゃひゃ、お腹がこ、こわははは、壊れる」

さっきから一体いつまで笑い転げているんですか。軽い殺意が湧いてきましたよ。

まったく、顔をものすごく赤くして、イモムシみたいな状態どころ構わず転がらないで下さい。はっきり言って気持ち悪いですよ。それに元はと言えば、あなたのせいでもあるんですよ？ そんなところで無責任に笑ってないで、ちよっとは私を助けて下さい！

ちよっと視線に力を込めて、SOS信号を三人トリオに送る。速くどうにかしてくれ、と。私にはどうにも出来ないんですよ、と。

その視線に気がついたのか、床を転げまわっていた雪ちゃんが動きを止める。そして、私を見る。

ニヤリ

雪ちゃんは口元の端を不敵に釣り上げ、私をしげしげと見詰めて

きた。それもかなり意味ありげな顔で。

この瞬間、私は彼女に対して純粹な殺意が芽生えたのは言うまでもありません。

そんな私の思考を読んだのか、はたまた露骨に表情に出ていたのかは私には分かりませんが、より一層雪ちゃんは顔一杯にニヤニヤとした実に憎たらしい笑顔で私を見始めた。

……そんなに私が絶対絶命なのが楽しいのかっ。

「ヒカリ。覚悟は出来た？」

出来てません出来てません出来てません、出来てませーん！　そんなの出来ているわけじゃないですか！！

また視線を真琴さんに戻す。彼女はさっきと変わらぬ姿で私を見下ろしていた。嬉しい事にさっきと違い全身から『準備満タン、いつでも殺れるわよ』みたいな声なき声が発せられている気がしてなりません。わぁーい、感激で泣きそう。

急いで真琴さんから視線を外して、雪ちゃんを見やる。ありったけの力を込めて、視線で助けを求める。もう、『見やる』とか言うレベルではなく『凝視』。ええ、もう『凝視』です。それだけ本気で助けを求めているんです！

「なに、よそ見しているの？」

ばっ、と再び真琴さんを見る。『覚悟は出来た？』と真琴さんの目が語っています。だ、誰かあああ！！

「ほらほらまっこん」

そんな時、思わぬ事から救いの手が。か、神はまだ私を見捨てて

はいなかったんですね！

脂汗を拭いもせず、私は声の発した方、やっと笑うのをやめグルグル巻きにされた状態のまま、身体をこちらに向けている雪ちゃんを見る。

彼女は見るからに、やれやれ、といった感じで口を開く。

「痴話喧嘩もいい加減にしないとダメだよ？ そりゃ見てるこっち
は、もう愉快で愉快でたまないんだけどさあ。流石にもう、ア
ツアツでお腹一杯だよ！」

……やっとなんて助けてくれたかと思えば、なに言っちゃってんですか、
このお化けさんは。

「なっ、なっ、なっ——」

ほら。そんな事いうから、真琴さんの顔からまたマグマが噴出し
ていますよ。

……え？ 私ですか？ ちょ、ちょっと体とか顔から火が出そう
なほど熱いですが、全然恥ずかしくなんかないんですよ？ ホント
ですよっ！

「そんなバカみたいな事、この私がするわけないじゃない！！ 私
はただ、ヒカリが——」

「はいはい、まっこんはそんなことしませんよねえ。よおしく、
知ってるよ」

「私をバカにしてるの！ いい？ 言っとくけど私は、ヒカリのこ
となんてなんとも思っていないんだからね！」

「あっ、自分で墓穴掘ってやんの♪」

「ち、違う！ 違うのよ、今のは——」

「はいはいはいもう十分熱いのはわかったって。ちょっと落ち着いて」

「だから、私は――」

「はいはいはいはいはい！ はい！ まっこんのことはわかったから。もう十分わかったら、ね？ と言う訳でさー、ひかりん」

「は、はい！」

「無視するな――！！！」

なにやら横で喚いている真琴さんを華麗にスルーすると、雪ちゃんは私のほうへ視線を向けた。

「いい加減に、この鬱陶しい糸束を解いてよ！ 結構きつきつで痛いんだよ？」

まっこんだけ解いてズルイ、と雪ちゃんは拗ねたような顔をする。

……そういえば、真琴さんのはいつの間に解けていたんでしょう？

やっぱり、私がさっき真琴さんに術を施したときかな？ なら、気がついてもいいんだけどなあ。

とにもかくにも助けてあげないと。いつまでもそんな状態にしておくわけには行きませんしね。

「分かりました。ちょっと、待っていてくださいね」

そう言って私は立ち上がり、学校のお化けトリオのもとへ行った。

糸を解こうとしたとき、ふいに雪ちゃんが話しかけてきた――

「ところでさ。ひかりんはまっこんのことどう思っているの？」

「は、はい？」

「いやねー。ひかりんは、まっこんのこと、どう思っているのか、なー、って」

「ななななにを突然言い出すんですか！」

「いやー、ちょおーと気になってね。で、どう思ってるの？」

「そ、そりゃ、その、真琴さんは強いですし、頭も良くて、運動や他の事も同じ高校生とは思えないほどすごくて、ものすごく優しく、私なんかの友達にもなってくれて。だ、だから、私は真琴さんがすごく好きで。あっ！ いや、好きと言うのはですね、別に友達として好きなわけで、あの、その、異性としては、その……」

「ふーん。ひかりんもかー。なんて言うかさー、二人ともベタ過ぎるよね。今時、ここまで予想通りのわかりきったセリフを聞く機会のほうが少ないよ。ていうか、べた褒めだね♪ それだけ、むっちゅー、てことかー」

「なななななんなんですか、一体……！」

「んーん。べっつにー。これ自体には、そんなに深い意味はないよ。むしろ、わかりやすいぐらい浅いと思うよ。主に反応とセリフが」

「だ、だから、その意味がよくわからないですよ」

「そのセリフは、顔を赤くして動揺している人が言うセリフじゃないと、あたしは思うんだけどなあ。そうは思わない？ それに第一、ひかりんがまっこんのことをスキとかキライとか訊いた覚えはないんだけどなあ」

「……………っ！！」

しまった、と思ったときには既に時遅し。

ニタニタと実に憎らしいほど清々しい笑顔で雪ちゃんは続けざまに口を開いた――

「だってさ――まっこん♪」

――私の背後にいる真琴さんに。

そこで私はようやく真琴さんの存在を思い出した。

さー、と血の気が失せ、同時に今度は、だー、と汗が噴出してきた。体と顔もかなり熱い。

私は、首をぎちぎち鳴らしながら、背後にいるであろう真琴さんのほうを振り返った。

「――い……」

胃？ いやいやいや、何考えているんですか、私は。そんな親父

ギャグ、今時まったく笑えませんか！

ええ、わかっています。もちろんわかっています。今のはただの現実逃避なんだったことぐらい。

ああ、真琴さんが顔を真っ赤にさせて、肩で地震が起きています。哀しきかな。この状況を見ただけで、次、何が起きるか分かってしまうなんて……

「――い、いいから……」

ああ、ほんの数分前にこの世に戻ってこれたばかりなのに。もうこんな展開はごめんだと、ついさっき思ったばかりでしたのに。

そもそもこの展開は何度目なんですかね。いい加減に辛いものがありますよ。色々な意味で。でも、こうなってしまったのは、仕方

ないと受け入れるしか私には選択肢が存在していないんですね。
そう思った私の頬を伝ったのは、体の熱による汗なのか、それとも、諦めの涙なのか。

「――さっさと、その糸をほどきなさー！ーい！！」

真琴さんのしなやかで、それでいて強靱な、とても細い右脚が、カカト落としのときと同等かそれ以上の白い霧を伴って、私の横腹へ飛んできた。

――今度こそ。グッバイ、現世。

「ぐほおっ！！」

まもなく、強烈な回し蹴りが私の横腹へめり込んで、私は吹き飛ばされてしまった。

い、痛い、です。な、何故、こんなにも強烈なんです、か。しかも、だんだんと、威力が、上がってきてますって。

宙に舞いながら朦朧と私は思った。

これ以上これ級の攻撃を受けてたら、確実に天に召してしまう、と。

真琴さん。ツツコミにも力の限度というのを考えてくださいよ。本当に。

一見、何事もなくしゃべっていますが、それは既にいろいろとヤバイからなんですよ？ そこらへん、そろそろちゃんと理解してください。

「あはは。まっこんたら照れちゃって。かあいい。この小学生男子め♪」

―――――本当に、いや、切にし理解してください。お願いします

から、これ以上火に油を注ぐような事は、もう言わないでください。
そのとばかりを、私は文字通り体で受けなくてはならないのです
から……

そして、私はまた地面にくしゃりと落ちた。もちろん、だれも助けに来てくれなくて、荒い息と笑い声だけがまた、まっくらな渡り廊下に響いていた。

第19話 ある意味お約束? (後書き)

みなさま。どうも、お久しぶりです。

え、え〜と、あの、その……本当に遅くなってすみませんでした!!

最後に更新してから、およそ二ヶ月強。しかも、以前の僕ことkimiは「あと一話くらいGW中に更新できるかも♪」とか調子ぶっこいて、この結果。

いや、もう本当に申し訳ありませんでした。

あ、お気づきの方も既におられるかと思いますが、ペンネームを変更しました。もつとも『キミ』自体は変わっておらず、他の言葉を増やしたただけなんですけどね(汗)

まあ、遅れた理由はないこともないので、一応言います。というか宣伝します。

実は僕、二作ほど七夕小説企画の小説を投稿しました。

そのうち連載の方は、あらすじがあれな感じになっていて、ジャンルをファンタジーにしていますが、ファンタジーなんかよりも、恋愛色の強いラブコメとなっています。

もしもよろしければ、一度目を通してみてください。そして、メッセーじでも感想でもいいので、一言でも何か感想をいただければと切に思います。

……すみません。話が脱線してしまいました。

ところで、今回はどうだったでしょうか。

本音のところ「またこのオチかよ!」と思われた方も少なくはない

のでしょうか。

ええ、ぶっちゃけますと僕もそう思います。しかも、かなり。

だって、だって、本当はこんなオチのはずじゃなかったのに！！（と叫んでみる／笑

一体、どこでこうなったのやら。当初のオチとしては、ヒカリがメリーさんに弄り倒されて自爆する――という、よくあるパターンだったのですけどね。真琴も自爆していますし（笑

ま、まあ、このパターン「☆☆妖魔封印物語☆☆」のある意味お約束のオチということで！

もう、気にせず行きましょう！！（↑超開き直り

……やっぱり、ダメ、ですよ。そうですね。考えます。

で、でも、あの三人がいけないんだっ！！（と、また叫んでみたり

いつものごとく長くなってしまいました、この辺で。

次回更新するまで、どれほどの時間が空くかわかりませんが、どんなに遅かろうと僕は最後まで書き上げますので。

では、今回の話を読んでくださって、ありがとうございました！！

次回もどうぞよろしく願います。

第20話 狩るモノ 狩られるモノ

「はぁー、やっと自由だぁー！ ひかりんありがとね！」

「……そ、それは良かった……ですね……」

雪ちゃんは両手を上に上げ、可愛らしく大きく伸びをしながら私に感謝の言葉を述べた。他の二体も口々に感謝の言葉を述べてくれる。私自身は大したことはしてはいないのだけど、やっぱり言うってもらえるとすごく嬉しいと感じてしまう。

がしかし、今の私はそれどころではなかった。

それは何故か。決まっています。真琴さんに二度も連続で、文字通りぶっ飛ばされたからです。

本当にもう。体のあっちこっちが痛くて堪りませんよ。何故、私はこうも、無駄な怪我が多いのでしょうか。

「すごく今更だけど、ヒカリってすごいよね」

不意に私のすぐ横に来ていた真琴さんが、今まで自分がしてきたしてきたことは綺麗さっぱり忘れた感じで口を開いた。その顔はもう赤くなどなくいたって普通だった。忘れているというのは、明らかに私が蹴られ損というものだが、それでもやっともとの真琴さんに戻ってくれて私は人知れずほっとした。

……もつとも。引きずられていたらいで、それはそれで困るのですけどね。

「そうでもありませんよ。真琴さんたちから見たらすごいかも知れませんが、私たちから見たら私なんてまだまだヒヨコ子です」

「そうなの？ でも、私はやっぱりヒカリはすごいと思う」

「そ、そうですか？」

真琴さんはそういういながら私を正面から見据える。真琴さんの瞳の中にあたふたとしている私が映る。

そんなことを面と向かって言われるとやっぱり照れくさい。でも、それ以上に褒めて貰えるというのは嬉しい。

「ねえねえ、ひかりん。さっきの怖い奴は倒したの？」

照れて顔を真っ赤にさせていた私にあの女の人が吹き飛んだ方向を見つめながら、雪ちゃんが心配そうな声をかけてきた。心なしか少し、声が震えて聞こえる。やっぱり、雪ちゃんたちもさっきの女の人が纏う得体の知れない冷たい妖気に気がついていたんでしよう。

「わかりません。一応、確かに今まで以上の手応えは感じはしましたが、あの程度きつとあの人はやられていないでしょう」

そっか、と相変わらず暗い渡り廊下の先を見つめ雪ちゃんは答える。

私もつられて闇に包まれている向こう側を見つめる。不穏な気配は感じられない。前と同じく平穏な空気が漂って来てさえいる。

……けど、やっぱり変。さっきもそうだけど、あまりにもあっさりすぎている。平穏だから不穏。正常だから異常。おかしいです。あの女の人はあれしきの攻撃で倒れたりするはずがないんです。あんな異様な妖気を放つ妖怪、今まで見てきた妖怪のそれとはまったく異なっています。

一見すると、まるで女郎蜘蛛。しかし、その力は比べものにならないほど強力。

私自身、何度か女郎蜘蛛と戦い滅してきたことがありますから、きつと間違いではないはずです。

「ねえ、ひかりん！ もう帰ろうよ！」

さっきまで黙って暗闇を見つめていた雪ちゃんが私の袖を掴む。顔は今にも泣き出しそうで、不安や心配に駆られているようで、とにかく今し方この場で爆笑していた人物からよもや想像出来ないほど歪んでいた。

「もう止めようよ！ あいつが来たら、今度こそ死んじゃうかも知れないんだよ！」

私の袖を掴む腕が僅かに震えているのが、服の振動で分かる。同時に雪ちゃんの気持ちも痛いほど伝わってきた。

さっきまで大笑いしていたのは、きっと私や真琴さんが無事だと分かり安堵したからかも知れない。きっと、一時とは言え嬉しかったのかも知れない。きっと、笑うことで無理にでも不安をなくそうとしていたのかも知れない。

……きっと、私が真琴さんにした意味を理解しているからかも知れない。

「大丈夫ですって」

「ウソ！ さっきも大丈夫とか何とか言って死んじやいそうになっ
てたもん！」

なんとか雪ちゃんを安心させようと試みてもあえなく撃沈。でも、なんでだろう？ こうやって引き止めてくれることが嬉し
いと感じてしまう私も確かに居た。

「今度はちゃんと倒して見せますから。ね？ 大丈夫だから安心し
てください」

「ウソだ！ ヤダヤダ、絶対に行かせない。行かせないんだから！」

さて、どうしましょう……。本当にもう、遊んでいる時間はないというのに。

もし、あの女の人を手傷を負っているなら今すぐに攻撃を開始しなければいけない。もし、そうじゃなくてまた気配を隠しているならどこからの攻撃にも対処できるようにしなくてはいけない。

さてさて……。本当にどうしましょうか……

「あのですね――」

「ヤダ！ もう止めて帰るって言うまで離さない！」

「でも、それだとあの人をこの学校に野放しにすることになるんですよ？ そしたら、それだけあの人之力も増えますし、第一もっとも危険な目にあうのは学校のお化け達、つまりは雪ちゃんたちなんですよ？」

「それでも、イヤ！ それにどうしても危なかったら、皆でひかりんの家に取り憑く！」

なんですと！ いったい学校には何体いると思ってるんですか！ 雪ちゃんのあまりにも唐突過ぎる言い草に些か私は眩暈を感じてしまった。

「ヒカリ。私もその娘が言っている通りだと思う」

不意に横から真琴さんの声がかかる。

「ま、真琴さんまで……」

「だって、ここでヒカリが無理してあれを倒したとしても、その代償に大怪我を負うか最悪死んでしまったりするのは、私も嫌だから」
「で、でも、それじゃどうすればいいんですか？」

そう私が質問すると、真琴さんは、簡単な事じゃない、と口を開く。

「一度、撤退してこっちの体勢を整えるのよ」

私としてもあんな化け物が学校にいられるのは困るしね、と真琴さんは付け加えた。

……でも、それじゃ――

「でも、それじゃだめなんです。だって――」

――あれは違うから……

そう言おうとして口を閉ざす。

理由も根拠もない。ただ漠然とした、けれど強い感覚。

私はあの人を知っている……気がする。

何故か。何時か。何処かで。私はあの人を知っていた。

同時に感じるあの人との類似点。

だから、私はやらなくてはならない。

はやく。はやく、あの人を――

「なに？ なにか問題でもあるの？」

押し黙ってしまった私を見ながら、真琴さんはそう私に尋ねてきた。

けれど、私はそれを答える事が出来ずに再び黙り込む。

本当に、私はどうしてしまったのでしょうか。

それすら解らずに、ただただ私は困ったような顔でその場から、動けずにいた。

本当は帰ったほうがいいのかもしれない。真琴さんや雪ちゃんが言っている事は、正しいのかもしれない。

でも、何故か私はこのまま帰りたくはなかった。

「もう！ ひかりんのバカ！！」

ふいに大きな声で、雪ちゃんが叫ぶと、私の袖を強く握り締めた。そして、有無も言わさないとばかりに引っ張ってきた。

「ひかりんに動く気がないなら、あたしがムリやりにでも、連れて帰る！」

「ちょ、ちょっと！」

ぐいぐいと雪ちゃんに引っ張られて、私は焦ったような声を出す。けれど、そんな私に構わず雪ちゃんはなおも引っ張ってくる。

私はそれに負けじと、その場に踏みとどまろうとした。

「ほら、帰るわよ！」

「真琴さんまで、そんな呑気な！」

けれど、そんな私の努力も空しく、余っていた片方の手の袖を真琴さんに掴まれると、雪ちゃんと一緒に引っ張ってきた。

流石に、それも真琴さんの力に敵うはずもなく、私は意思に反してずるずると出口に向かって引きずられてしまう羽目になってしまった。

「だ、ダメですって！ 今は、逆にむやみに動いては危険なんですって！」

そう言ってなおも抵抗するも、もはやそれは無駄な抵抗に他ならないように。

私はどんどん引きずられてしまった。

辺りの空気が変わったのは、この直後だった。

不意に今までの軽い雰囲気のことごとく、かき消すほどの重たい気配があたりに満ち始めた。

「うっ……」

「な、なに？　ちょ、ちょっといきなりどうしたのよ？」

その重たい空気に押しつぶされ、雪ちゃんが苦しそうにその場に倒れてしまった。また、それだけでなく横にいたガイ子さんやジン太くんも続けざまに倒れてしまった。

かく言う私も、これほどのプレッシャーに押しつぶされそうになって耐えるのがやっとだった。

真琴さんは、辺りの空気が変わった事には、気がついていないみたいなのですが、それでも感じるのはそこまでのよう。流石に、この重たく冷たい霊力は感じていないみたいで、苦しそうに倒れた雪ちゃんを見て、焦ったような声を出した。

「あぶない！！」

私は後ろから突如として現れた気配に、慌てて真琴さんたちを横へ弾き飛ばした。

真琴さんが悲鳴を上げて、横へ飛ぶ。

けれど、心配してあげられるほどの余裕は私にはない。すぐさま後ろを振り返り、手をかざす。

意思に従い、手から青白い光の霊力で出来た壁が姿を現した。

「くっ！」

間一髪。私は背後から私たち目掛け、飛んできた縄のような糸の束を防いだ。

糸の束が、粉々になり、はらりと私の周りを漂う。
私は急いで、糸がやって来た闇を見た。

「逃がさぬぞ。虫ケラ」

そう言いつつ、姿を現したのは、あの女の人。

私は、その女の人を見て、恐怖した。

思うことはただ一つ。

やはり、あれしきでこの女の方は倒れてはいなかった、ということ。

引いたと思った汗が、再び噴出してきた。けれど、滴る汗を拭う余裕はない。

なんなのだろう、このプレッシャーは。

今までよりもさらに厚く重い。

先ほどの雪ちゃんたちを見ても解る。

どうやら、あの女の方もいよいよ本気になった、という事のようにですね。

私は女の人を睨んだ。

女の方は変わらず、冷笑を浮かべていた。そこに一切の隙は存在していなかった。

油断したらやられる。

これまでこの女の人と対峙して思った感じが、ここに来てさらに強くなった。

ごくりと唾を飲み込む。

「よもや、これ程とは。正直驚いたぞ、神寺の子孫よ」

女の方は、一步一步、確実な足取りで近づいてきた。

「どうやら我も少々おふざけが過ぎたようだ」

そして、歩を止める。

距離にしておよそ五メートル。互いにいつでも攻撃を仕掛けられる距離だ。

女の人は冷笑を崩さず、けれど鋭い目つきで、私を見据えていた。

「そちの幼いながらも強力な霊力。それもあやつとよく似通った霊力。その力は、いずれ我や他のモノにとって面倒なものとなろう。我とて、あの夜のように愚かな行いはせぬ。やがて我にあだなすその刃。幼い今のうちにへし折ってくれよう」

そう言った女の人からこれまでにないほどの、強力な重圧を感じた。

もう、手加減はないという事ですな。

私はまた唾を飲み込む。

動けない。動こうものなら、今度こそ確実にやられる。そう私の本能が囁いている。

私は気圧されないようにと、女の人を睨んだ。

けれど、それも女の方は顔色一つ変えず、私を冷笑とともに見つめていた。

「なにやってんの！ 早く逃げるのよ！」

不意に真琴さんが叫んだ。

驚いて、声がした方向へ振り返った。

真琴さんは、雪ちゃんを背負い、私を焦ったように見ていた。

その場にジン太くんとガイ子さんの姿が見えないところを見ると、どうやら私たちが会話をしている間に、安全圏へと逃がしたみたい。

おそらく真琴さんのことですから、あの倒れている二人を蹴り飛ばしたのかもしれませんが。

「早く！」

そう言って、真琴さんは再び叫んだ。

けれど、私は真琴さんたちの背後にうごめく影を見た瞬間、真琴さんたちに向かって叫んだ。

「あぶない！ 逃げて！」

しかし、所詮そんなものに大した効果もなく、真琴さんたちは背後から現れた、白い糸でできた糸人形たちに捕まってしまった。

うごめくそれには、顔というものがなく、ただただ人の造形をしたのだった。それもとて不恰好で、所々糸がほつれている。

——心を持たない糸人形。作り主の意思に従い行動する人形。ひとがた
その数、およそ十二。

急いでそれら糸人形に捕まった手を振りほどこうとする真琴さん。けれど、いくら真琴さんが普通の人に対して強いといっても、相手は人外の人ならざる人形。ひとがた

真琴さんが、隣にいた一体の腹部に蹴りを入れる。

がしかし、繰り出した真琴さんの強烈な蹴りは、その無数の糸に絡め取られ、背後から現れたもう一体の糸人形によって後頭部を殴られ、地面へと倒れてしまった。当然、その背にいた雪ちゃんも力なく地面へと落ちてしまった。

それら一連の動作を、私はなす術もなく眺めていた。

倒れた真琴さんたちの上に、後から後から現れた糸人形の群れが襲い掛かる。

そこで、ようやく私は弾けたように真琴さんたちのもとへ駆け出した。

「やめろ!!」

私は両手から、靈力で出来た弾丸を放つ。それがあたり、数体の糸人形が粉々になった。

真琴さんまでの距離は少し遠い。私は急いで糸人形たちのもとへと駆ける。

「どこを視ている。虫ケラ」

私は横へ飛び退る。直後、一線の先が鋭く尖った糸の束が、渡り廊下の床へ突き刺さった。

私は、背後を振り返った。

その瞬間、黒い影とともに女の人が、凄まじい速さで私のもとへとやって来ているのが目の端に映った。

「そちの相手は我ぞ」

「くっ!」

女の人の鋭い爪が私に襲い掛かる。それをぎりぎりのところでなんとかかわす。服の端が、また引き裂かれた。

だが、今回はそれで終わりではなかった。

右。左。続けざまに繰り出される攻撃。なす術もない。

体中の肉を削がれる中、私はそれらをただ避けることで精一杯だった。

焦りが私の中で次第に大きくなっていく。

それは自分の危機的状況からではない。今はそんなことより、真琴さんたちの方が気にかかって仕方ない。

だが、今のこの状況下では、真琴さんたちを助ける事はおろか、真琴さんたちのほうを振り返ることすら叶わない。

私は強く唇を噛んだ。

いつまでもあの糸人形を野放しにはできません。

私は形勢逆転を狙い、左右の手に靈力を込める。

「ハッ!!」

そして、それを大きく後ろへ後退した際に、女の人へ向かって一斉に薙いだ。

鞭のように青白い光を帯びながら、女の下へとそれは素早く向かった。

だが、それはいとも容易く女の人に弾かれてしまった。

早く次を――

しかし、そう思うよりも先に女の人の冷笑が、私の目の前に不意に現れた。黒い影が高速で私に迫る。

対処できない。防ぐ事は敵わない。

私は腹部に鈍い音とともに強烈な痛みを感じる。そのままその場から吹き飛ばされ、私の体は宙を舞った。

大きく舞った私の体は、渡り廊下の横の壁に激突する事によって、再び地面へと帰った。

壁へぶつかった瞬間、肺から空気が押し出されるような感覚に陥る。

激痛にすぐに立つことが出来ない。

私は、その場にうつ伏せに倒れたまま、激しく咳き込んだ。

目の焦点が定まらない。体に力が入らない。

女の人が近づいてくるがわかった。じらすようなゆっくりとした歩調がcaろうじて耳に響く。

立ち上がらなければ。そう思っても体が言う事を聞いてはくれない。

腹部は未だその痛みが和らぐ事を知らなかった。脈打つ鈍い痛みが体中を駆け巡り、意識が朦朧としてきた。

ごほっ、とまた咳き込んだ。

口の中から、何かが飛び出した。

血。

私の視界に朱色があった。無理もない。あんな攻撃を食らえば、これぐらい当然だった。

吐血とけつくらいなら、どうってことはない。それでも、幾度となく自らの血を吐き出してきた。

しかし、今は最悪な事にそれだけではなかった。

吹き飛ばされたとき、私は後頭部を強く渡り廊下の壁にぶつけてしまった。

脳震盪。

目が霞み、力がまったく言っていないほど入らない。今にも意識を手放しそうだ。

しかし、やすやすと今は意識を失うわけにはいかない。

歯を食いしばる。両手を体の横に立て、力を込めた。

少しだけ、上体が浮く。

私は焦点が定まらない目を開き、前から歩いてくる人影を見た。

顔はぶれてしまって、よく見えない。

それでも私にはあの女の人が嗤わらっているように見えた。

……こういう時、私は自分の愚かさを改めて感じる。

やっぱり私は弱い。いや、寧ろ無力だ。

前の人影から視線を外し、少し離れた黒い山を見た。

声が聞こえた。……違う。音が聞こえた。もはや言葉として認識

できない。それでも、その音は私にとってとても懐かしく、今にも

切羽詰った音だった。

「真琴さん……」

彼女はまだ無事なようだった。少なくとも、今はまだ。

あの糸人形たちに押さえつけられ、身動きを封じられているだけ

なのだろう。

せめて真琴さんだけでも……

私は右腕を黒い山に向かい伸ばした。

ぼう、と開いた私の手の平に青白い光を灯す。

今の私が真琴さんに出来ること。それは、彼女に逃げる隙を作る
こと。

幸い、真琴さんは身動きを封じられただけで、意識はしっかりと
しているようだった。

なら、上にのっている糸人形を壊せば、彼女は自由になれる。

あの糸人形も強度は大したものではない。さっき私が壊したとき
にあっさりと数体が壊れたのがいい証拠だ。

距離が離れているとはいえ、ぎりぎり今の私の力ですべてんの糸
人形を破壊できるだろう。

私はさらに手の平に靈力を込めた。

ひょっとしたら、真琴さんは自由になっても私を見捨てないかも
しれない。いや、彼女のことだから、きっと私を助けようとするは
ず。それだけは、絶対にさせてはならない。

元々一般人の真琴さんでは、私を助け出す事はおろか、まともに
やり合うことすら不可能だ。

それでもやり合おうとした、そこに待つのは間違いなく『死』の
みだ。

それだけは避けなくてはならない。

時として、助からない相手は見殺しにしなくてはならない。

一人を助けたがために、十人も人が死ぬより、一人を見殺しに
して十人を助けた方がいいに決まっている。

助かる命はより多いほうがいい。

もう、私が出来る事といえば、真琴さんの身動きを取れるように
する事と——あとは、足止めだけ。

幸い私が死ねば、すぐに母上に知らせが行くようになっている。

まあ、どちらかと言えば、一族の皆さんに知らせられることになる

んですけど。

——忌み子の死は、ある種の安心感をもたらす。

誰だって不安因子が消滅すれば安心できるというもの。小さい子供のお使いには車が通らないところを。受験の際には、出来る限り弱点を克服しようとすることを。つまりはそういうこと。

とにかく、私の死の知らせが母上に届けば、きっと母上はすぐはこちらに来てくださるだろう。

そうすれば、確実に真琴さんたちだけは助かる。

だから、それまでに真琴さんたちが殺されてしまったては意味がない。

……しょうがないですね。真琴さんたちには、しばらくの間意識を失ってて貰った方がいいのかも知れませんが。

更に霊力を手の平に込める。そして、新たに術を織り込み始める。織り込む術は加護の術。外敵から中の者を護る術。

あまりこういった系統は得意ではないとはいえ、今はそんなことを言っている暇はないのも事実。

加護の術の強度は、霊力の強さはもちろんのこと、中の者を護りたいと思う想いの強さにも比例する。だから、自分ひとりの場合に使うときよりも、ほかに誰かがいるときの方が、強度も強くなる。もつとも、この場合は術者は外にいますけど。

幸い術者が死んでしまっても、加護が破られるか、しかるべき過程を行わなくては術は解けることはない。

だから私も安心してこの術を使うことが出来る。

ただ、幾つか不安が残ってしまう。それは、術者が内側から術をかけるのと、外界から術をかけるのとはその難易度は大きく違うということ。また、この距離に加え、まずは相手の糸人形をいったいも余さず吹き飛ばさなくてはならないということ。そしてそれが成功しても、母上がこちらに到着するまでの間、加護の強度が持つか

どうかという不安も残る。

けれど、今の私にはこれしかない。失敗は決して許されない。それでも、やるしかない。

私は、また新たにより強力に靈力を右手の手の平に練りこんだ。

「無駄な抵抗よ」

「うぐっ！」

私の右腕に女の人の足が勢いよく落ちた。廊下と足に挟まれ、鈍い音と痛みが走る。一瞬、溜めていた靈力が手の平から離れそうになる。

女の人は、私の右腕を踏みつけた足を踏みつけたまま捻るように強く動かした。

「ぐっ、あっ……！」

鋭い痛みが私の右腕を侵食していく。その足を退かそうにも体に力が入らない。

腕の皮膚が破け、血が出てきた。

それでも私は、靈力を絶やさず、変わらず真琴さんたちがいる方向へと狙いを定め続けた。

「ふん」

そう鼻で軽く嗤うと、女の人は私の腕から足を退けた。

しかし、それも一瞬のこと。次の瞬間、最初とは比べ物にならないほどの速さと強さをもって、再び私の腕へと足を落とした。

それは、さながら遙か頭上から鋼鉄を落とされたようで、一切の躊躇もなかった。

「――――！！」

バキッ！！ という私の右腕から発せられた鈍い音が、辺りに響き渡る。

私は声にならない悲鳴をあげた。

「ああああっ、ああ――――」

熱い。右腕すべてから高温が発せられている。

これまで以上の激痛に、もはや声すらまともではいられない。

――――やられた……

そう私が認識するまでに、大した時間はかからなかった。

右腕の肘から手首にかけてある骨が完全に砕けていた。もはや使い物にすらならないだろう。

かろうじて靈力を留めていられるのは、靈力の流れは腕自体とは少し違う箇所を流れているから。

けれど、いくら靈力を手放さなかったとはいえ、指一本すら動かせない。

腕は高温を持ち、痛みはすでに腕全体の感覚をすべて麻痺させてしまった。ただ、いつまでも決して和らぐことない痛みが駆けずり回る。

女の人のいかにも愉^{たの}しそうな嗤い声が聞こえたきた。そして、聞こえたことと思うと、また砕いた私の腕の上で足を捻る。

捻る。捻る。捻る。

ごり、じより、と右腕の骨が鳴っているのが聞こえ、腕の前が力なく左右に動く。

あまりの痛みに、悲鳴もあげることが出来ない。やけに熱い腕の熱と、身を貫くような鋭い痛みが、脳を侵食していく。

脳が上手く働かない。なにも考えられなくなってきた。

そんな私を見て、女の人は嗤う。愉快そうに、愉しそうに、私を見下すように、嘲笑うかのように。嗤い声は、次第に甲高くなってきた。それに比例するように、腕を踏みつける足の速度と強さが上がる。

ただ、嗤う。嗤う。嗤う。嗤う。

なす術もなく、私はひたすらその痛みに耐えるしかなかった。

しばらくして、嗤い声が止んだ。同時に、ぴたりと動かしていた足を止めて、腕から退けた。そして、今度は髪を無造作に掴まれる感じがした。

ぐいつ、と強く上へと引っ張られ、私は強制的に立ち上がらされる。

……だめだ。完全に体が言う事を聞いてくれない。攻撃を防ぐ事も手を振り払う事も、ましてやまともに動くことすらできない。これでは、足止めはおろか、時間稼ぎにもなれやしない。

頭は既に朦朧としており、右腕をだらりと下げて、女の人の左手にぶら下がるようになっていた私は、力なく女の人を見上げた。

「もう終わりか？」

女の人は冷たくそう私に言った。そこには温かみなんていう、そんな中途半端なものがない、獲物を狩る捕食者の冷たさがあった。戸惑いも躊躇も一切存在していない。狩る側と狩られる側。そんなこの場においての絶対なる関係があった。

ぐったりとした私を一瞥すると、女の人は私を嘲笑いながら口を開いた。

「所詮、そちはこの程度だったという事か。……まあよい。久方ぶりの目覚めには、良い余興であった」

そう言って、もう一度嗤うと、また強く私の髪を女の手前へと引っ張った。

自然、私は引きずられるように頭から女の人左脇腹へと動いた。そして、力なく引きづられた私の体がまた少し宙に浮いた。

「がはっ！」

槍のような鋭い膝蹴りが、腹部を貫く。呼吸は強制的に活動を止められ、肺からすべての息が零れ、また紅い血が口から体外へと吐き出される。

女の人が左手を離れたことによって、私は後ろに数歩後ずさる。

……息ができない。喉は詰まり、空気がいっこうに肺へと送られてこない。

足が竦む。もはや、立っているのがやっとという状況だ。

私は、そのままふらふらと後ろへ数歩下がり、今しがた後頭部をぶつけられた渡り廊下の壁に背を預ける。

荒い息のまま、私は女の人を睨む。

このままではいけない。このままにも出来ず、ただただやられるだけなんて、ごめんだった。それだけは決して許されない。

そう、今にも地面へと伏してしまいそうになる自身の体に渴を入れる。

……どうにかして、このいけない旗色を変えなければ。私は、私の役割を果たすんだ。

今の自分を確認する。

右腕の骨は砕かれてしまい、この場においてまともに機能しない。脳は脳震盪を起こし、頭がふらつき、足が笑い、目が霞んでいる。

最悪だった。最悪の状況だった。これでは、まともに戦えない。足止めにすらならない。

だめだ。絶対にこの人を足止めして、母上がこちらに参られる間、真琴さんたちに安全な場所を与えなければならぬ。――――たと

え、この場で私が死のうとも。

死ぬ覚悟は、今夜以前のとうの昔から出来ている。いつ何時この身が滅ぼうとも、それだけの覚悟はしている。今夜だって、決意を新たにこの場へと赴いたのだ。それにすぐ側には、私が護りたい人がいる。その人のためならば、たとえもうその姿を垣間見る事ができなくとも、私は私のこの鼓動が消えるまで戦える。

私は、左手を力の限り握り締める。

右の手の平には、かなりの量の霊力を練りこんだ強力な霊力の塊がある。しかし、腕の骨を砕かれまともに右腕が動かせない。第一、動かせたとしても、これは真琴さんたちを護るために練りこんだもの。今使ってしまうば、これと同じ密度と質量を持つ塊は生み出すことは、とてつもなく困難だ。だから、今は使うことが出来ない。使えない。

なら、と私は左手で手刀を作ると、その周りに鋭い霊力を纏わせた。幸い左手はほぼ無傷。霊力の鋭さも申し分ない。左手は今、さながらカミソリのような刃へとその姿を代えた。

「——くっそおおお!!」

私は雄叫びを上げながら、足を一步踏み出し距離を縮めると、左手を女の人の腹部へと衝き立てた。

しかし、私の手が女の人の腹部へ衝きたてるより遥かに速く、女の人の右手が私の顔面を掴む。

「遅いな」

そして、そのままの勢いを保ったまま、女の方は私の頭を迷いなく渡り廊下の横の壁へと打ち付けた。

ダン、という壁に固いものをぶつけた鈍い音が広がる。後頭部を強く打ち付けられ、脳が激しく揺さぶられる。

もう立ってられない。目の前が暗くなってきた。

不意に遠くから悲鳴が聞こえてきた。私の名を呼ぶ、真琴さんの声だ。その声は、とても悲痛で、今にも泣いてしまいそうだった。

そう、霞みゆく意識の中、私はぼんやりと思った。

私は私を見て嗤う女の人が視界に映った。

……ダメだ。今、意識を失うわけにはいかない。まだ、死ぬわけにはいかない。私はまだ、何もしていない。

そんな自分に激しい怒りを感じる。

けれど、その意識さえも黒く濁り、だんだんと薄れていく。体は、まるで自分のものではないかのように重い。

……………くっ……………そ……………

それを最後に意識が暗い闇へと飲み込まれ、壁を伝い地面に崩れ落ちた。

第20話 狩るモノ 狩られるモノ（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました!!

なんだかんだと、ようやく20話まで来る事が出来ました。地味に感動しております。嬉しいです。でも、まだ続きます。あと、どのくらい話が続くか分かりませんが。

さて、今回からまた新たな展開が始まります。数字的にも区切りがいいかな、なんて思ってみたりもします。残念な事に、またしばらくコメディではなくってしまいますが……

あと、最後にお詫びとお知らせです。

実は、また更新が遅くなる可能性大です。

理由としては、近々夏休みということもあり、ほぼ一日中塾の中に缶詰になるからです。そして、それに加えまた調子にのって「異界アルバム」という企画に参加表明いたしました。出来る限り、こちらの更新も頑張っていこうと思っておりますので、どうかまた気長にお待ちしていただけると嬉しいです。

更新が遅くなる事になり、大変申し訳ありません。

次回の更新は、八月中を目標としていますが、ひょっとしたら九月になってしまうかもしれません。が、それでも出来るだけ早く更新しようと思います。

それでは、次回もどうぞよろしくお願いします。

第21話 後悔

自分という存在が、この場において如何なる存在なのかは、わかっていた。

……わかっていて、ただその現実から目を逸らしていたんだ



「ヒカリーー!!」

叫んだ。無駄だと知りながらも、叫ばずにはいられなかった。後頭部を打ちつけられたヒカリの体が壁を伝って地面に倒れる。倒れたヒカリは、糸の切れた操り人形のようにぴくりとも動かない。

「仕舞か」

ヒカリを見下ろしながら、ヒカリを倒したあの女が、倒した喜びも感じられない、背筋の凍るような声で、同じように戦慄を覚えるような冷笑で呟いた。

唇を噛み締める。

ただただ悔しかった。何も出来ない自分が。ただヒカリが倒され

る姿を眺めるだけの自分が。

どうしようもなく憎かった。悔しくて、憎くって、情けなかった。本当は、初めからわかっていたんだ。

今、この場にいる私が、どうしようもないほどに場違いだってことを。

気付いていた。でも、認めたくなかった。信じたくなかった。だから、目を瞑った。

この現実を視たなくて。知りなければ、直視しなければ、それですべて済むと、愚かにも私は思ってしまった。いや、そう思い込もうとした。

私だってバカじゃない。ちゃんと現実はわかっていた。この場で、無様に取り押さえられている私は、無力で、そして無用なんだってこと。私が、どうしようもないほどヒカリの重荷になっているってこと。足手まといだったこと。

本当は、すべて初めから理解していた。でも、認めたくなかった。それは、ただの意地でしかない。どうしようもなく、手に負えないおバカな見栄だ。

そして、その結果がこうだ。愚かな虚勢を張ったがためにヒカリは沈むこととなってしまったのだ。

どれもこれもすべて、この私のせい。

「ヒカリーー!!」

倒れたヒカリは、ぴくりとも動かない。

それでも私は彼の名前を叫んだ。

意味はない。ただ涙を堪えて、喉を引きつらせながら叫んだ。ひよつとしたら、私の呼び声でヒカリが目を覚ますとでも夢見たのかも知れない。どうせ、彼の名前を叫んだところで、目を覚ますはずがないっていうのに。

今一度、上に乗っかる糸クズどもを退かそうと身じろいでみるも、

べつとりとした粘着性の糸からは逃れようもなかった。

隣を見る。そこには、一人の白髪の中学生ぐらいの背格好の女の子が、私と同じように取り押さえられていた。最初、あんなにも恐かったお化けの少女が、同じようになす術もなく。

———同じ？ まさか。全然違う。

彼女は、苦しんでいる。顔は苦悶の表情を浮かべ、押しつぶされてる。それこそ、抵抗するすきがないほどに。

“私が知らないものを感じている”。

彼女は、抵抗しないのではない。できないでいるのだ。

そして、彼女は恐れている。寒さに凍えるほど、歯を打ち鳴らして。

あの不気味な女に。

———私の知らない『ナニカ』に。

私は、ソレを、知らない。

空気が違うのは、わかる。こうしている間も、息が詰まるほどの張り裂けそうな緊張感が、辺りを満たしているのは、わかる。

それは例えるなら、姿が見えない正体のわからないダレカに冷たい鋭利な刃物を背中にあてがわれているような感覚。

一步どころか、下手に動こうものならたちまちにして降り注ぐ、死という一文字。

素直に、恐い。

果たして私はこれほどまでに死と隣り合わせの場所にいたことがあるのだろうか。考えるまでもない。答えは『否』。

普通ならこの恐怖の前に考える事すらままならず、立ち竦むしか術がないだろう。これが、“私に向けられた殺意ならば”間違いない、私は動けない。逃げようという、考えすら思い浮かばないに違いない。

今私がこうしていられるのは、その殺意の行く先がヒカリであったことと、そして、行く先だったヒカリが倒れたことによりそれが軽減されたからだ。

少なくとも、さっきまで私は何一つ考えが浮かばなかった。ただ、傷ついていくヒカリの名前を呼ぶ事しか出来なかった。

改めて思う。ヒカリと私の違いを。

いったい、彼はどうして平気なのだろうか。何故、動け、そしてあれほどまでに戦う事が出来るのだろうか。

“住んでいる世界の違い”なのだろうか。

あんなにも、他の誰よりも自分に近いと感じていた人が、今は他の誰よりも遥か向こうで霞んで見える。

そう思うと、なんだか無性に笑いがこみ上げてきた。バカじゃないの。

私は自嘲的な笑みを浮かべた。

彼が私と同じと、何故そう言えたのだろうか。呆れを通り越して、十分笑える。

こんな私はまるで、お調子者のチョウチョみたい。

自分の華やかさに溺れ、ひらひらと舞い踊るチョウ。互いの煌びやかさを見せ合うかのように、花の周りで踊りまわり、疲れたら花の蜜で優雅にお茶をする。

そんなチョウはいつしか自らを過信するようになるのだ。

———自分に勝るものはない、と。自分が通れば、回りは皆自分に見惚れ道を開ける、と。

そして、いつしかそんな雅やかなチョウチョは、蜘蛛の糸に捕らえられる。自らを過信しすぎて、前方を確認しなかった報いだ。

それから初めて自分の愚かさに気付く。しかし、その時は既に遅い。

前を見れば、一匹の自分よりもはるかに劣る醜い蜘蛛と目が合う。どんなに逃げようとしても、体中に粘着性の糸が、決して逃す事を許さない。

そして、蜘蛛がゆっくりとやってくるのだ。

目と鼻先に来た蜘蛛の、自分を食料としか見ていない瞳に恐怖におののく自らの姿を映しながら、チョウは捕食される。

私は、そんなおバカなチヨウ。最後まで、“踊っている”のではなく“踊らされている”ことに気がつかない、救いようのない、愚か者だ。

「ヒカリ！ お願いだから、目を覚まして！」

それから私を助けてよ。

都合の良いことばかりを言ってるのはわかってる。とんでもないわがママを言っているってことも。あなたが、お願いされれば決して断れないのも。

でも、あなたは私を助けてくれる、って約束してくれた。なら、さっさと起き上がって、あの女を完膚なきまでに叩きのめして、それから私を下手くそなナイト気取って助けなさいよ。

「……お願い」

———私はこんなにも弱い。

「他愛もない」

いつの間にかあの女が私を見つめていた。その顔には、相変わらず冷笑が浮かんでいたが、その目は幾分好奇心な眼差しを含んでいた。

「ようやく己の無用さに気付いたか。愚かな虫ケラよ」

女は、もはやヒカリなど興味の対象ではなく、ゆったりとした歩調で私のもとへ歩みを進める。

その姿を私は眺める事しかない。

おバカなチヨウチヨと自分が重なる。

——罨に掛かった獲物に、蜘蛛は決して焦らない。

それが絶対だと知っているからだ。

女はそのまま歩みを進め、私の目の前までやってくると肩膝を折り、私の顎をその真っ白な片手で自身の目線の高さまで持ち上げた。女と私の視線が重なる。女の綺麗な貌かおが目のある。月明かりしかないこの空間に、僅かな光にその肌が反射し、ぼんやりとほのめく。その白は、とても綺麗で、羨ましいと思えなくもないけど、どこか異様に見える。それは、まるで美しく艶耀えんようなまでの磨かれた骨の白。あまりの気持ち悪さに吐き気がする。

それでも、それを堪えてありったけの敵意を込めて、私は女を睨んだ。

そんな私を見て、女が、ほう、と感嘆にも似た表情を浮かべニタリと笑った。

「力の源を倒されてなお、そんな目を我に向けるか。否、倒し足りなかった、と云うべきか」

ニタリという気持ちの悪い笑みを崩さずに、女がなにやら納得したような声で呟いた。

私はそれを聞きながらも、齒を食いしばって女を睨んだ。どうする事も、何も、私にはただ女を睨むしか出来ない。それでも、口を開けば吐きそうになるのを押さえつつ、搾り出すように、口を開いた。

「どういう意味よ、それ」

私のその問いかけに満足そうに女は頷いた。

「虫ケラ。そちは世の理ことわりを知っておるか？」

そして女は、また、嗤った。

第21話 後悔（後書き）

もはや『謝る』という言葉さえ口にすことさえも許されない気がしないでもないです。

でも、でも、

本当に申し訳ありませんでした！！

し、しかも終わりは中途半端にも程があるー？

ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンナサイ……

ええと、ですね。実はですね。この度、なぜこんなにも遅れてしまったのかといえますとですね。

実は、いっちょまえにもスランプに陥ってしまって、本当に何も書けなくなってしまったのです。

また、それに重なり、大学受験という大きな壁がそろそろ見え隠れしてきて、勉強でてんてこまいでした。今後これからまともに書けなくなってしまうのようになってしまう可能性も大です。

ですので、正直書くのをしばらくやめようかとも思いました。

でも、毎日のように覗いてくださる人がいて。まったく更新していなかったのにも百五十人以上の方が来てくださって。

『このままじゃだめだ！』

と思いました。だから、僕はまたなんとかスランプから回復しつつあります。

どれもこれもすべて、皆様のおかげです。

心よりお礼申し上げます。

それとは別にもう一点。

実は僕、ブログを始めました。

理由としましては、やはりどうしても更新が遅れてしまいますので、その代りに少しでもなればいいかな、と思ったからです。あとは、本気で前々からしたかったから、というのもあるのですが（笑）

よろしければお越しになってください。PCからでもケータイからでも大丈夫です。

タイトルは『鳥籠の空模様』

僕の作者ページのHOMEをクリックすればつながるようにしました。是非ともお越しくください。

それでは、これからもこのように普通に遅くなると思いますが、片隅にでも覚えてくだされば僕はうれしいです。

ずっと、完結までは書ききりますので、今後ともどうぞよろしくお願ひします。

第22話 両儀（前書き）

それは、ほんの戯れで……

第22話 両儀

何を言ってるの？

私は思わず怪訝な顔する。『世の理』だなんて、何を突然おかしな事をと思わずにはいけない。

そんな私の心情を読み取ったのか、女は口の端を釣り上げながら僅かに目を細め、す、と顔を寄せてきた。

「世の理は幾つも存在する。だが、今我が問う世の理とは、つまりは『両儀^{りようぎ}』のことだ」

今度こそ、本当に何を言っているのかわからなくなった。

両儀、なんていう言葉は初めて聞いた。意味がわからない。この女は、本当に何を言っているのだろう。

しかし、困惑する私を他所に女はまた口を開いた。

「『両儀』とはつまり、陰と陽。表と裏。天と地。これを指す。つまり、相反する対極のものだ。しかし、相反する、と言っても、互いに互いが存在しえなければ存在がないものでもある。わかるか？ 光があるから闇がある。闇があるから光がある。光がないところに闇はなく、闇がないところに光は存在はありえない。決して相容れることのない両者の存在。しかし、どちらか片方が存在してなければ、もう片方の存在が失われられる儚き関係。葉に表があれば、必ず裏があるように、天があれば必ずや地が存在する。決して相容れず、また共存していなければならぬ。そんな関係。これが『両儀』だ」

表があるから裏があり、陽が照る場所があるから影が生まれる。もっと言えば、外があるから内があり、悪が存在するから正義が存

在する。決して、相容れないものであるにも関わらず、互いに互いが存在していなければその存在は存在はありえない。対極ながらも、一体なる存在。―――それこそが『両儀』。

この女が言っているのは、こういう意味だろうか。

そう言われれば、納得せざるを得ない。

私たちが普段明ると感じるのは、暗闇を知っているからで、もし仮に暗闇を知らなければ、決して明るさなど知る由もないはずだ。夜を知らなければ、昼間を知ることはない。

しかし、それが今どう重要なことなのだろうか。

女は続ける。

「では、例えば『力』とは何か。それは『強さ』と『弱さ』のことに他ならない。強者があるから弱者が生まれ、強者は、下に弱者があるからこそ強者でいられる。そして、その『強さ』とは、また『弱さ』そのものである。ちょうど表裏が入れ替わるように、他方ではそれが『強さ』であろうと、もう他方ではそれは『弱さ』と成りうるのだ」

「……だから。それが、なんだって言うのよ」

私はなんとか言葉を搾り出す。それに女は、小ばかにしたように鼻で笑った。

「わからぬか、この意味が。この『力』とは、我とそちら二人の関係を指しておる」

「何を、言ってるの？」

「ふん。そちなど、所詮はその程度か。まあよい。教えてもよからう。我からそちらへの褒美と思え」

そんなものいらぬ。反吐が出る。

本当はそう言ってやりたかった。けど……それは出来ない。今は

まだ。

私は、何も知らない。この女も、女が言わんとしていることも――ヒカリの事も。まだ、何も知らない。

それに、聞いておくに越した事ないと思う。だって、こういう場合、大抵が逆転の発想へと変わると思うから。少なくとも、情報が大いに越した事はないに決まってる。

ヒカリの顔がよぎる。

……本当は、今からこの女が言う事は、ヒカリが聞いていたほうがいいのかもしれない。でも、彼は今、気絶しているから当然聞かえないだろう。

だから、仕方ないじゃない。私以外にこの女の話聞ける人材はいないんだから。

聞いて、覚えて、そしてあなたが目を覚ましたときに残らず聞かせてあげる。

今の私には、それしか出来ないけど、それでもこれが出来るのも私しかいないんだから。

――だから、さっさと目を覚まさないよ。私は、あなたが私をきつと助けてくれるって信じているんだから。それまで、私になんとか持たせてみせる。――待ってるからね、ヒカリ。

「虫ケラ。何故そちらは我に屈していると思う」

女は、未だ私の顎を持ち上げ目線を合わせながら、私にそう問うてきた。

それに私は奥歯を噛み締めながら皮肉を返す。

「そんなのあなたが一番わかっているんじゃないの？」

「我はそちに問うておる。答えよ」

「――ッ！」

その瞬間、また空気が変わった。顎に置かれた手に力がこもるのがわかる。

私は女から発せられる威圧感に押しつぶされながらも、でもこれだけは私が認めるわけにはいかないのです、ひたすらに耐えた。しばらくして、ふ、と威圧感が弱まった。

「我があやつより、『強者』であつたからであると思つておるのか？」

「——ッ！ そんなわけじゃない！」
「凶星、か」

反論に勢いを出せなかった。悔しさに言葉を吞む。

「よく聞け、虫ケラ。確かに結果は我があやつよりも『強者』であつたがために、あやつが地に伏し、我がこうして地に足をつけておる。だが、それは所詮一つの結果でしかない。良いか。“それは一方では正しく、また他方では誤りである”のだ」

「……どういう意味よ、それ」
「世とは須く茶番だと云う事よ」

含みのある艶やかな表情で女は嘲笑つた。

正直、いい加減うんざりしてきた。結局のところ、この女は何が言いたいのだよ。

私は眉をあからさまに顰める。

「だから？」

「我はあやつより、ある一点において遙かに劣ると云う事よ。……虫ケラ。そちにはこれが何か解せるか？」

相変わらず、鋭い眼を光らせつつ艶笑を浮かべている。

しかし、私は自身が目を大きく見開いていくのを感じずにはいられなかった。

そんな私を面白そうに女は眺めていたけれど、それも今は興味がなかった。

急ピッチに頭が回転しだす。

「解らずとも良い。それに、我はそちがそれに気付こうが気付くまいがどちらでも良い。興味はない。だが、我はあやつのその一点には決して敵わぬと云う事に変わりはない。そこに、そちらが我に敵うか否かは別の話ではあることは確かだがな。しかし、それでも我はそれに恐怖した事に違いない事も、また確かな事である」

私はまた驚きで目を見開く。

この女がヒカリを恐れた？

それはまったく信じられない事だった。思わず、自身の耳を疑いなくなる。私の目からは、そんな素振りは皆無だったのに……

「故に、我は策を練り、如何なる場合にも備え先手を打つ事に決めたのだ」

どう転ぶか初めからわかっていたがな、と女は艶笑を崩さずに呟き続ける。

「結果、我はこうして地に足をつけておる」

そして、また憎らしい表情でどこか冷ややかにそう告げてきた。蜘蛛のようだ。普通にそう感じた。聞いた限り、そのまま蜘蛛そのものとは思えない。

つまり、この女は蜘蛛のように糸を張り巡らし、そしてその上であんなにもあっさりと自らを私たちに晒してしたんだ。……いいえ。

ひよっとしたら、ああやって姿を晒すことによって、また糸を広げていた可能性もある。

—————してやられた……！

なによ。それじゃ、私たちは初めからこの女の糸で操られていた人形じゃない。私たちがこうして成すがまま地に伏せるままなのは、実力の差じゃなかった。それ以前の、そして誰かと競うのであれば絶対に必要不可欠なものが欠けていたらなんだ。

もっと早く気づくべきだった。

策を練り、ちょうど将棋のように一手一手確実に玉を追いつめてきたこの女と、取られまいとただ応戦していただけの私たち。どう考えても、相手が常に私たちよりも優位の立場にいたのは火の目を見るよりも明らかじゃない。

私は、ここに来て再びはつとする。

私たちは、いや、私は本当に救いようのないバカだ。實力云々ではない、大切なことを、敵と戦う上で忘れてはならないことを失念していたんだ。

それは、相手の裏をかく思考の追求。相手の出方を予想し、それに対処するための対策の練り。

ただ考えなしで突入するなんて、死に行くようなもの。自殺志望者とまるで大差がない。究極に愚かしい行為だ。

しかし、おそらくその原因を作ったのは——私なんでしょうね。

本当に情けなくて、辛くって、最低。どうしようもない、本当に私はなんてことをしてしまったのだろう。泣き出したくなる。喚き出したくなる。自分で自分を殺してしまいたい。心底、私は私が憎い。いっそ、この世から私という存在をなくしてしまいたい。

あの時——

あの時、私が母さんの放送に興味を持たなかったら？

あの時、ヒカリと母さんの話を盗み聞きしなかったら？

あの時、ヒカリと共に行こうと考えなかったら？

あの時、向かうヒカリを力ずくで止めて、何ヶ月も病院内に閉じ

……本当に、何をしてんだろう、私は。

「良いぞ。なかなか傑作だ。そちは虫ケラの分際にも関わらず、比較的“強かった”からな。もうしばしの間、持つかと思っておったが、まあ良からう。そちは虫ケラの中でもそれなりに優秀なのだろう。なかなか飲み込みが早いらしいな」

微笑をたたえ、ネズミをいたぶるネコの目つきで女は私を見つめてくる。

——蜘蛛は、罠に掛かった獲物を前に焦ることはしない。それが何よりも、絶対なのだ知っているからだ。

私はこれ以上女のその視線に耐えられず、顎に当てられたその手を振りほどいた。唇を噛み締めることしか、今はできなかった。

「——まだ壊れてくれるな、虫ケラ」

そのとき、信じられないことが起きた。私を地に縛り付けていた糸が、嘘のように細切れとなり、幾千にも及ぶ銀の線へと姿を変えた。

今の今まで感じていた圧迫感が急に消え失せ、突然のあまりのため、私は逃げることもせず、呆然と息を吞む。

——何が……

しかし、これ以上の思考をする猶予は与えられなかった。

不意に、そして私はまるで操り人形のように上と持ち上げられる。抗う余地はない。先ほど細切れにされたはずの銀の線が、まるで再び意志を得たかのように私を引っ張り上げていたのだ。

そして、愚かなチョウは、ついに完全なる蜘蛛の糸に捕らわれた。左右に、まるで十字架に縛り上げられているかのように両手を捕

らわれ、動こうにも粘着質な糸からはまったくと言って良いほど動けない。まるで、剥製のような装飾だ。

女の手が再び顎にあてがわれる。その手は、ひどく冷たい。

——女の瞳が、狂喜に、歓喜に、凶悪にきらめくのを私は見逃さなかった。どこまでも冷たく昏い、しかし何よりも凍てつき燃え上がる蒼き瞳。

井戸の底のように昏く、深海に沈む氷河のように冷たく、ぞっとするほど確かな——殺戮の蒼。

息が詰まる。自然、息は荒くなったが、しかしまるで呼吸そのものを忘れたかのように酸素が供給されていない。

自分でも、何が起きているのかさっぱり分からない。脳がまったくと言っていいほどついてきていない。

思考が完全に活動を停止し、身体は氷水に浸かっているかのように凍てつき震え、もう、とてもじゃないけど動けないし、わからない。時間も、場所も、私という存在も、ひどく曖昧でわからなくなってしまった。

けれど。

けれど、たった一つ解ったことがある。終わりを告げる、無常なる警鐘が、まるで始まりがあったかのように鳴り響いていた。

背筋から冷汗が垂れ、女から目を離せない。瞬きさえ、もう忘れてしまった。

女の掌が、愛おしい物を愛でるかのように、優しく私の頬を撫でた。

「久しい……、実に久しい……」

女はほくそ笑む。

「そちは久々に楽しめた。我も血が騒ぐ。力が足りぬ。命が欲しい。欲しい、欲しい、欲しい、欲しい。懐かしいな……。奴らは駄目で

あった。もろすぎて、血が騒がなんだ。だが、そちは良い。実に良い。何も力を持たぬ虫ケラ風情にしておくには、実にもったいない存在だ。愉たのしいぞ。嬉しいぞ。血が騒ぐ。そちを壊せと、我が心が渴望しておる。震えよ。喚け。泣き叫べ。気丈なるその心。壊れてこそ、さぞ美しかろう。我を感じさせてくれ、虫ケラ。我は。我は。我は。我は———そちが欲しい」

女の眼は、とても空ろで、臃めげで、それでいて確かで、それは人間の瞳ではなくて、でも確かに人の目で、猛獣のように渴望していた。

女はほほ笑む。

そのまま、女は私をまるで大切な壊れ物を扱うかの如く、愛で続ける。

ただただ怖かった。どうしようもなく、恐かった。

助けてくれる人は——いない。

捕らえられた獲物わたしは、生きるも死ぬも、それはすべて蜘蛛おんなの意のまま思うがまま。

女の透き通るように白く、美しい貌かおが、近づいてくる。ざらり。

「ひッ——」

声が洩れる。その声は、情けないほど弱弱しくか細かった。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

首筋を這う、そのおどましいほど冷たく艶めかしい感触。ざらついた、獲物を愉しむかのような、それでいて愛でているのような舌が、私の首筋を汚す。

身動きができなかった。頭が真っ白になって、何も考えられなくなった。

「————まだ壊れてくれるな」

吐息がかかる距離で、女は再びそうそつと囁く。全身を駆け回る悪寒と、そして吐き気。

女は私から離れた。

「御愉しみはこれからぞ、虫ケラ」

そして艶笑。

月の影を背後に控えさせたその姿は、とても形容できないほどに美しかった。

第22話 両儀（後書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございます。
ほんつつつとにひっさびさの更新ですみませんでした。なに
しとんねん、て話ですよ。ごめんなさい。

でも、ここで愚痴るのは間違いかもしいのですが、今回の話は
一度消えているのです。すべてではなかったのですが、2時間く
らいかけて書いたやつが、パアになったのです。

さすがにその時は泣きました。本気で泣きそうになりました。

これまで三度ほど体験しているのですが、こればかりはこたえま
すね。三回もやって、我ながらバカだとは思いますが、もう三度目
の正直ということで勘弁して欲しいッス。もう次来たら何か立ち直
れないような気がするので、マジで勘弁して欲しいッス。
うん、気をつけよう。

愚痴はさておき。

私、灯月公夜はここに一つ宣言します。

この物語は三月中に完結させます！！

なんと言いますか、決意表明みたいなものです。でも、皆さまもご
存じのとおり、僕は基本「有言無実行」という最低な奴なので、絶
対とは言い切れないのですが、それでもその覚悟の元三月中に完結
させます。

というのも、ちゃんと進級できれば（ここ大事）僕は新学期から高
校三年に上がります。つまり、ザ☆受験生に突入です。

ですので、これからはからおそらく今以上に書く暇はないかと。少

なくとも、連載は不可能になります。

なので、三月中、新学期が始まる前に今作を完結させるつもりです。させてみせます。絶対。いやきつと！（こら

そんなこんなで、残りの二月はテストのため更新できませんが（ちなみに現在一週間前だった中）、三月に入ったら、出来たら三日に一話の割合で更新したいと思っています。

完結できるよう、ささやかでも構いませんので応援のほどをよろしくお願いします。

また、僕が進級できるように願ってもらえとなお嬉しいです。というか、そっちの方でガンガン応援してほしいッス（おい冗談はともかく（冗談じゃないけど）、とりあえず今度こそは『有言実行』にさせてみせます。ご期待のほどをどうぞよろしく願いいたします。

そんなこんなで、恒例のくそ長い後書きもそろそろ切り上げようかと思えます。

あ、最後に一つだけ。

前回の冒頭に入れたモノを、今回は前書きに入れてみたのですが、皆様にとってはどちらの方が見やすいでしょうか？

できればご意見のほどを頂戴したく存じます。

ではでは、今回はこの辺で。

ここまで目を通してくださり、本当にありがとうございました！

第23話 紅き舞台の開幕（前書き）

踊る踊る、壊れし人形
舞う舞う、白銀の雨雫

ひらりひらり、風は流れ

操られし人形は、術者の手のうちで踊り狂う

踊り、踊らされ

みなすべては、糸の導くがまま

——ああ、鮮血舞う、月夜よ

誰が、それを視^しっていた……

第23話 紅き舞台の開幕

何が起こったのか、どうなってしまったのか、よくわからなかった。今日の前の出来事が、まるで陳腐な三流映画を流し観しているみたいに流れてゆく。理解できない。何が起こり、どうなってしまったのか、全然頭に入ってこない。

けれど、目からは淡々と涙が溢れ出てきて、止まらない。

鈍い音。狂色な嘲笑。宙をまるで白鳥のように舞い踊り、紅い花が咲き誇る。その光景すべてが、月光にきらめき、病的なまでに美しく栄える。

そして、優雅に刹那宙を舞っていた白鳥は、羽根を無くし、地面へと帰る。鈍い落下音。

もう声が出なかった。何も考えられなかった。ただ、啞然と、そして呆然と、私はとめどなく、しかしあまりに淡々と流れ出る頬を伝わる涙しか流せなかった。

力を亡くした、人形が踊る。

月光をスポットライトに、私以外の観客のない、さびしく、そしてどこまでも残酷な人形劇。

人形が、また人形遣いの手により、紅い汗を^{ほとばし}りながら宙を舞う。目を背けたくなるような光景。残虐極まりない、卑劣な舞台。

こんなの——もうこんなの見てられない。見たくない。だからもう、お願い。こんなの——

「……や……めて……」

もうこんなのやめて。見たくない。お願いだから、これ以上彼を痛めつけるのはやめてよ！

意志とは関係なく、はらはらと涙が頬を伝う。無力な私には、それしか——たったそれだけしかできない。

本当は叫びたいのに——声は枯れ果て出てはこない。泣き叫びたいのに——のどが詰まり、まともに声さえ発せられない。女は、にやりと厭^{いや}らしく、背筋が凍るような笑みを私に向ける。——気持ち悪い。女が、その手で人形を掴み、私の足元へ蹴り転がす。

「————ッ！」

ズタズタに切り裂かれた衣服。ぼろぼろの、ところどころ鮮血で紅く染まっている身体。

彼は、もはやこと切れた人形のように、微動だにしなかった。今の今まで、つい数分前まであんなにも元気だった、彼はもう——動かず、ただそこに“あった”。

「——安心せよ。こやつはまだ死んではおらぬ」

何時来たのだろうか。女はヒカリの髪を無造作につかむと、持ちあげた。

ヒカリの、陰になった顔が私の目の前に、まるで見せつけられるかのように掲げられる。

痣だらけで、唇は切れ、血が滲んでいる。

手足を剥製のように縛られた私は、そんな彼から目を逸らしたくなかった。

「——これがあなたの選んだ道……」

誰でもない、私の中の私が、私に語りかけてくる。

こんなはずじゃなかった。こんなことになるなんて、まったく思っていなかった。

「顔をそむけるでない」

女の冷たい手が顎にあてがわれ、無理やりヒカリと視線を合わせられる。その目の端に、実に嬉々とそした女の嘲笑が見えた。

「まだだ。もっともっと、我を感じさせてくれ、虫ケラ」

女は囁くように、そう私に耳打ちした。

始まりは、もう覚えてない。女が、私を見て嗤^{わら}ったまでは覚えてる。私を「壊したい」と囁く声も。

それから、何が起こったのだというのだろう。

女は不意に手をヒカリのいる方へと振りかざすと、突如女の掌から無数の糸の束が生まれ、ヒカリを拘束し、たちまち自らの足元まで無造作に、“まるで物を投げるかのように”引っぱり、頭を踏みつけたのだ。

そして、女は再び私に囁いたのだ。

———これよりそちに最高の宴を見せてやろう……

にやりとほほ笑むその顔に、私は震え、戦慄した。

そして、女はヒカリを無造作に持ち上げると———あの、残虐で一方的な舞台が始まったのだ。

はじめ、女は気を失い動かないヒカリを、女の後方、私の前方へ向かい、殴り飛ばした。

人形のように吹き飛ばされるヒカリ。なんの抵抗もなく、地面にたたきつけられる。と、次の瞬間、女の手が閃き、無数のおびただしい量の糸がヒカリを捕らえ、再び女の手のもとへ引き戻される。そして、女の手元に届くか否やというところで、今度は天井へと蹴りあげら、天井にぶつかり、再び地面へ引き戻され、勢いよく地面に叩きつけられた。———そして、残虐な鮮血舞う舞台は続く。

何が起きているのか全く分からなかった。ただ、自然、私は声を上げ、悲鳴を上げ、動けないもどかしい身体を自ら引きちぎら

んばかりの力で、糸から抜け出そうと暴れ、泣き叫んだ。

そんな私を見て、女はただ嗤った。とてもとてもうれしそうに。まるで無邪気な子供のように。

もちろん、私が悲鳴をあげたからといって、舞台は幕を閉じない。私がいくら泣き叫んだからといって、より舞台は激しくなっていた。

女は舞台の上映中の最中、私に微笑みかけた。

————まだ壊れてくれるな、虫ケラ。我をもっと感じさせてくれ……

ああ、もう何がなんだか分からなくなってきた。次第には、どうして私は気が狂わないのかと、自身に問いかけていた。いっそ気がくるってしまえば、こんなに苦しまずに済むというのに。

けれど、“所詮はその程度で”人は壊れてはくれない。私は、壊れてはくれない。

ましてや、私とヒカリは恋人同士でもなければ、ただの私を唯一私として見てくれた友人だ。そう、所詮は人一倍大切だと感じる友人。そんな人物に、映画やドラマや小説の登場人物のように、私の心は壊れてくれない。——壊れることを許してはくれない。

ああ、なんて、私はバカで愚かなんだろう。

あんなにも必死に私を守ろうとしてくれたヒカリが、これ以上痛めつけられるのを見たくないからといって、一瞬でも『彼と出会わなければ』なんて最低なことを思ってしまった。

糸の切れた人形が、私の目の前で、まるで私を蔑むかのように、責めるように激しく紅い汗をかきながら踊っている。

もう見ていられない。見たくない。涙が止まらない。どんなに叫んでも、泣き叫んでも、誰にも届かない。女の声。嘲笑。狂喜に染まった嗤い声。どうして？ どうしてこんなことになったの？ どうして、私の心は壊れてくれないの？ あのヒカリがこんなにも酷

い目にあっているというのに。私の心は、痛みでもう耐えられないというのに。どうして？　お願い、早く壊れるなら壊れてよ。もうヤダ。見たくない。見ていられない。どうして、こんなことになっってしまったの？　どれもこれも私のせい？　そうよ、ぜんぶぜんぶ私のせい。どうにもならない。どうしようもない。ごめん。ごめんね、ヒカリ。私のせいで、女にこんな目に合わせられて。ごめん。――ごめんなさい。

涙がとめどなくあふれ出てくる。

もうやめて。お願い、もうこれ以上ヒカリを傷つけないで。お願い、もうやめてよ！

「もう、これ以上ヒカリを傷つけないで！」

叫んだ。泣き喚いた。そして、女は心底うれしそうに笑った。

ヒカリの力無い、陰った顔が面前で揺れる。

「言ったであろう。『強さ』と『弱さ』は表裏一体。両儀であると。観よ」

女はヒカリの顔を私の前に翳^{かざ}し嗤う。

「互いに互いが大事だと、戯言をほざいておった貴様らは、こんなにも弱く脆い。どうだ。こやつが観えるか？　そちらは、他方が倒れればこんなにも容易く弱い。ろくに何もできずに、ただ我を見るしかないのだ」

そして、女はそっとぞっとするような笑みでほほ笑む。

「しかし、安心せよ。まだこやつは死んではおらぬ。神寺は非常に頑丈な奴らの集合体であるからな。だが、良く知っておくが良い。『殺す』と『壊す』では根本的に異なるということを」

そう言うのと、女はあいている方の手で、ヒカリの右腕を持ちあげた。先ほど、この女の手により碎かれたヒカリの右腕は、肘から手首にかけて、変な方向に曲がっていた。その掌は、何故か非常にきれいな青い光を帯びていた。

しかし、女はそのヒカリの青い炎を鼻で嗤った。

「ふん。こやつは、それほど己に力がないことを悟ったのか、せめてそちだけでも助けようとおったようだな」

「……どういう……こと……?」

「観よ」

言うや否や、女がその青い炎へ、ヒカリの右腕を持ち上げた手を滑らせ触れた。

次の瞬間、「バチッ!」という激しい音と、火花が散った。女の右の掌から、はじめて紅い血が滴った。その光景に思わず目を見開く。

「どうだ。これは『守護』の術。これには我や、その他の雑魚どもがそちにそう簡単に触れられぬよう、術が成されておるのだ。こやつが、せめてそちだけでも助けようとしたのであろうな」

それを聞いて胸が苦しくなった。目からはさらに涙が溢れ、今は俯き、陰っているためよく見えないヒカリの顔を見る。

言葉にならない想いが、胸の中で溢れる。

「無駄なことを」

——鈍い、“何かを握りつぶすような音”。

音のなる方を慌てて見やると、なんと女が自分の手が大変傷つけられ、血が噴き出しているのにも関わらず、“ヒカリの右の掌を握りつぶしていた”^{おのの}のだ。

その光景に恐れ慄く、私を尻目に、女は口の端を釣り上げた。

「少し話が脇に逸れてしまったが、『壊す』とはすなわちこういうことであるのだ、虫ケラ」

そして、微笑みながら女は私を見つめた。その表情は、まさに自身の欲求と快楽を本能のままに貪る獣のような貌^{かお}だった。

私は、もう、何も考えられなかった。先ほどまで胸に溢れていた想いも遠く彼方へ消えた。

女が、青い炎に焼かれ、傷つき鮮血を噴き出すのも気にせず、ヒカリの手の骨をさらに砕く。

ごり、じより、という、あまり聞く機会のないニンゲンの骨と骨が擦れる音。

そして、目を大きく見開く私を尻目に、次の瞬間、女は無造作に後方にヒカ리를放る。

四方八方、さまざまな方向から、細く艶やかな銀色の糸がヒカリめがけ飛んで行き——ズブツ、ブチャツ、というこれまた聞きなれない音が鳴り響く。

結構に大量な朱く紅い緋色の液体が、上空から滴り落ちてくる。

思わず目を覆いたくなるような光景。

“無数のおびただしい量の糸が、まるで重体患者に繋がれた無機質なチューブのように、ヒカリの身体のと至るところを、決して致命傷にならないように貫いていたのだ”。

本当の操り人形のように、全身を糸で貫かれ、固定されたヒカリ。張り巡らされる、主に手足に繋がる無数の糸から、きれいな緋色

の絵具が、渡り廊下の上に滴り落ちる。

ぴちゃりという水滴音。悦に浸った嗤い声。早鐘のように打ち鳴らされる鼓動。体中の血液が沸騰せんばかりに駆けずり回る音。――頭の中で、何かが弾ける爆裂音。

私は――――もう、何も考えられなかった。

その代り、ただただ私は、このどうにもならない感情を乗せ――

「いやあああああああ！」

叫んだ。

第23話 紅き舞台の開幕（後書き）

なんだこれ……

もう一度言います。

なんだこれっ!!??

前書きも合わせて、

なんだこれええええええっ!!!! (↑うるさい。

なんかもし、どんどん血生臭くなってますね……。ああ、コメディーは何処へ行ってしまうれたのか。書いてるの僕なんですけどorz

つい二日ほど前、ようやく期末テストの野郎をぶちのめして参りました!

これで僕が一教科もぶちのめされてなければ、晴れてザ☆受験生と高校三年生に進級できます。ええ、ぶちのめされてなければ。しかし、あえて僕は宣言しよう。

僕は赤点なんてものを一つもとってはいないっ!!

10日に学校なんで、そんときに赤点の有無が判明します。ちなみに、赤点を危惧して今回のタイトルを付けたわけではないのであしからず（誰もそんなこと思わねーよ。

という訳で、宣言通り更新できました！

今日（6日）は3の倍数なんで、誰が何と言おうと宣言通りっ！

あ、いや、やっぱり3日に更新できなくてすみませんでした！<

とりあえず、次は9日ということで。たぶん更新できるので、どうぞ次もよろしくお願いいたします。

ではでは、ここまで読んでいただきありがとうございます！！

第24話 鈴の音が伝える鼓動（前書き）

——ちりん……

第24話 鈴の音が伝える鼓動



シャリーン、といういくつもの鈴が同時に鳴り響く音。

まるで自分を責めるかのような、それでいて清冽^{せいれつ}で、美しく、背中を後押ししてくれるような力強い鈴の音。

鳴りやまない鈴の重奏。音により、周りが、耳が、そして自分が満たされていく感覚に捕らわれて行く――



私は、放課後を告げる学校のチャイムが聞こえて初めてはっとする。

思わず首をひねる。私は、いったい何をしていたのだろうか？

まるで、夢を視ていた気分だった。それも、何かしら最悪な夢。今でも目を閉じれば、暗闇と、背筋も凍るほどの冷笑と、心を抉りとられてしまうような悲鳴が聞こえてくる気がする。

担任の先生が、荷物をまとめて教室を出る。それに合わせるかのようにクラスに喧噪が次から次へと生まれ、椅子が教室の床を擦る音がそこかしらに発生する。それが少しうるさい。

みんな、口ぐ口に楽しそうな談笑をしつつ、鞆を手に教室を出て行く。今日も学校が終わった。

私は頭をぶるぶると振ると、自分も荷物の準備を始める。当然、私の周りには誰もいない。ともに帰る友達も、ましてや話しかけてくれる友達すらまともにいない。話しかけてくるのは、せいぜい事

務的な内容で、それもほとんどが女子生徒だった。女物の制服を着て、認めたくはないけれど、女の子みたいなこの顔や、この小さな身長では、今のところどこからどう見ても白羽学園の女子生徒にか見えないのだ。だから、女子生徒との会話が多くなるのは必然的とも言えた。

……昔みたいに簡単にはれてはいない。それなりに、仲が険悪なわけでもなく、話しかければちゃんと笑顔で答えてくれる。昔よりは、今のところはちゃんとした学校生活が送れていた。少なくとも、今のところは。

男子生徒が何故話しかけてこないのか。それは、いくらそう言うのに疎い私でも耳にはさむ『高嶺の花』という言葉。女子生徒の羨望や嫉妬の混じった視線と一緒に、好奇心旺盛で健全な男子生徒たちの好奇の視線。これらが意味するところは、まあ、いつものことで、お生憎様としか言いようがない。

だって、あなた達が追ってるのは女性の尻ではなく、男の尻なのだから！

そつと心の中で誰にも聞こえない絶叫をひとつ。まあ、つまりはそう言うこと。それを知ってもな追いかけてくる、いわゆる”そちらのお方”であれば背筋が凍るものがあるのだけれども。

ともかく。

これは、今までと対して変わらない事柄だった。

——そう、正体がばれる、その時まで。

もつとも、男女ともに話しかけてこないその原因の一端は、主にこれが原因だとは思っただけど、要するに私自身に『話しかけるな』『近づくな』という無言の壁を作っているからだと思う。すごく寂しいのだけれども、でも、小中と浴びせられてきた誹謗中傷罵詈雑言、その他様々な異物を見るかのような奇異な視線に比べれば、よほどマシだった。誰とも関わらなければそんな秘密は漏れようがない、というのが高校を機に私がした、いわばいまさらともいえる愚策だったのだ。

家路に嬉々とした声と足取りで教室を出て行くクラスメイトたちを横耳に入れつつ、私は窓から外を眺める。

「ほう」

ため息ではない、しかしそれに近い息だけの声。眺めた空は、寒々とした私とは裏腹に、春の陽気に満ちていた。

ふと、昨日のことを思い出す。

数人の暴漢に襲われそうになったところを救ってくれた、あの少女の姿がまぶたに浮かぶ。

第一印象としては、まさに嵐――いや、さっそうと草原を駆け抜ける一陣の風のようなだと思った。

そう思うのも、我ながら仕方ないんじゃないかな？

何せ、気がついたら、私を襲っていた暴漢の一人が忽然と視界から消え失せ、変わりにその場所にすらりとした綺麗な足が空中にあったのだ。現れたその足が、暴漢を蹴り飛ばしたと理解するまでに少々時間がかかるほど、それは見事な蹴りだった。

その蹴りととともに、不意になびく突風のように現れた彼女。それから彼女はさらに、そして実にあっけなく二人いた他の暴漢に、その竜巻のような蹴り技を浴びせ、あっという間に彼らを地にへと伏せてしまったのだ。

そして、彼女はまだ七人ほどいた、大学生ほどの歳だと思われる男どもに、何も臆することなく立ち向かった。途中、そういった下劣な奴らの上等手段の代表例ともいえる、ナイフを持ち出した輩もいたが、彼女はそれに全く怯むことは、一瞬たりともなかった。

それを眺め、私はただただ茫然としていた。生身の人に術をかけることも、不用意に反撃をして、誤って”殺してしまわないよう”力をセーブするよう母上にきつく言われていた私。普通の人には何も手を出せない私は、そんな彼女に手を貸したくてもただ茫然と見るしかなかった。

もちろん、そんな彼女は私の助けなど微塵も必要としておらず、そして実にあっけなく私を助け出してくれたのだ。……途中、思わず力を出してしまうという失態を私は犯してしまうのだけでも。あのあと、母上にこっぴどく説教を受け、それから訓練という名の、明らかにそれにとどまらない地獄が待っていたのは言うまでもありませんでした。あの酷さといったら、もう――コホン。

昨晚の悪夢を振り払うかのように首を一度振り、もう一度彼女の姿を悪夢の上に塗りつぶすかのように思います。

彼女は、とても綺麗だった。セミロングの、茶と黒の中間色みたいな色のさらりと流れる髪。筋の通った鼻。薄く、花卉のような桜色の唇。意志の強さが滲み出ているような瞳。彼女の顔の造作には、ゆがみや不備などのうなものがまったく見られなかった。そして、全身からあふれ出ている、背筋が伸びるような凛とした雰囲気。何から何まで完璧と幻想させるその姿に、私は息が詰まる思いがしたものだ。

素直に、綺麗だと思った。ただ、そのあまりにも完璧なその美しい顔立ちは、完璧すぎであるが故に中性の顔だちをしており、さらにその身に纏う空気が凛々しく、そのせいで彼女は好青年のように私には見えたのだ。もっとも、後に”男性”とみ間違った私は彼女に叱られるのだけでも。

彼女は自らを真琴まことと名乗った。残念ながら、焦りのあまり名字の部分は聞き逃してしまったのだけど、そんな彼女の名は私の心に深く刻み込まれたのは言うまでもない。

……が、彼女は私のことを覚えてはいない。それは何故なら、『私がそこにいた』という記憶を彼女の中に封印したから。

「……はあ」

今度こそ溜息をついてしまった。

仕方がなかったのだ。たとえば、こちらの失態とはいえ、彼女に”

力”を見せてしまったのだから。

”こちら”と彼女の住む”世界”は別のもの。

気がついてしまったら、知ってしまったら、それは”こちら”の扉を開きかねないのだ。それはあまりにも危険すぎる。稀に、無意識に自ら扉を叩いてしまう者もないこともないのだけれど、そういった者は大抵の場合、ただ酷いことになってしまふ。だから、彼女がそんなことになってしまわないよう”私という存在”の記憶を封印した。個人的にはすごく悲しく、またさみしくもあるのだけれど、やはりこれはそのままにしておけなかったのだ。

外は、春の陽気でとてもぽかぽかとしているようだ。気がつけば教室も少数のグループしかないかった。

……帰ろう。

そう思い、私は鞆を片手に立ちあがった。

突然の訪問者に、教室にいた全員の息が止まった。

私が立ちあがったのとほぼ同時に、教室の前の扉が勢いよく開かれた。思わず固まる。その訪問者を確認した、他のクラスメイトも同様に固まり、教室があたかも水で打ったかのような沈黙に包まれる。心なしか、なんとも言い難い緊張感があたりを満たしているようだった。

その乱暴な訪問者は、昨日出会い、そして”私という存在”を忘れていたはずの彼女——真琴さんだった。

第24話 鈴の音が伝える鼓動（後書き）

どうもです。

嘘吐き不誠実「有言無実行」な作者こと灯月公夜です。

毎度のこともいつもながら、すでに恒例となってしまった感がびしびしと感じるのですが、本当に毎回毎回毎回お待たせばかりしてしまい、心よりお詫び申し上げます。

とりあえず、生きてます。高校3年生にも無事進級でき、晴れて華の受験生です（涙）

そして現在中間テストまったただ中。今日も昨日もテストでした。明日も明後日もテストです。現在世間は何かと大混乱ですが、しかしそんな影響を受けてもなおうちの学校は健在であり、テストが激しく恨めしいこの頃です。テストなんて滅んでしまえ（心の叫び）

さて。

そんなことはともかく、久々の更新ですね。本当に申し訳ないです；しかもこの度の内容は、大半の方がおそらく「はあ？」と思われたのではないかと。こうしてあとがきを書きつつも、内心びくびくぶるぶるです。毎度のことですが、このような場に、そして読んでくださっていただけてる読者の皆様に満足の頂けるものをかけているのかという不安もあり、また「読んでいただけている」このことだけでも幸せを感じております。

むっちゃくちゃ遅いですが、それでも今回も読んでくださって、本当にありがとうございます。いつもいつも申し訳ないと感じつつも、この作品へと訪れてくださっている方を確認するたびに、どうしても頬が緩んでしまいます。本当に感謝してしたりないくらい感謝してます。こんな青臭い約束も守れないようなダメ野郎ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

最近は、また何度目かの執筆の計画を立て始めました。またまた途中で放棄しかねませんが、とりあえず頑張って参ります。

『この作品を完結させる』

これだけは、本当にこれだけは、僕自身に何かが起きない限り、絶対に守り抜きます。この約束さえ守れなければ作者を辞めると思っていたいただいても構いません。それぐらい、これだけはどんなにも遅くならうとも誓って守り通します。

よろしければ、僕のこの何度目かもしれぬ計画が破たんしないよう、後ろからひっぱたいてやってくださいませ。一言で構いません。メッセージをいただければ飛び上がって喜びます。

ではでは。今回も今回とて、むちゃくちゃに長い後書きを失礼いたしました。

テストが終わってもなお、「受験」というエベレスト並みに果てしなく高い壁が立ちふさがっており、またブログにて触れましたが、リアルの仲間間でちよつとした企画があるので、これから遅くなること予想されます。

この作品は、数あるなろうの素晴らしい作品の中、ふとした拍子に思い出していただければ、僕はもうそれ以上言うことは何もございません。

なんか全体を通して湿っぽい感じになりましたね^^

なにはともあれ、改めまして、どうぞこれかも末長くよろしく願いたします！

第25話 鈴の音が伝える脈動

ひとまず、何が起こったのだろうと思った。

真琴さんはクラスをきよきよと、他のクラスメートの目をまるで気に掛けずあたりを見渡し、そして私と視線が合うとぴしりと固まった。目が一瞬、大きく見開かれるのが、遠目からでもわかった。

しかし、それ自体も一瞬のことで、あっという間におそらく平常時であろう表情に戻った。

すると、真琴さんがクラス内に足を踏み入れる。

クラス中からの視線をまったく気にもかけず、切り詰めた妙な緊張感の中、それでも軽やかに。合わせた視線を微塵もぶらすことなく、ゆったりと、それでいて美しい足取りで私の元へ近づいて来た。水を打ったような静けさの中、彼女の足音だけがこつこつと響く。

そんな真琴さんを遠くから眺めるような気持で、私は脳裏に浮かぶ疑問の回答を探そうとしていた。

なぜ彼女がここに？

まったくもって意味が分からない。分かりようがない。

真琴さんが、私の目の前まで、力強い瞳を宿したままやってきた。互いにとって、程よい距離で止まり、その瞳が私を見つめる。言葉も声もなく、緊張感のある沈黙が訪れる。

ごくりと生唾を飲み込む。やはりおかしい。彼女は昨日、確実に私の術にかかり、私という存在を忘れていたはずだ。しかし、この瞳はまるで私という存在を知っているかのようにも見える。いえ、どちらかと言えば、この瞳は――――

「えと、何かご用でしょうか？」

静まり返るクラスの中、外の下校の賑わいとはあまりにも違いす

ぎて、二つを結び世界の中に大きな溝が突然生まれてしまったように、外の世界が遠く感じられる。

目の前まで来た彼女は、やはり平均女性よりも高く、モデル並みだ。比べて私は、平均男子高校生はもつてのほかで、むしろ平均女子高生並みの身長しかないとため、どうしても彼女を見上げる形となってしまうた。やはり、この身長差は『男』としては悲しいものがある。

私の問いかけに、初めて彼女の瞳に揺らぎが生まれる。と思うと、つい、と視線が外れる。

やはり、と思った。この人は、この瞳は、私という存在を覚えていたわけではない。どちらかと言えば、根拠も確信も何もない答えを探しているような感じといった気がする。

「あなた……」

真琴さんが躊躇いながら口を開く。そして、確信のない不安が揺らめく視線がぶつかる。

「……昨日の放課後、私と、どこかで会わなかったかしら……？」

予想が確信に近づく、彼女の口から紡がれた言葉。やはり彼女は私のことを覚えてはいないようだ。いえ、この場合ですと陽炎のようにおぼろげに記憶の中で揺らめいている感じでしょうか。

なら、よかった。私という存在を完全ではないとはいえ、忘れていたように。

微妙な安堵と、多少の落胆の入り混じった溜息を胸中でそっと零す。

しかし、ややこしいことになりましたね。完全に封印したと思っていたのですが。修行不足のようです。

ともかく、今は気持ちを切り替えよう。彼女には申し訳ないのだ

けれども、やはり彼女はこれ以上私に関わってはいけない。
息を少し気づかれぬ程度に大きく吸い込む。

「いえ、そんなことはないかと……。人違いではないでしょうか……？」

真琴さんの表情が急激に曇る。ズキリと胸のあたりが傷んだ。

「……そう」

ぽつり、と真琴さんは聞こえづらいほどの、囁き声のような小さな声を漏らした。表情は見るからに影がさしていた。

「……」

またしても、先ほどよりも重厚感のある重苦しい沈黙が流れる。クラスメイトはおろか、このクラスから音というものがまるで聞こえてこない。誰も何も言わないし、動かない。本当に、外から聞こえてくる喧噪のせいで、このクラスだけが異次元にあるかのような気がしてならない。

これでいいんだ、と他でもない自分を納得させるためだけの独白が脳裏をかすめる。そう、これが一番いい。彼女は、”こちら”の世界に在るべきなんだ。

真琴さんはもう何も言うことがないようで、視線すらもう合わない。かすかにうつむいているその顔は、やはり暗かった。

私も彼女に負けず劣らずといった心境で、しかし表情にはおくびにも出さず肩をすくめた。

そして、帰るために机の横にかけてあったカバンを手取る。がちゃがちゃといった、普段ではまるで気にしない音がばかに大きく、クラス内を反響した。

「えと、それでは私はこれで。失礼します」

ぺこりと頭を彼女に下げる。そして、すぐさま彼女から視線をそらすと、出口に向かって歩き始めようとした。何より、これ以上は堪えがたい、言葉では表しにくい何かが胸中で蠢いていたのだ。

「待って！」

後ろを向いた背中に突如かかった制しの声に、驚き思わず後ろを振り返る。

そして、まるで仲直りをしようとしている友達同士のように、再び視線が交わる。……そんな経験、私はないというのに。

「ど、どうかいたしました？」

おずおずと口を開く。彼女の必死な視線が、私を貫く。

「あの……その……」

決死の覚悟をした戦士のように真琴さんは口を開き、かと思えばまた口を閉じてしまう。それを何度か繰り返し、やはり何か迫られるかのように必死に、そしてどこか泣きだしそうなほどに真剣に口を開いた。

「お願いがあるんだけど……ちょっと話だけでも聞いてくれないかしら……?」

思わず目を大きく見開いた。息が詰まって、呼吸すらままならない。

この人は何を突然……

「来て。別のところで話しましょう」

「あ、ちょ、ちょっと、待っ——」

彼女にとっての峠を越えたのか、それとも覚悟が決まれば躊躇しな性格なのか。

自身が投下した爆弾により騒然となっているクラスを完全に無視し、先ほどもでおずおずとした雰囲気は何処にか消え失せ、強引に、そして有無も言わず、私の返答もなんのその、真琴さんは私の手を握るや否や教室からあつという間に連れ出してしまった。握りしめられた右手は、固く、何より痛いほどに強かった。

ガヤガヤ、ガヤガヤ、というクラス中の声を遮るようにぴしゃりと教室のドアを閉める。

そのまま、私の手をしっかりと握りしめたまま歩き始める真琴さん。私はただただこけそうになる自分の体をなんとかしながら、足取り危なく彼女に引っ張られついていく。とっさに掴み直した自分の学生カバンが足にぶつかり、余計に転んでしまいそうだ。

暴れ馬に乗った人の気持ちとはこんなものだったのだろうか？

まだ多少残っている学生の注目を一身に集めながら、二人してあつという間に校門をくぐり外へ。しかし、真琴さんはその歩みを止めることなく、ずんずんと歩を進めていく。はんば、小走りのようだ。

「ど、どこへ向かってるのですか？」

未だにこけそうになりながら、何とか訪ねてみる。

と、ようやく真琴さんの小走りのような速度が緩み、普通に歩く速度に変わった。

それでようやく私は体制を立て直すことに成功する。固く握りし

められた右手は、痛いほどに強いままで、それは変わらなかった。
私は真琴さんの横に並ぶ。手は繋いだまま。恥ずかしさに手を離したくなるも、振りほどこうにも振りほどけそうにない。

「とてもいい所よ」

ウインクしながら、少し上から真琴さんは答えた。

しかし、それ以上は私の追隨を許さないとばかりに、歩をずんずんと進めていった。

だから私は、そんな彼女に引っ張られる形で、黙って付いていくしかなかった。

初めて握られた女の人の手は、やはりとにかく痛いほどに必死で強かった。

第25話 鈴の音が伝える脈動（後書き）

約一年ぶりの更新。果たして待っていただけた方はいくらいらっしゃるのか。。。。

ごめんなさいっ（土下座）

とりあえず、約一週間後には次話を更新します。必ず。
今日は短いですが、時間がないのでこれにて。

本当に申し訳ありませんでした。
そして待っていたいただいた方々、本当にありがとうございました。

第26話 鈴の音が伝える胎動

そして辿り着いてのは、どこにでもある普通のファーストフード店。

ちなみに、もちろん私は初来店。

そもそも友達のいない私にとっては、この寄り道すら初体験だったりもする。

店員に連れて行かれ、真琴さんと向かい合わせになるように座る。結局こうして、真琴さんから逃れられないまま今に至っている。

正直、ふかふかのイスに座っているにも関わらず、まったくリラックスできない。

これは、なんですか……？

今更ながら、本当に今更ながら、そして何より気持ちを改めて私はそう思う。

「付き合ってもらっちゃってごめんね。今日は奢るから、なんでも注文しちゃってよ」

「は、はあ……」

向かいで真琴さんが言いながらメニューを手渡ししてくる。なんとも言えぬ居心地の悪さに、私は軽く俯きつつ返事でもない返事で答え、彼女からメニューを受け取る。

とりあえず、メニューを開いてみる。当然ながら、商品の写真と値段、それからカロリーなんかが表示された文面が映る。

しかし、私にとってはここは初めての場所で、そもそも外食の経験さえないからどうしたらいいのかさっぱり分からず、困り果ててしまった。

ちらっと、向かいの真琴さんを見ると、彼女もまたメニューをとても楽しそうな表情で眺めていた。心なしか、鼻歌さえ聞こえて

きそうな気さえする。

そんな感じで真琴さんを密かに観察していたら、ふいに真琴さんは顔をメニューから上げる。

ピタッ、と視線が合う。

「ん？ もう決まったの？」

「あっ、い、いいえ、まだ……です……」

「そう。気にせずなんでも頼んじゃってね」

「はい……」

真琴さんは楽しそうに、私はおずおずと、二人してメニューへ戻る。それから今度はなんとかメニューを選んでみる。

そもそもがそもそも、私はこの店の何がオススメだとか何が有名だとか、何にも知らないのだ。第一、食欲すらないので食べたいものすらない。だから、あんまり量がなくて、金銭的にも大丈夫だと思われる食品から適当に選ぼう。あとは野となれ山となれ、です。

「もう決めた？」

「は、はい。一応……ですけど」

「了解。——あっ、スミマセー！——注文お願いしまーすっ！」

私の答えを聞いた真琴さんは近くにいた女性の店員さんに声をかける。嬉々とした表情で、店員さんに向かって片手を大きく上げている。すると、それに気付いたらしい店員さんが近くに寄ってきた。

「お待たせしました。ご注文をどうぞ」

腰にあるポーチから何やら機会を取り出すと、店員は笑顔で訪ねてくる。それになんとかなく私は委縮してしまい、小さくなる。

「あなたから注文して」

「え？」

「ほら早く」

不意すぎる振り。

そんな無茶苦茶なっ!？

「えと……あの……その……」

焦りに頭がパニックに陥る。焦れば焦るほど先ほど目を付けたメニューが見つからなくなる。焦っちゃダメだ焦っちゃダメだ、と自分に言い聞かせる。店員と視線が合う。顔の筋肉の収縮率的に若干不自然な笑顔が私を見つめていた。心臓がどくどくと激しく脈打つ。早く何か言わなくちゃ。真琴さんにも、店員さんにも申し訳ない。早く、早く、何か注文しないと。何か、何か、何か、何か。

「あ、あの、何かくださいっ!」

「……は？」

「何かと言えば何かですっ! 何かくださいっ!」

「はっ、はい？」

店員さんが目を大きく見開き素っ頓狂な声を上げる。

そこで私は我に返る。

「あ、いえ、その、あの、その、だからその、あの」

……自分の愚かさに失神してしまいたくなる。
けれど今ので頭は完全に冷えた。背筋とか、体中冷え冷えとしてしまったのだけれども。

「……これを、お願い、します……」

俯きつつ、メニュー内のある写真を指差す。和風パスタ。山菜がふんだんに使用されているみたいで、とてもヘルシーそうだ。そう言えばで選んだ、初パスタ。

恥ずかしさのあまり、穴に埋まっていきたい気持ちに駆られる。

「か、かしこまりました」

引きつった作り笑いがきつい。店員さんは手元の機械に何かしらの操作を加える。

「ふっ、ふふふ、ふふふふふ」

噛み殺した真琴さんの笑い声。
ますます私は小さく委縮する。
もうお願いしますから帰らせてください。

「そちらのお客様のご注文は？」

「じゃあ、私も同じものをよろしくお願いします。あつ、ねえあなた」

笑顔でさらりと自然に店員さんと対話していた真琴さんがこちらを見る。

「ドリンクバーはいらないの？」

「そんなこと、言われましても……」

残念ながら、それが何を指すのかがわからない。当たり前のように訊かれたということは、それが普通なのかな？
だんだん自分の

無知度に腹が立ってくる。

しかし真琴さんはそんな私を察したのか、にっこりと笑って店員さんの方へ振り返る。

「それじゃ、セットで二つ、ドリンクバーもお願いいます」

「かしこまりました」

再び店員さんが機械を操作する。

「ご注文は以上でしょうか？」

「はい、それをお願いします」

「かしこまりました。では、少々お待ちください」

そして手を前で軽く添え、きっちり60度で一礼すると店員さんは私たちから離れ、厨房へと向かって言った。

「……ふう」

思わず本気のため息をつくど、ぐったりと後ろのイスに倒れこむ。体の内側が熱い。熱がじわりじわりと内側からこみあげてくる。掻いた冷や汗も合わさり、とにかく気持ち悪い。

「それでは、そろそろお伺いしてもよろしいですか？」

しかし、おかげでもう嫌な緊張はしなくなった。気持ち的には最悪ですが、そろそろ訊いてもよい頃。身体を起こし、対面の彼女をうかがう。

「どうして、私をここまで連れてきたのかを」

すると彼女は、今まで楽しそうにしていた表情を少しだけ曇らせる。

「……そうね」

テーブルの上に両肘を置き、手を組むと、目線の少しその合わせた手へと下げる。

反対側に座っている私は、姿勢を正して静かに待っていた。

「その前に少しだけ話を聞いてもらえないかしら」

ぽそりと、それでも決して小さすぎることのない声で彼女は言い、にっこりと笑った。

「こう言ってしまったら誤解やら語弊やら、それこそ所詮私みたいな人種はこんなものかと思うかもしれないのだけれども」

そう前置きをすると、少し心痛が声色に滲んだような声で真琴さんは話し始めた。

「私……私ね。これまで一度も——ただの一度も自分から『友達になりましょう』なんて、そんな陳腐なセリフを言ったことがないのよ」

ふふ、と軽く鼻を鳴らして、彼女は少し悲しそうにほほ笑む。

「だって、そんなこと言う必要がなくてね。いつもいつも、私は自分から望まなくたって、いっぱい『お友達』が寄ってきてくれてね。ただ、じっとその場所その場所、気がつけば誰かしら何かしらいてね。とにかく、小さい頃から私の周りには、優しくて賢くて

頼もしくて、かつこよくて綺麗で楽しくて面白くて、そして、飽きなくてすることがいっぱいあって周りには見渡す限りの人がいて遊ぶことは尽きなくて除け者にされたことはなくていじめられたこともなくてどこへ居ても何をしていても声をかけられて——そんな風に私のもとには、いつのまにかいつも自然と人の群れができていたわ」

「……」

無造作に真琴さんは目の前にあったコップを持ちあげる。そして、なにかを水に写して、それを転がすように——弄ぶかのようにコップの中の水を揺らす。その目は、水を通した向こう岸を眺めているようだった。

「楽しかったわ。得も言われぬほどに。みんなみんな『お友達』。私がなにもしなくても、望まなくてもみんな私のもとへ来てくれる。『お友達』になってくれる。だって、それは『私』だから。私がいみんなに必要とされてるから、みんな私のもとにやってきてくれるんだ。私がみんなと一緒にいて楽しいと思われてるから、みんな私のもとにやってきてくれるんだ。私がいみんなに愛されてるから、みんな私のもとにやってきてくれるんだ。私は痛い。私はみんなにとってかけがえない存在なのよ。私のもとには人が自然と集まってくるのよ。だから、私は痛いんだ、っね」

コップを机に置き直して、真琴さんは視線を私に戻し、少し口元に笑みを浮かべる。その目の奥には、寂しげな陰りが見えた気がした。

「でもね、ある日私は気付いちゃったの。どうしてこんなに私の周りには子どもも、ましてや大人の人たちがこんなに私の元にやって来るのか、その理由って奴をね。『そうなんだ。みんなみんな、』

私』を見て、友達になってくれたんじゃないくて、『私の家柄を見て』友達に成るように大人に言われて、あるいはそうすることで自分に利益を求めて『友達』という関係を望んでいたんだ』ってね。気付いてしまったら、もう自分ではどうしようもなかったわ。不意に、ひとりで真っ暗な井戸の底へ突き落されたような気分、とでも言えばいいのかしらね」

そこで一端言葉を切ると、しばし私たちの間に無音の沈黙が訪れた。店内の喧騒が、今はとても遠い。

私は、真琴さんの言葉を反芻していた。それは果たして、本当にひどい事なのだろうか——と。

利害関係。打線的な付き合い。本音の隠した欺瞞に満ち溢れる会話。

それは、確かに気持ちのよいものでは決していないだろう。それはわかる。関わりたくない、遠ざけたい、むしろ忌諱きいしたいものだということは。

それは理解できる。理解できているつもりでは——いる。

けれども、それはこれまで”一方的な悪意しかほとんど受けたことがない”私にとって、それは特別ひどいことだとは到底思えなかった。

むしろ、欲張りだという憤りすら覚えてしまう。

真琴さんは、視線を斜め下に移して、それでも続けた。

「本当はね、みんながみんなそんなつもりで『友達』になってくれたわけじゃないって、思ってたの。信じていたかったの。それでも一度そう思ってしまったらもう自分ではどうしようもなくてね。——全部、自分で何もかも壊してしまっただわ」

呟くように言ったその瞳は、光を失っていた。最後の一言に、場が確かに冷えたのを私は知覚する。例えばそれが、比喩的な意味合い

であつたのであろうとも、それはもうそれだけで十分だった。

真琴さんは、本当に表情の豊かな人だと思った。

怖気づいていたり、泣きそうになったり、必死だったり、強気だったり――怯えていたり。

「私は……」

少し青ざめた唇を震わせ、絞り出すように真琴さんは口を開く。

――もう、我慢できなかった。

「だから、」

真琴さんを遮り、口を開く。

「だから、それがどうして私をここに連れて来た理由と繋がるのですか？」

知らず、切り捨てるような口調になっていた。

「どうしてって……」

私の問いかけに、真琴さんはびくりと肩を震わす。

私は今、珍しく少し怒っていた。

自分の元に多くの人が利益や打算で近づいて来ていて、それを氣付き、結果疑心暗鬼に陥り、自分から関係を壊しておきながら、ひどく落ち込み傷つき、何故、そんなにも被害者面をしているのだろうか。

今まで信じてきた人たちに、悉く裏切られたからなのだろうか？
今まで信じてきた毎日が、ありもしない幻だと気がついたからだろうか？

今まで信じてきたもののすべてが、音を立てて崩れ落ちてしまった
からなのだろうか？

これらの価値が、いかに大事なのかは——わかる。

それこそ、自暴自棄になってしまいうようなことだということは、
想像に難くない。

同情の余地だって、あるのかもしれない。あるとは思う。

——それでも、”私には”。

“私にはそんな幻を、幻だと知っていながらも見ることしかでき
なかったのに”。

確かに、真琴さんの経験は辛いことだと思う。あまりにも、辛す
ぎることだとすら思う。

でも、だけれども、それでも真琴さんの言う『楽しかった毎日』
は全部が全部、夢現ゆめうつの出来事だったのだろうか。それらはすべて、
夢だったのだろうか。

それだけじゃ、絶対じゃない。

「真琴さんが、これまでどのような体験をされてきたのかは、よく
分かりました」

過去は変えられない。人の思惑も決して変えられない。

たとえば真琴さんが言うことが、真実だったとしても、それが過去、
自分との関わりすべての裏切りだったとしても。

「とても辛い体験だと思います」

過去は、確かにそこにあったはず。

幻でも夢でもなく、確かに、肌で感じられるほど身近に。それは
決して夢現ではない、現実の世界での話のこと。

「ですが、だからと言って、相手のすべてを、過去を、過去の自分の思い出すすべてを否定することはよくありません」

過去は確かに変わらない。

それは、過去に自分が抱いた気持ちとて、決して例外ではない。その気持ちを抱けるだけの経験があったことは、決して夢なんかじゃない。

相手の自分に対する裏切り行為は、それはそれとして受け取ることに、なんら疑問はない。

けれども、だからと言って自暴自棄になって、過去、自分が相手に抱いた気持ちすべてを否定するのは、それは絶対にしっちゃいけないことだと思う。

「人はみな、何かしら思って、感じて、周りの人々と接し合っているのではないのですか？ 真琴さんも、周りの人々に対して、希望や願い、苛立ちや不快感を持って、それでもなお接しているのではないのですか？」

私は真琴さんの、怯えるような瞳を強く見据えて続ける。

八つ当たりに私は続ける。

それは同時に、私のずっと探していて、ずっと切望しているものでもあった。

「それって、きっと”普通”なことだと思います。打算的な付き合いが、嫌なのは理解できます。過去、自分が相手に抱いてきた気持ち、裏切られたら辛いことも理解できます。でも、それって当り前、”普通”なことなんじゃないんですか？ 自分が相手に向けた想いを、相手が自分の思った通りに受け取ってくれているかなんて、誰にもわからない。どんなに願っても望んでも、本当の意味で自分

を理解してくれる人なんていない。自分がこのような想いを相手に向けたからと言って、相手が自分と同じ想いを返してくれるなんてそんなことはありません。どんなに、自分のことを好きになって欲しくても、そう心から願ったとしても、相手が自分を好きになつてくれるなんてことは、決してないんですよ」

過去のこれまでが蘇る。

小学生時代のこと。

中学生時代のこと。

私の今までのこと。

そこには、人との繋がりを求め、願い、渴望して止まない自分がいた。

「でも、過去がどうであれ、その時の自分の気持ちは――それがたとえ刹那的なものであっても、確かな疑いようなものなんじゃないんですか？」

変態だと罵られた。

気持ち悪いと吐き捨てられた。

頭がおかしいと後ろ指を差された。

こっちに近寄るなと石をぶつけられた。

異質な物を見るかのような目で見られた。

それでも私が、ただの相手の目に”女の子”として映っている間だけは、”友達”として受け入れてもらえていた。

なんでもない会話をした。

なんでもないことで笑い合えた。

なんでもないことがとにかく嬉しかった。

なんでもないことなのに、自分が彼らの仲間の一員でいられたような気がした。

それらは、自分が”女装している男”という事がばれるまでの、

ほんの刹那的な幻ではあったのだけれども、それでも幻とはいえ、私を感じた気持ちは嘘なんかじゃなくて、それは確かに本当の気持ちだった。

罵られたら、辛かった。

吐き捨てられたら、心が引き裂かれるかと思った。

後ろ指を指されたら、自分のすべてが否定されたような気がした。石をぶつけられたら、とても痛くて、一刻も早く彼らの前から消えてしまいたいと思った。

異質な目で見られたら、そんな目で私を見ると、心の中で誰にも聞こえぬ声で泣き叫んだ。

それでも、たとえ”女装男子”という事柄がばれるまでの刹那的なものであったとしても、私は小学生の時も中学生の時も、とにかく楽しくて嬉しくてしょうがなかった。

こればかりは、絶対に嘘なんかじゃない。まぎれもなく、私の中にある真実。

だから、すべてを否定している嫌いがある真琴さんが、どうしても許せなかった。

それが、どうしようもない、八つ当たりだったとしても。

自分なんかよりも、よっぽど恵まれた時間を過ごしてきたはずなのに。

自分なんかよりも、よっぽど恵まれた生活を送れることができるはずなのに。

私には彼女が羨ましくて――だからこそ許せなかった。

あなたは、人と繋がることのできるチャンスに、私よりもはるかに恵まれているはずなんだ。

「それなのに過去を否定して、過去の自分を否定して、周りの人々全員を拒絶して。それなのに、そんな――自分が一番不幸だと言っている被害者面をいつまでもしないてください」

切り捨てる様に、私は真琴さんに言い放った。

真琴さんは眉を顰め、今にも泣き出しそうな顔で、唇を固く引き結んで俯いてしまっていた。

視線が合う事は、もうない。

沈黙。

机の下で、真琴さんは両手を強く握りしめているようだった。身体が、わずかに震えていた。

少し前までいた教室の中よりも、数倍、十数段上に行く、ひどく重たい沈黙。

お店の周りの音を遠くに置き去りにして、無音の重圧を感じながら、私たちは時を刻む。

「……そう、ね。確かにその通りだわ」

しばらくして、真琴さんが静かに口を開いた。

そして、顔を上げ、多きく深呼吸をしたのち、私を強い目で見つめた。

「それらを踏まえて言わせてもらおうわ。あなた、私と友達になってくれない？」

ノドが詰まった。

まさかこんな展開になるとは。

私がとった行動は？

——そして、世界が歪んだ。

第26話 鈴の音が伝える胎動（後書き）

継続して、定期的に更新したいのでけれども、なかなか難しいものです。ほんとスミマセン；

なんか最近、拙作書き始められたのにまたスランプになったしまつたようですorz

一応ストックは作っているので（少量ですが）、あと二、三話は大丈夫かと思われませんが、今後もどうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0135d/>

☆★妖魔封印物語★★

2011年11月11日09時25分発行